

功成頭白早歸來。 功成つて頭白早く歸來し、  
共藉梨花作寒食。 共に梨花に藉りて寒食を作さん、

一百五日に當る節を寒食と曰ふ、是の日火食を禁ず、晉の忠臣介子推が焚死せし日なるを以て、後人哀んで之を爲すと云ふ、

【題義】程六は程子元、即ち坡公に於て表弟に當る、坡公が母は程氏なり、程家の第六子なれば程六と稱す、今楚州に知事と爲つて行くを送る、

【詩意】程家には今日炯炯明明たる珠璧が二箇ある、當年は其親屬關係として蘇程石の三老は特に世に貴ばれし人である、其の三人の中、誰でも道を行くときは、行人が道を譲りて敬避したものである、又一縣の刺史でも、此の三老が訪問する場合は、臆寫を倒にしてまで懽迎せしものである、其の時代は我も子も、共に兒童として遊び三昧、狂走して唯人に従つて梨や栗を覓むのみ、而かも壯健なる黃犢の如きも、或は死し或は老い恃むべからず、白駒は堂堂と隙を過ぎ、人の爲に決して時間を長くしては呉れない、兒童の時遊びし地の醴泉寺も、今日では古刹と爲つて、橘や柚が實を垂れ、石佛山は高く當時見し松も櫟も陰の暗くなる程老いた、依然たるものは本處に依然として人は我も子も皆萬里の外にて相逢ふの境遇である、相逢うて一笑するのみ、何ぞ曾て千憂の集來することを解せんや、子は今方に楚州を料理する役と成り、老手に風を生ずる意氣にて刀筆吏の區區たるを謝脱する、我は正しく毫を含んで紫微閣に勤務する人である、所が眼を病んで檄文を艸する役は困しい、

いつまでも三位だの四位だのと云ふ印綬の爲め餘年を繋がるるに忍び得ない、官を罷め去つて郷に歸り祖先の墳墓を掃除する日も近きにあらんと思ふのである、君も功成り名遂げなば、一刻も早く歸來して、二人にて共に梨花に對藉して寒食の節を作さんや否や、

【餘論】此の篇を以て、和蔣發運一詩の五律に比較すれば、別人の手に出づるの感あり、曉嵐評して層次井然、有情文相生之樂、又曰く、濼河起處作結、章法完密と、老泉が送三石昌言一引に、與三羣兒一戲三先府君側、昌言從旁取棗栗啖我の語あり、此の篇の五六二句は全く父の文より得來る法、後生坡公が詩の本領を知らんと欲する者は、宜しく此の篇を三讀すべきである、

碣石菴戲贈湛菴主 碣石菴に戲れに湛菴主に贈る

保康橋上夜觀燈。 保康橋上夜燈を觀る、  
碣石巖前夏飲冰。 碣石巖前夏氷を飲む、  
莫把山林笑朝市。 山林を把つて朝市を笑ふこと莫れ、  
老夫手裏有烏藤。 老夫手裏に烏藤あり、

【題義】坡公の自注に、湛相國寺僧也とあれば、相國寺の維那とか、知客とか、典座とかの役を務め、

【字解】〔一〕保康橋 汴京の蔡河に架せる橋、〔二〕夏飲冰 莊子人間世篇に、葉公子高、問于仲尼曰、吾食也、執粗而不膩、暴無欲、清之人、吾朝受命、而夕飲水、我其內熱與とあり、〔三〕烏藤 杖の異名、

病眼 楞嚴經に病眼空華とあり、眼前がチラチラして字體の分明ならざるを曰ふ、〔四〕寒食 冬至より



寺主にはあらず、碣石菴を以て、其の住菴と定めしならん、

【詩意】 保康橋上繁華の處に於て夜觀燈する者は我である、碣石巖前の寂靜なる處に於て夏氷を飲む者は菴主である、其の寂靜なる山林の清を把つて朝市の熱に奔る者を笑うては不可ぬ、若し笑ふに於ては老夫は空拳ではない、手裏に烏藤を持つて居るぞ、

【餘論】 此篇は、意義を種種に取る事が出来るが、余は前意を以て解したのである、題已に戲とあり、禪林にて重器として用ふる拄杖の活用を試みられたものと思ふ、烏藤を以て詩に用ふるは、坡公を以て初めと爲す、

元祐元年二月八日朝退獨在起居院讀漢書儒林傳感申

公故事作小詩一絶

元祐元年二月八日朝より退き、獨り起居院に在り、漢書儒林傳を讀み、申公が故事に感じ、小詩一絶を作る

寂寞申公謝客時、寂寞として申公客を謝する時、

自言已見穆生機、自ら言ふ已に穆生の機を見ると、

縮臧下吏明堂廢、縮臧吏に下りて明堂廢す、

【字解】 (一) 申公 魯の人、楚の元王と與に、齊人浮丘伯に事へて詩を受く、元王は其の子の郢を以て亦浮丘伯に學ばしむ、元王薨じて、郢立

又作龍鍾病免歸、又龍鍾を作し病免せられて歸る、

ちて楚王と爲る、其の子の戊をして申公に師事せしむ、戊學を好まず、

申公を病む、戊立ちて王と爲るや、申公を膏肓す、(膏は相、肓は鑿、鐵鎖にて相繋ぐなり) 申公之を愧ぢ、魯に歸り退居し家に教ふ、終身門を出でず、復た賓客を謝す、受業弟子以外は相見せず、獨王命之を召せば廻ち往く、(二) 穆生 元王は申公と穆生を敬禮す、穆生酒を嗜まず、元王穆生の爲に醴を設く、戊が王と爲るや、或は設け、或は設けず、穆生退いて曰く、以て逝るべきなり、去らずんば、楚人將に我を市に針せんとす、遂に病を謝して去る、(三) 縮臧 趙縮と王臧との二人、共に申公の門人にして、漢の武帝に事ふ、(四) 下吏 過を裁く吏に二人の身分を引渡すこと、(五) 明堂廢 明堂の立つや、縮臧二人が武帝に進言して、申公をして其の指揮を爲さしむ、然るに竇太后、老子の言を喜び、儒術を説ばず、乃ち明堂の事を廢し、而して縮臧は自殺す、(六) 龍鍾 老いて疲れ病むの貌、

【題義】 哲宗の元祐元年二月八日に朝廷より退出して、起居院に獨在し、前漢書の儒林傳中の申公の故事を讀んで、士の出處進退に就いて感ずる所あり、乃ち此の七言絶句を作つたものである、二月には司馬溫公が相と爲り、青苗法や、免役法の廢せらるる等の事あり、漢の古を想はざるを得ず、公年五十一で、中書舍人に除せられし年である、

【詩意】 寂寞として申公は客を謝し、門を閉ぢ徒に教へし時、常に自ら言ふ、穆生は機を見るの才ありと、然るに己は如何と言ふに、縮や臧が吏に下さるる様な恥を受け、明堂は廢せらるる様な始末、一身は龍鍾と作つて病と稱して辭免して歸る、人を見るの明ありて、己を見るの明無し、

【餘論】 申公は官に戀戀し、穆生は官に戀戀たらず、申公は恥を受け、穆生は恥を受けず、余は日本の昭和二年台閣の倒と、昭和四年台閣の倒とを見て、大に此の感を深くしたのである、紀曉嵐云ふ、



借題抒意、東坡此時、已有不安其位之勢上矣、

和人假山

人の假山を和す

上黨攙天碧玉環。

上黨攙天碧玉の環、

絶河千里抱商顔。

絶河千里商顔を抱く、

試觀煙雨三峯外。

試みに觀よ煙雨三峯の外、

都在靈仙一掌間。

都て靈仙一掌の間に在り、

造物何如童子戲。

造物は何如ぞや童子の戯れに、

寫真聊發使君閒。

寫真は聊か發す使君の閒を、

何當挈取西征去。

何か當に挈手西征し去り、

畫作圍牀六曲山。

畫き作さん圍牀六曲の山、

【字解】 〔一〕上黨 山の名、一名太行山、「括地志」に、太行連互河北諸州、凡數千里、始於懷、而終於幽、爲天下之脊」とあり、〔二〕試觀、刺攙、山高く天を刺すが如し、〔三〕商顔、山の名、太行山は衆山の總名にて、其の小なるもの即ち商顔の類なり、〔四〕三峯、太華の三峯、即ち蓮華峯と、松檜峯と、毛女峯なり、〔五〕靈仙、華山は古、河神巨靈、手を以て其の上を摩開し、足を以て其の下を踏離し、以て河水

【題義】 人の假山を詠じたるものを和する、

【詩意】

上黨山は天を攙す如くに高く且碧玉環の如き翠色を呈する、而して河の絶する千里の間に商顔山を抱くの状を作す、試みに觀玉へ煙雨の懸る三峯の外を、都て盡く靈仙が一掌の間に在るを知る、造物主の戯れと童子の戯れと何如が勝る、假山ではあるが其の眞山を寫し出して我の閒興を發せしむ、何の日か當に挈げ取りて西征し去りて、畫を作りて以て六曲の屏風と作すことを得るや、

【餘論】 此の篇を卒讀すれば、絶句二首なるが如く、再讀して律體なるを知る、唐の鄭谷の峨眉咫尺無三人去、却向僧窗看假山、是れ大に僧を諷したるもの、今此の詩は別に諷諭することは無いのである、

送王伯敷守虢

王伯敷が虢に守たるを送る

華山東麓秦遺民。

華山の東麓秦の遺民、

當時依山來避秦。

當時山に依り來つて秦を避く、

至今風俗含古意。

今に至りて風俗古意を含む、

柔柔綠水招行人。

柔柔綠水行人を招く、

行人掉臂不回首。

行人臂を掉つて首を回らさず、

爭入崤函土囊口。

爭ひ入る崤函土囊の口、

【字解】

〔一〕華山 大華山と小華山とあり、今の陝西省關中道に當る、宋の楊文公が談苑に云ふ、華山南有川、廣袤數百里、連山洞壑、不知其極、人有登蓮花峯絕頂、俯瞰人煙、舍屋相望、四時常有花木、疑靈仙之窟宅」とあり、〔二〕東麓 楊文公は南と曰ひ、此の詩、東と曰



惟有使君千里來、  
 惟使君の千里より來るあり、  
 欲飲三堂無事酒、  
 飲まんと欲す三堂無事の酒、  
 三堂本來一事無、  
 三堂本來一事無く、  
 日長睡起聞投壺、  
 日長くして睡起投壺を聞く、  
 牀頭硯石開雲月、  
 牀頭の硯石雲月を開き、  
 澗底松根鬪雪腴、  
 澗底の松根雪腴を鬪る、  
 山棚盜散人安寢、  
 山棚盜散じて人安寢し、  
 勸買耕牛發陳廩、  
 耕牛を勸め買うて陳廩を發く、  
 歸來只作水衡卿、  
 歸來只水衡卿と作る、  
 我欲攜壺就君飲、  
 我壺を攜へて君に就て飲まんと欲す、

ふ、山大なれば南にも東にも互るならん、【三】 避秦 晉の陶淵明の桃花源記に、邨中人自云、先世避秦亂來此、不復出焉とある、【四】 峭函 二峭と函關とを曰ふ、二峭山は、一名嶽峯山、東峭より西峭に至る、此の間三十五里、河南の永寧縣に在り、函谷關は、新安縣の東に在るは漢關にて、陝州靈寶縣南に在るは秦關なり、【五】 土囊口 宋玉が風賦に、盛怒於土囊之口とあり、李善曰く、土囊大穴也と、【六】 三堂 魏州に在り、唐の岐王と薛王とが刺史たりし時、建つる所、【七】 無事酒 政正しければ、州治まる、

無事なる所以、【八】 投壺 後漢書祭遵傳に、遵爲將軍取士、皆用儒術、對酒設樂、必雅歌投壺とあり、壺中に矢を投入する游戲である、【九】 硯石 魏州より出づる月石硯は天下の珍なりと、【一〇】 鬪雪腴 鬪は字音チヨク、研るなり、雪腴は茯苓の美なるを曰ふ、茯苓は松根に寄生する菌類なり、【一一】 山棚 今日所謂馬賊の類、居民團結して盜を爲す者、舊唐書憲宗紀に、山棚の名出づ、【一二】 耕牛 本集第九卷に、山棚五絶あり、其の中の句に、布穀何勞也勸耕と同意なり、【一三】 水衡 官名、前漢の韓遂は渤海太守たりし時、官庫蓄積せる財粟を發きて、以て郡民を賑はし、年老いて上官に進まず、自ら下官たる水衡都尉と爲る、【一四】 攜壺

杜牧之の句に、與客攜壺上翠微とあり、

【詩意】 君が今赴任する土地の歴史を君が爲に説かんに、華山の東麓には秦の遺民が秦の亂を避けて逃れ來り、其の子孫は今猶ほ此に在る、風俗も漢俗と接せざる故に依然秦の風俗をして居る、柔桑や緑水が流出して行人を招くが如くなるも、行人は別に仙境あるを知らざれば一人として首を回らす者はない、人人争うて峭函土囊の口に入り去る、唯獨り使君は千里より遠しとせずして、此の地方の魏州に來る、來りて知事の官舎に於て無事の酒を飲まんと欲す、已に争を訴へ來る者なきの官舎、本來一事も無い、日長き時は睡り、睡が覺めし時は官舎にて投壺の游戲を試むる人の聲を聞く、牀頭に置く所の硯は、所謂天下の珍硯である、時に澗底に下りて松根の茯苓を鬪つて食ふ、良政の下には山棚などの徘徊することは無い、人民は盡く安寢して居る、少壯の者には牛を買うて農事に勤勞せしめ、鰥寡には陳廩を發きて施し、任滿ちて來る時は官吏成金と爲らず、古の清廉潔白なる水衡卿の如くなれ、我も亦壺を攜へて往き、君に就いて無事の飲を求めんと欲するのである、

【餘論】 此の篇は「蘇詩擇粹」に採録無し、紀は蘇詩として粹にあらすと考へたるものか、四度換韻して作り、古は淵明一人あり、今日は王伯敷一人あり、善く此の如き僻境の勝を知るとの作者の意を察すれば、粹中の粹として余は深く此の篇を喜ぶものである、



道者院池上作

道者院池上の作

下馬逢佳客。攜壺傍小池。

馬より下りて佳客に逢ひ、壺を攜へて小池に傍ふ、

清風亂荷葉。細雨出魚兒。

清風荷葉亂れ、細雨魚兒出づ、

井好能冰齒。茶甘不上眉。

井は好しく能く齒を冰しうし、茶は甘く眉に上らず、

歸途更蕭瑟。眞個解催詩。

歸途更に蕭瑟、眞個に催詩を解す、

【字解】 〔一〕 下馬 王維の詩に、下馬飲君酒とあり、〔二〕 佳客 杜甫の詩に、佳客適萬里とあり、〔三〕 不上眉 茶苦きものを飲めば眉の上に蹙をよせる、〔四〕 眞個 和語のホントと云ふ義、

【題義】 鄭州門外五里の地に在る寺を道者院と曰ふ、院中の池に對して歌うたものである、

【詩意】 寺門の前で馬より下りて偶ま佳客に逢ふ、二人して壺を攜へて小池の傍にて飲む、清風は細細として荷葉を吹亂する、細雨は霏霏として魚兒は水面に浮び出る、井戸の水は清冽なれば能く齒を冰しくする、水が好ければ茶も亦甘くして眉を蹙めることは無い、歸るに臨んで風は更に蕭瑟と吹く、此の風は我に詩を作れと催促することと思ふ、

【餘論】 杜甫の詩に、細雨魚兒出、微風燕子斜とあり、前句は池上の景、後句は地上の景、律として是を眞法と爲す、然るに今杜甫の句を用ひながら、前句も後句も共に池上の景、池を主とするより已むを得ざるものか、紀曉嵐曰く、風雨二字、已隔一聯、蕭瑟催詩、俱嫌無著、坡公の意を得たるや

否や、

次韻子由送千之姪

子由が千之姪を送るに次韻す

江上松楠深復深。

江上の松楠深くして復た深し、

滿山風雨作龍吟。

滿山の風雨龍吟を作す、

年來老幹都生菌。

年來老幹都て菌を生じ、

下有孫枝欲出林。

下に孫枝の林を出でんと欲する有り、

白髮未成歸隱計。

白髮未だ成さず歸隱の計、

青衫儻有濟時心。

青衫儻くも濟時の心有り、

閉門試草三千牘。

門を閉ち草を試む三千牘、

仄席求人少似今。

席を仄て人を求むるも今の似きは少なり、

傳に、光武側席、幽人求之若不及とあり、「後漢書章帝紀」に、建初五年詔曰、朕思遲直士仄席とあり、「文選」に、羊叔子讓開府表に、側席求賢、不遺幽賤とあり、

【題義】 子由が其の姪に當る千之が官を以て西歸するを送る詩に次韻したるもの、子由の詩は、京洛

【字解】 〔一〕 生菌 菌はキノコ、

松蘿なり、今は微菌など用ふるが

故に、特に知る要がある、〔三〕 孫

枝 王註續が曰く、凡木皆木實而未

虛、唯桐反之、故要貴孫枝とあ

り、〔三〕 濟時心 杜甫の詩、豈無

濟時策、終竟畏罪罟とあり、淵明

の詩に、豈無濟時策、君門乏良媒

とあり、〔四〕 三千牘 「史記滑稽

傳」に、東方朔、初入長安、至公車

上書、凡用三千牘とあり、〔五〕

仄席 仄は側と同じ、「後漢書逸民

傳」に、光武側席、幽人求之若不及

とあり、「文選」に、羊叔子讓開府

表に、側席求賢、不遺幽賤とあり、

【題義】 子由が其の姪に當る千之が官を以て西歸するを送る詩に次韻したるもの、子由の詩は、京洛



東游歲月深、相逢初喜解微吟、夢中助我生池草、別後同誰飲竹林、文字承家憐汝在、風流似  
勇慰人心、便將三格律傳諸弟、王謝諸人無古今、

【詩意】 江上の松も楠も共に陰が深く、満山の風雨が來るときは龍吟の聲を作すが如くである、幾年  
を経來る所の老幹は都て菌子を生む、其の下に在る孫枝は幾んど親樹より上頭に出づる勢がある、我  
は已に白髪なるも、未だ歸隱の計畫をしない、汝は青衫なるも俺は天下を救はうと云ふ心を有す、門  
を閉ぢ人の入るを禁じ、草藁を試むること三千牘、席を側てて人を求むる古は然らんも、今日は野に  
遺賢なければ其の心配は不要なりと云ふのである、

【餘論】 紀曉嵐、此の篇を評して曰く、前四句一氣相承、純作比體、於古體常格、於近體爲新  
調、紀評の如く蘇氏の家と蒲氏が家との繁榮を敘するに、松楠、孫枝等の語に托して之を言ふ、  
比體作法は明白なり、然りと雖も之を絶句と爲すときは何等の味も無く、後半あるを以て律格の體と  
爲る、紀は前半を批圈して後半に及ばず、一家の見として然らんも、果して坡公を服させるや否や、  
有の字二字あるは失體である、

書文與可墨竹

文與可が墨竹に書す

亡友文與可有四絶詩一楚辭二草書三畫四與可嘗云世無知我者  
惟子瞻一見識吾妙處既没七年觀其遺跡而作是詩

【訓讀】 亡友文與可有四絶あり、詩一、楚辭二、草書三、畫四、與可嘗て云ふ、世に我を知る者なし、  
惟子瞻一見して吾が妙處を識ると、既に没して七年、其の遺跡を觀、而して是の詩を作る、

筆與子皆逝詩今誰爲新

筆と子と皆逝く、詩今誰か新を爲す、

空遺運斤質却弔斷絃人

空しく運斤の質を遺して、却つて斷絃の人をして弔せしむ、

【字解】 一、運斤質、「莊子徐無鬼篇」に、郢人墜、漫其鼻端、若蠅翼、使匠石斲之、匠石運斤成風、聽而斲之とあり、乃  
ち斤を揮ひ、妙技を示すを曰ふ、二、斷絃人、「呂氏春秋」に、鍾子期死、伯牙破琴絕絃、終身不復鼓琴、以爲世無知音者こと  
あり、

【題義】 文與可が畫く墨竹に題讚せるなり、

【詩意】 筆は子の逝くと俱に逝き、天下に復た新詩を書する人無し、唯空しく運斤巨匠の名筆を遺し  
てあるが爲め、却つて斷絃の人たる我をして讚を作らしむ、

【餘論】 僅僅二十字にて、復た是れ巨匠の運斤、他の千言萬語に勝る、莊子は惠子死して、天下に知  
己無きを悲み、伯牙は鍾子期死して、復た知音無く、坡公は與可死して、復た莊子や伯牙と其の悲み  
を同じうすとの意、



次韻錢舍人病起

錢舍人が病より起つに次韻す

牀下龜寒且耐支。牀下に龜寒且支ふるに耐へたり、

杯中蛇去未應衰。杯中蛇去る未だ應に衰ふべからず、

殿門明日逢王傅。殿門明日王傅に逢ひ、

欄具爭先看不疑。欄具先を争ひ不疑を看る、

坐覺香煙攜袖少。坐ら覺ゆ香煙を袖に攜ふるの少なるを、

獨愁花影上廊遲。獨愁ふ花影の廊に上る遲きを、

何妨一笑千疴散。何ぞ妨げん一笑千疴散じ、

絕勝倉公飲上池。絶だ勝る倉公が上池に飲むに、

り、宜遂に解し、是に於て瘳平とある、【三】殿門 宮殿の關門なり、【四】王傅 漢の賈誼は梁王の傅と爲る、今錢を指すならん、共に中書舍人の官なればなり、【五】欄具 劍首の轆轤を曰ふ、劍の頭を玉を以て飾り、其の上に出る木ぼりの飾を指めるもの、漢書雋不疑傳に、渤海聞不疑賢、請與相見、不疑冠進賢冠、帶欄具劍、盛服上謁とあり、【六】香煙攜袖 王註續曰く、梅學士詢、好焚香、每晨起必焚兩爐、以公服罩之、撮其袖以出、坐定撤開、郁然滿堂、簡は是れ朝臣が自ら香を攜へて行くなり、杜甫の詩に、朝罷香煙攜滿袖とあるは、御爐の香煙を我が袖に攜へて歸るなり、【七】獨愁 王註に唐書を引いて曰ふ、學士の署に入る、常に日影を視て候と爲す、李程、翰林學士と爲る、性懶、日八磚を過ぎて乃ち至る、時に八磚學士と號すと、八磚は今の幾時に當るやを知らず、日影が磚壁の八列に及ぶ頃なるにや、【八】千疴散 莊子達生篇に、桓公澤に田す、管仲仰す、鬼を見、公、管仲の手を撫

【字解】

【一】牀下龜寒 史記龜策傳に、南方老人、用龜支牀足、二十餘年、老人死移牀、龜尙生、龜能行氣導引也とあり、白樂天の詩に、春朝鎖籠鳥、冬夜支龜牀とあり、【二】杯中蛇 後漢の世、應彬は杜宣と會飲す、其の時壁上に赤弩を懸く、杯中に映じて形蛇の如し、杜宣之を飲み、忽ち腹痛を感ず、蛇腹中に入ると思へばなり、既にして壁を見れば懸弩あり、良久して故處に於て酒を設く、蛇影依然た

して曰く、仲父何を見見る、對へて曰く、臣見る所無し、公反る、談論して病を爲し、數日出でず、告教と云ふ者あり、曰く公則ち自ら傷る、鬼惡んぞ能く公を傷らんや、桓公曰く、然らば則ち鬼あるか、曰く有り、水に罔象あり、丘に壘あり、山に夔あり、野に彷徨あり、澤に委蛇ありと、委蛇の狀を説く、公輒然として笑つて曰く、此れ寡人の見る所のものなりと、是に於て衣冠を正しうして之と坐す、日を終へずして病の去るを知らざるなり、【九】倉公 史記列傳に、扁鵲は勃海郡の鄭の人、少時人の舍長と爲る、舍の客長桑君過ぎる、扁鵲獨り之を奇とし、常に謹んで之を遇す、長桑君も亦扁鵲の常人にあらざるを知る、出入十餘年、乃ち扁鵲を呼んで私かに坐し、開かに與に語つて曰く、我禁方あり、年老いたり、公に傳與せんと欲す、公泄すこと母れ、扁鵲、敬んで諾す、乃ち其懷中の藥を出して扁鵲に予へ、是を飲むに上池の水を以てせば、三十日にして、當に物を知るべしと、乃ち悉く其の禁方の書を取つて、盡く扁鵲に與へ、忽然として見えす、倉公は扁鵲に劣らぬ名醫、姓は淳子名は意、坡公は史記に扁鵲倉公傳とあるより、一人の名と誤認したるなり、

【題義】 中書舍人たる錢颯が病より起ちたる詩に次韻して作れるもの、

【詩意】 牀下の龜は人の寒を支へしむるも、決して死することは無い、杯中に蛇ありしと認むるも、氣の惑ふ所と知らば身體に異狀は無い、健康が回復すれば出勤して明日からは殿門に於て王傅に逢ふことが出来、欄具の劍を持つて來るものは不疑が參勤した人と衆人が先を争うて看る、平日坐に覺えたるは香煙を袖に攜へ來る者の少きを、獨り愁ふ花影の廊に上るの遲きを、何ぞ妨げんや輒然と大笑することを、大笑のもとには千疴總て散じ去る、そは絶だ勝る扁鵲が上池の水を飲むに、【餘論】 宋人は學問を以て詩と爲すとの誹あるが、此の篇を讀めば眞に其の然るを知る、曉嵐曰く、杯中句上下不貫と上の字、使用法の意義は異なるも二字あるは失體である、



次韻和王鞏

次韻、王鞏に和す

謫仙竄夜郎。子美耕東屯。

謫仙は夜郎に竄せられ、子美は東屯に耕す、

造物豈不惜。要令工語言。

造物豈惜まざらんや、語言を工ならしめんと要す、

王郎年少日。文如餅水翻。

王郎年少の日、文餅水の翻るが如し、

爭鋒雖剽甚。聞鼓或驚奔。

鋒を争ふ剽甚なりと雖も、鼓を聞いて或は驚奔す、

天欲成就之。使觸羝羊藩。

天は之を成就せしめんと欲し、羝羊を藩に觸れしむ、

孤光照微陋。耿如月在盆。

孤光微陋を照らし、耿として月の盆に在るが如し、

歸來千首詩。傾瀉五石尊。

歸來千首の詩、傾瀉す五石の尊、

却疑彭澤在。頗覺蘇州煩。

却つて疑ふ彭澤在るかと、頗る覺ゆ蘇州の煩を、

君看騶忌子。廉折配春溫。

君看よ騶忌子、廉折春溫に配す、

知音必無人。壞壁挂桐孫。

知音は必ず人無からん、壞壁桐孫を挂く、

【字解】

【一】謫仙 李太白は永王璘が事に坐す、【二】夜郎 郡の名、即ち今の貴州桐梓縣の東二十里の地に流竄せらる、子美は杜甫の字、【三】東屯 今の四川省の奉節縣の治、清代は夔州とす、杜の詩に東屯稻畦二百頃とあり、【四】工語言 語言は辯舌する、とにあらず、李と杜の詩を曰ふ、韓文公の詩に、李杜文章在、光燿萬丈長、唯此兩夫子、家居率荒涼、帝欲長吟哦、故遣起且僵、坡公

全く此の意を用ふ、【五】餅水翻 韓文公の詩に、文如餅水一成、初不用意爲とあり、【六】剽甚 剽はおびやかす、おどすなり、衆人が初めは王郎と鋒を争ひ、剽かさんと欲す、【七】羝羊 牡羊、ヲヒツツなり、牡羊は剛壯、物に觸れるを喜ぶ、然れども籬に觸れて進む能はず、周易に、羝羊觸籬、不レ能レ遂、不レ能レ退、无レ攸レ利とあり、男兒勇氣にはやり、猛進する者は、事失敗に歸し、志遂ぐる能はざるに譬ふ、【八】孤光 梁の沈休文の句に、單汎逐孤光とあり、王が心地を指して云ふ、【九】微陋 卑陋と同じ、坡公自身を指す、公が頌樂亭詩に、偉哉先師、安此微陋とあり、我輩と云ふことを卑下して云ふ、【一〇】月在盆 明明又は耿耿として成る、其の實五石、以て水漿を盛れば、其れ堅くして自ら擧ぐることは能はず、之を割いて以て瓢と爲せば、則ち瓠落にして、容るる所なし、喟然として大ならざるにあらざれども、吾は其の用なきが爲に之を捨けり云云、【一一】彭澤在 彭澤は陶淵明、王が詩を讀めば淵明が現存するかと疑ふ、【一二】蘇州煩 唐の韋蘇州即ち應物は淵明の詩を學んで、其の面目を窺へども、猶ほ煩雜なる嫌ひあり、【一三】騶忌子 史記田完世家に、騶忌子以鼓琴見威王、曰、夫大絃濁以春溫者君也、小絃廉折以清者相也、攫之深、醜之愉者政令也とあり、【一四】廉折 鋭くして急、清く澄みて且高きは、宰相の象なりとす、【一五】壞壁 「漢劉歆傳」に、得古文於壞壁之中とあり、乃ちクツレタルカベが本義なれど、貴き壁の義とある、【一六】桐孫 「周禮注」に云ふ、孫竹枝、根之未生者、桐孫亦然、「風俗通」に、梧桐生於嶧陽山、採東南孫枝爲琴、聲甚清雅とあり、北周の庾開府の詩に、桐孫待作琴とあり、唐の李賀の詩に、嶧陽老樹非桐孫とあり、

【題義】王鞏が自況を敍べて示されたる詩に次韻したるもの、

【詩意】唐の李太白は夜郎郡に流竄せられ、其の友の杜子美は僻陬たる蜀の東屯に自耕する、此の兩文豪が彼の僻陬に身を置くを、天は之を惜まないものであるか、惜まないのではない、逆境に處して却つて其の詩を工ならしめたのである、君は年少の日、文章を作ること餅水の如く躍翻した、他の才人が鋒を争うて、氣慨の剽甚を示せども、君が敵と爲つて打つて出づると聞けば、彼等は悉く驚きて



奔り逃れ去る、而して天は君の才を全うせしめんと欲して、所謂羝羊を藩に觸れしむるの苦を與ふ、而かも君の心地の明光は余が微陋なる身を照らして、耿耿として月の盆に在るが如きの感がある、示さるる歸來千首の詩、五石の樽を傾瀉する如く、滾滾として盡きざるを知る、其の詩は洵に淵明の正宗を傳へて、淵明を學んで淵明の極處まで達せぬ韋應物に勝ると思ふ、君も知る昔の騶忌子は、琴の調子を以て、春温の如しと配當したであらう、而かも其の調子の眞を知る人は世には無い、是の故に其の名琴を壞壁に掛けて弾せざるが可い、

【餘論】 紀曉嵐は天欲成之就之は率易、却疑彭澤在、頗覺蘇州煩の二句は凡近なりと評せり、屈復が杜詩を改刪せるを人皆笑ふ、而かも之を杜詩と見ず、屈復の詩として見れば、何等の支障なきものである、要するに紀と屈とは孟子の説「大人一則貌之、勿視其巍巍然」を善く知る者、蓋し余は孤光照微陋の五字、解釋して種種の意義に取ることが出来る、余は姑らく自己の考へにて讀下せり、之を批評する人は、批評する人の自由のみ、

用定國韻贈二十姪震

定國の韻を用ひ二十姪震に贈る

衡門老苔蘚、行柏千兵屯。

衡門老苔蘚、行柏千兵屯す、

開尊邀落日、未對烏鳥言。

尊を開きて落日を迎へ、未だ烏鳥に對して言はず、

清風舉吹籟、散亂書帙翻。

清風吹籟を舉げ、書帙を散亂して翻す、

傳呼一何急、人馬從車奔。

傳呼一に何ぞ急なる、人馬車奔に従す、

貧居少賓客、鄰婦窺籬藩。

貧居賓客少に、鄰婦籬藩を窺ふ、

牆頭過春酒、綠泛田家盆。

牆頭春酒過ぎ、綠は泛ぶ田家の盆、

比來伏青蒲、坐捉白獸尊。

比來青蒲に伏す、坐して捉る白獸の尊、

王猷修潤色、亦有簿領煩。

王猷潤色を修し、亦簿領の煩有り、

朝廷貴二陸、屢聞天語溫。

朝廷二陸を貴ぶ、屢ば聞く天語の温かきを、

猶能整筆陣、愧我非韓孫。

猶ほ能く筆陣を整ふ、愧づ我は韓孫にあらざるを、

【字解】

【一】 衡門 詩に、衡門之下、可棲遲とあり、平民の門を曰ふ、【二】 行柏 行を一本、竹に作る可、【三】 烏鳥 左傳襄公十年に、烏鳥之聲樂、齊師其遁とあり、【四】 吹籟 空虚に發する所の聲皆籟と曰ふ、【五】 傳呼 漢書蕭望之傳に、王仲翁、出入從倉頭盧兒、下車趨門、傳呼甚寵とあり、唐書儀衛志に、朱衣傳呼、促百官就班とあり、【六】 春酒 杜甫の詩に、隔屋喚西家、借問有酒不、牆頭過濁醪、展席俯長流とあり、【七】 田家盆 杜甫の詩に、莫笑田家老瓦盆とあり、【八】 青蒲 敷物なり、漢史丹傳に、候上閉獨寢、時丹直入臥内、頓首伏青蒲上涕泣、上意大感とあり、【九】 白獸尊 晉禮志に、正旦元會設白獸尊於殿庭、尊蓋上施白獸、若有能獻直言者、發此尊飲酒、哲宗が即位し、上書して事を言ふ者を求む、千を以て計ふ、司馬溫公、孔宗翰を考定して第一に居すと云ふ、【一〇】 潤色 漢の班固の賦に、潤色鴻業とあり、【一一】 簿領 魏の劉公幹の詩に、沈迷簿領書とあり、【一二】 二陸 晉の陸機と陸雲の兄弟なり、太康の末年、太常張華に謁す、張華其の名を重んじて、大に之を周旋す、【一三】 天語 李



太白の明堂賦に、聽天語之察察とあり、**〔一〕**筆陣 王羲之の筆陣圖に、紙者陣也、筆者刀槍也、墨者鎧甲也、水硯者城池也、心意者將軍也とあり、

【題義】今注を書く蘇文忠公合註には用三定國韻贈二十姪震とあるも、王文誥の蘇文忠公詩編註集成には用三王鞏韻贈三其姪震とあり、馮應榴曰く、坡門酬唱集、不載此詩、似非先生作とあり、而かも今に於て斷案を下すこと能はざるを悲む、

【詩意】衡門の中の庭は苔蘚が蒼老である、竹柏は森森として千兵の屯する如くである、酒樽を開きて落日を邀へて飲む、是の時や未だ烏鳥の歸栖せざる時である、但清風が天籟を吹擧し來りて、書帙を翻して正に散亂せんとす、然る所へ急使が來ると見え、頻りに傳呼の聲が響く、人も走り馬も車も皆奔る、貧居は富家と異なり、賓客が太だ少である、偶々鄰婦が籬藩を窺ふは何事の爲かと思へば、酒家の小僧が酒を攜へて來たのである、緑色の酒を田家の盆に傾けて飲む、一轉して比來は青蒲の上に伏して、天子に咫尺し、坐して白獸尊の美酒を斟むに至る、身は王猷と爲つて鴻業を潤色する、亦簿領を檢尋する煩もあらん、朝廷は昔二陸を貴ぶが如く今日は二王を貴ぶ、故に余も屢ば二王に對する、天語の温かきを聞きし事がある、政事は政事、文事は文事、猶ほ能く筆陣を整理する、唯愧づ我は韓孫にあらざることを、

【餘論】王鞏の姪の王震が給事中と爲りし時贈るものならんか、故に前半は處士としての生活状態を敘し、後半は官吏と爲つて後の状態を敘するものの如くである、但し結末の非韓孫は何の意味なるや、古今判然たる注釋を闕く、紀曉嵐曰く、此非東坡詩、續補者誤采耳と、紀も別に其の證を示さず、遂に信ずることが出來ぬ、

用王鞏韻送其姪震知蔡州

王鞏の韻を用ひて其の姪震の蔡州に知たるを送る

九門插天開萬馬先朝屯、  
九門天を挿んで開き、萬馬朝に先だつて屯す、  
擧鞭紅塵中相見不得言、  
鞭を擧ぐ紅塵の中、相見て言ふことを得ず、  
夜走清虛宿扣門驚鵲翻、  
夜清虛に走りて宿る、門を扣けば驚いて鵲翻る、  
君家汾陽家永巷車雷奔、  
君が家は汾陽に家す、永巷車雷奔す、  
夕郎方不夕列戟以自藩、  
夕郎方に夕ならず、列戟以て自ら藩にす、  
相逢開月閣畫簷低金盆、  
相逢うて月閣を開き、畫簷は金盆低る、  
至今夢中語猶擧燈前尊、  
今に至りて夢中の語、猶ほ燈前の尊を擧ぐ、  
阿戎修玉牒未憚筆削煩、  
阿戎玉牒を修し、未だ筆削の煩を憚らず、  
君歸助獻納坐繼岑與溫、  
君歸りて獻納を助く、坐に繼ぐ岑と溫とに、



我客二子間不復尋諸孫。

我二子の間に客となり、復た諸孫を尋ねず、

【字解】 〔一〕 九門 山の名、〔二〕 清虛 堂の名、〔三〕 汾陽家 「長安志」に、郭汾陽宅、在親仁坊、居其地四分之一、中通永巷、家人三千、相出入者、不知其居一とあり、〔四〕 夕郎 漢代の黃門郎は毎日暮に、入りて青瑣門に對するを以て、之を夕郎と謂ふ、夕郎は今の給事中に當る、〔五〕 列戟 大官の門前、戟を列ぬ、〔六〕 阿戎 「胡三省通鑑注」に、晉宋間人、多呼從弟爲阿戎、至唐猶然とあり、杜甫の詩に、守歲阿戎家とあり、〔七〕 玉牒 宗室の世譜を曰ふ、王定國の官は宗正丞、乃ち玉牒を修する役、〔八〕 筆削 「史記」に、孔子春秋を修し、筆するは則ち筆し、削するは則ち削すとあり、〔九〕 獻納 「班固兩都賦序」に、朝夕論思、日月獻納とあり、〔一〇〕 岑輿溫 岑文本と溫大雅の二人なり、岑は中書舍人侍郎令にして、溫は黃門侍郎なり、〔一一〕 尋諸孫 自注に、子美詩云、權門多噂沓、且復尋諸孫とあり、

【題義】 王震が蔡州に知府と爲つて赴任するを送る詩、王震は元祐の初、給事中に遷り、龍圖待制を以て蔡州を守る、

【詩意】 九門山は高く天を挿んで開き、其の山下を過ぐる萬馬は各の朝參を吾先きにと屯す、先朝を争ふの人の萬馬の爲め紅塵が揚がる、其の中にて面を相見るとも言ふことは出來ず、夜に入れば王家の清虛堂に宿を求む、乃ち王定國が家門を叩けば、已に宿して樹に在る鶻も驚いて翻る、君が此の家は古の名將郭汾陽が舊宅である、是の故に永巷に車馬が雷聲を爲して奔るを見る、夕郎と稱するも決して夕のみ朝するを爲んや、君が家の門には戟を列ねて以て其の藩籬とする、曾て清虛堂に宿して宛かも月閣にて相逢ふの感がある、畫簷が全く金盆を低れた如くである、今に至りて猶ほ夢中の語を記憶する、燈前に於て尊を開きて杯を舉げしことを、君が家の阿戎は玉牒を修整して、筆するは筆し

削るべきは削りて、少しも憚勞なぞ口にしなさい、君も歸りて阿戎が獻納する文書を助成する、直ちに岑文本と溫大雅が後事を繼ぐ、我は君と君の叔と二人の間に遊ぶのみにて、復た別に諸孫を尋ねることとはしない、

【餘論】 此篇も十三元の再疊韻なるが、紀は前と同じく坡公の作にあらずとの考なれば、別に批評を加へない、

魏國夫人夜游圖

魏國夫人夜游の圖

佳人自鞚玉花驄。

佳人自ら鞚す玉花驄、

翩如驚燕踏飛龍。

翩として驚燕の飛龍を踏るが如し、

金鞭爭道寶釵落。

金鞭道を争ひ寶釵落つ、

何人先入明光宮。

何人か先づ入る明光宮、

宮中羯鼓催花柳。

宮中の羯鼓花柳を催し、

玉奴絃索花奴手。

玉奴は絃索花奴は手、

坐中八姨眞貴人。

坐中の八姨眞の貴人、

走馬來看不動塵。

馬を走らし來り見て塵を動かさず、

【字解】 〔一〕 自鞚 鞚は馬勒、

クツリなり、〔二〕 玉花驄 唐の玄宗が愛せる馬の名、〔三〕 蹋 蹴る

なり、蹋鞠、ケマリの成語を以て其の義を知れ、曹子建の洛神賦に、翩

若驚鴻、宛若游龍とあり、〔四〕 寶釵落 劉向の唐書に、正月望夜、

楊家五宅夜游、與廣平公主、爭西市門、楊氏奴揮鞭、及公主衣、公

主墮馬とあり、〔五〕 明光宮 漢の宮殿の名、金玉珠璣を以て、簾箔



明眸皓齒誰復見。明眸皓齒誰か復た見ん、  
 只有丹青餘淚痕。只丹青に涙痕を餘すあり、  
 人間俯仰成今古。人間俯仰今古と成る、  
 吳公臺下雷塘路。吳公臺下雷塘の路、  
 當時亦笑張麗華。當時亦笑張麗華、  
 不知門外韓擒虎。不知門外韓擒虎、

と爲す、晝夜光明あり、【六】羯鼓  
 蠻人が製せるツヅミなり、撥を以て  
 兩面を打つ、唐の玄宗は音律に達し、  
 特に羯鼓を打つに巧みなりと稱せら  
 る、【七】玉奴 未詳、【八】花奴  
 楊妃外傳に、汝陽王璿小名花奴、尤  
 善羯鼓とあり、又明皇酷不好琴、  
 嘗聽彈琴、未及畢叱琴者出、曰  
 召花奴、將羯鼓來、爲我解纒、

【七】八姨 妻の同母姉妹を皆姨と曰ふ、楊妃外傳は信するに足らざる書なるも、詩人は多く取つて以て使用する、曰く、貴妃有姊三人、皆豐碩修整、工於諱浪、巧會旨趣、虢國不施妝粉、自街美豔、常素面朝天とあり、又曰く、三姨封虢國、八姨封秦國、然らば題目の虢國と合せずとして、論議紛紜、今案するに文字の末に拘泥せずして、虢國と定むべきなり、愚論干言、一用も爲さず、  
 【二〇】明眸 杜甫の詩、明眸皓齒今何在とあり、【二一】吳公臺 陳の大將吳明徹を以て名を得、隋の煬帝は初め此處に葬り、後に其の南方に當る雷塘に改葬せるなり、今日の江蘇省淮揚道の江都縣の地是れなり、【二三】張麗華 陳の後主の妃、張貴妃是れなり、後主は狎客等と、玉樹後庭花、璧月夜夜滿、瓊樹朝朝新などと樂に耽つて居る間に、隋の爲め國遂に亡ぼさる、【二三】韓擒虎 隋の名將なり、韓は數萬の兵を率ゐて豫章を抜き、遂に建業に入つて陳亡ぶ、杜牧之の詩に、門外韓擒虎、樓頭張麗華とあり、

【題義】劉有方が家多く名畫を蓄ふ、最も絶筆なるを虢國夫人夜游圖と爲す、張萱が畫く所と、坡公乃ち此詩を作り以て題する、  
 【詩意】美人は馬丁の力を借らず自ら玉花驄を控驅する、其の状は小さな驚燕が大なる飛龍を踴躍する

る如くである、而かも宮廷に赴く道を、我先きにと争うて寶釵が落ちたるに氣が付かぬ、其の中で何人か先づ明光宮に入るや、宮中には已に曉の羯鼓が鳴り響きて、花も柳も曉美を催し、玉奴は琴を彈する手を、花奴の羯鼓を打つ手に遷す、坐中にて貴妃中の貴妃を求むれば第一が虢夫人である、馬を走らし此の状を來り看るが塵を動かすことは無い、その明眸皓齒も國と共に亡び、今日は只是れ畫中に於て涙痕を餘すのみ、人間は一俯一仰の間に、今日が已に昨日と成る、陳隋の世を看よ、吳公臺下は游觀の地にあらずして、哀弔すべき墓地にあらずや、陳の亡ぶるや、一笑傾國の張麗華の爲である、王が貴妃の笑を樂んで見る間に、門外には畏るべき虎將の韓擒虎が攻め來り居るにあらずや、  
 【餘論】夜游の狀態を極めて簡短に敘して、曉曉饒舌せず、坡公が大才此等の篇に於て見るべし、紀は蘇詩擇粹に於て評して曰く、收得澹宕、妙於不粘、唐事、彌見千古一轍之慨、又曰く、直以莊論一作、收、而唱嘆有神、此爲詩人之言、異乎道學之史論、是れ結末二十八字を評する語、

用舊韻送魯元翰知洛州

舊韻を用ひ魯元翰が洛州に知たるを送る

我在東坡下躬耕三畝園。我は東坡の下に在り、躬耕す三畝の園、  
 君爲尙書郎坐擁百吏繁。君は尙書郎と爲り、坐して擁す百吏の繁、  
 鳴蛙與鼓吹等是俗物喧。鳴蛙と鼓吹と、等しく是れ俗物喧し、



永謝十年舊。老死三家邨。  
 惟君綈袍信。到我雀羅門。  
 緬懷故人意。欲使薄夫敦。  
 新年對宣室。白首代堯言。  
 相逢問前輩。所見多後昆。  
 道館雖云樂。冷卿當復溫。  
 還持刺史節。却駕朱輪軒。  
 黃髮方用事。白須宜少存。  
 嗣聖眞生知。拯民如救燔。  
 初囚羽淵魄。盡返湘江魂。  
 坐憂東郡決。老守思王尊。  
 北流桑柘沒。故道塵埃翻。  
 知君一寸心。可敵千步垣。  
 流亡自棲止。老幼忘崩奔。

永謝す十年の舊、老死す三家の邨、  
 惟君が綈袍の信、我が雀羅門に到る、  
 緬に懷ふ故人の意、薄夫をして敦からしめんと欲す、  
 新年宣室に對し、白首堯言に代る、  
 相逢うて前輩に問ふ、所見は後昆より多し、  
 道館云に樂しと雖も、冷卿當に復た温かなるべし、  
 還た刺史の節を持って、却つて朱輪軒に駕す、  
 黃髮方に事を用ひ、白須宜しく少しく存すべし、  
 聖に嗣ぎ眞生知、民を拯ふは燔を救ふが如し、  
 初め囚はる羽淵の魄、盡返る湘江の魂、  
 坐して憂ふ東郡の決せるを、老守して王尊を思ふ、  
 北流桑柘沒し、故道塵埃翻る、  
 知りぬ君が一寸の心、千歩の垣に敵すべし、  
 流亡自ら棲止、老幼崩を忘れて奔る、

得閒閉閣坐。勿使道眼渾。  
 聊乘應捨筏。直泝無生源。  
 歸來成二老。夜榻當重論。

閒を得て閣を閉ちて坐し、道眼をして渾らしむる勿れ、  
 聊か應捨筏に乗じて、直ちに無生源に泝るべし、  
 歸來二老と成り、夜榻當に重ねて論ずべし、

【字解】尙書郎 尙書は今日所謂大臣に當る、其の大臣の下に文書を處理する役人が尙書郎なり、漢代之を置き、清の末年改めて大臣と爲す、【二】鳴蛙 俗物が私利の爲め、喧喧囂囂たる、是を鳴蛙と鼓吹とに譬ふ、【三】三家邨 鄉閭人煙寥落の處を謂ふ、唐の王季友の詩、百姓唯有三家邨とあり、【四】綈袍 唐の高適の詩に、尙有綈袍贈、應憐范叔寒とあり、元范曄と須賀の事、今は厚く消息を通するを謂ふ、【五】雀羅 漢書鄭當時傳に、先是下邳程公爲廷尉、賓客填門、及廢門外可設爵羅とあり、前卷に公の冷官門戸可張羅の句あり、【六】宣室 三輔黃圖に、宣室在未央宮殿北、【七】代堯言 公晚年中書舍人と爲り、制誥を掌る、天子に代つて作る、漢の夏侯勝云ふ、堯言布於天下、【八】道館 老子を祀る觀、【九】冷卿 衛尉は煖卿にして、宗正は冷卿と爲す、煖卿は其の儀懸供帳の類を管するを謂ひ、冷卿は其の玉牒を管する所を謂ふ、【一〇】朱輪軒 刺史の乘車、輪を赤色とす、【一一】黃髮 老人を言ふ、毛髮白黃、黃一變爲白なり、【一二】生知 學知以上を生知と言ふ、【一三】救燔 「隋書」に、拯溺救燔とあり、【一四】羽淵 山東に羽山あり、上に二泉あり、會して羽潭と爲る、舜が鯀を殛せし處、其の神化して黃熊と爲り、羽淵に入る、【一五】湘江 娥皇と女英の舜の二妃没して以て神と爲りし處、時に哲宗初めて登極し、太皇垂簾、悉く新法を罷め、而して元豐の末年、事を用ふる吏輩皆放逐せられ、時に新法を論じて竄謫せられし者、皆召還して録用せらる、【一六】東郡決 東郡水決するときは、水城下に至らざること數里、元翰は之を憂へて築堤防坡、大に功あり、【一七】桑柘沒 平地が河水と變するなり、【一八】塵埃翻 河水が平地と變するなり、【一九】得閒 刺史は刺史たる職務を果して餘閒を生ずるなり、【二〇】道眼 佛道に肉眼・天眼・慧眼・法眼・佛眼、之を五眼と稱す、此の中にて慧眼を道眼とも言ふ、【二一】應捨筏 我が一身は自己を捨てて他を救ふの筏となる、【二二】無生源 自己の爲めの執著を離れ、涅槃の眞理に到達するを、是を無生源と言ふ、【二三】二老 我と君と共に役を辭して後、



【題義】今日の直隸省大名道の邯鄲縣の地は、漢も唐も共に洛州と稱す、魯が此地の知府と爲つて赴任するを送るなり、

【詩意】我が身は今謫せられて黃州の東坡に在り、日日の所作は唯三畝の園を躬耕するのみである、君は尙書郎の高官と爲つて、坐ながら多くの官吏を部下に擁する、而して世上は鳴蛙鼓吹、俗物輩が喧喧と争うて居る、十年間の知己も今は永く謝して、身は三家邨裏に死するやとも思つて居る、幸に君は舊を捨てず、依然として綿袍の厚き信を寄せて、我が平生雀羅を張る寂寥たる門に到る、緬に故人の厚意を懷へば、如何に我は薄夫と雖も、我が良心は敦くなるを覺ゆ、然るに新年は黃州より來りて此の宣室に對し、白首の老官と爲つて堯言に代るの樂を得、乃ち逢ふ所の人に前輩の消息を問へば見る所の者多くは後進の人のみ、道觀に居て云に樂むも、冷卿も當に復た溫暖なるべしと思ふ、所が還た刺史たるの符節を持ちて、却つて朱輪の車に駕するの役と爲る、黃髮にして事務を見る、宜しく身は白鬚であることを忘れてはならぬ、幸に主上は生知の聰明である、是の故に民を拯ふの心は燔を救ふが如く切である、羽淵の僻境に囚はれし者も魄が活き、湘江の邊地に置かれし者も魂蘇へる、特に君は東郡に於ける治水の功が大である、其の老守の状は王尊が事を思はざるを得ない、水害の秋は如何、北流の時は桑柘没し、又故道には塵埃の翻揚するを見たではないか、今や知る君が一寸の誠心殆んど千歩の垣に敵するの功にあらずや、流亡共に自ら棲止し、老幼俱に喜んで奔るを見る、此の間に開あるときは閣を閉ぢて坐し、道眼なる清き眼を色塵の爲め渾らせず、人を救ふの役は即ち我身を

救ふの役である、幸に此に乗つて直ちに無生の源まで泝れ、我も君も世功遂ぐれば故山に歸臥して、世に二老と稱せられん、而して夜榻を連ねて更に道を論ずるであらう、

【餘論】此の題目は送以下七字にて足る、然るに用舊韻の三字蛇足の感がある、元來韻に新舊の有るべき筈なし、而かも此あるは、宋人の面目、唐人と異なる所以、紀曉嵐曰く、語頗雜沓、句法亦多未堅老一と、雜沓は蓋し坡公の宗派、雜沓を除けば、坡公の詩は半ば消滅するにあらずや、

次韻朱光庭初夏 朱光庭の初夏に次韻す

朝罷人人識鄭崇、朝罷んで人人鄭崇を識る、  
直聲如在履聲中、直聲は履聲の中に在るが如し、  
臥聞疎響梧桐雨、臥して聞く疎響梧桐の雨、  
獨詠微涼殿閣風、獨り詠す微涼殿閣の風、  
諫苑君方續承業、諫苑君方に承業を續ぐ、  
醉鄉我欲訪無功、醉郷我無功を訪はんと欲す、  
陶然一枕誰呼覺、陶然一枕誰か呼び覺ます、

【字解】〔一〕鄭崇、前漢の鄭崇字は子游、哀帝擢んで尙書僕射と爲す、數ば諫争す、上、初め之を納る、革履を曳くを見る毎に、上笑つて曰く、我鄭尙書の履聲を識ると、  
〔二〕梧桐雨、唐の孟浩然の詩、疎雨滴梧桐、  
〔三〕殿閣風、唐の柳公權の詩、殿閣生微涼、  
〔四〕諫苑、隋の樂運字は承業、夏殷以來の諫争の事を録して、諫苑と名づく、



牛蟻初除病後聰。牛蟻初めて除き病後聰たり、

文帝覽て嘉す、【六】牛蟻「晉書殷仲堪傳」に、父師嘗患耳聰、聞床下蟻動、謂之牛鬪、帝素聞之、不知其人、問仲堪曰、患此者爲誰、仲堪流涕而起曰、臣進退維谷と、范石湖の詩に、牛蟻誰知床下鬪、雞蠅任向夢中鳴とあり、耳を病む者は、大小の響が混するなり、

【題義】朱光庭が初夏の詩に次韻して作る、光庭字は公揆、坡公と甲を同じうす、左正言、左司諫の官を歴て國に功あり、青苗法廢止を論じて、天下の志士を動かせり、

【詩意】朝廷を退出するときは、誰も彼も鄭崇（朱を譬ふ）の退出を知る、それは正直の聲が履聲の中に知れる、我は臥して疎雨が梧桐に滴る響を聞く、君は殿閣に於て微涼の風を詠するならん、左司諫たる君の職は樂承業の道を續ぐ、唯醉是れ求むる我は王無功を訪はんと欲するのである、醉後陶然として睡る、睡を覺ますものは誰ぞ、此の時は耳鳴の憂が消えて平常の耳に聰が復したのである、

【餘論】紀曉嵐曰く、前四句語脈不貫、牽於韻脚耳、此の韻脚に牽かるる所を無理に使用せんと欲するが樂天以後次韻家の常習なり、坡公如何に大才なるも、全く時流を脱する能はざるは悲むべきなり、

次韻朱光庭喜雨

朱光庭の喜雨に次韻す

久苦趙盾日欣逢傅說霖。久しく趙盾の日に苦み、傅說の霖に逢ふを欣ぶ、坐知千里足初覺兩河深。坐して知る千里足るを、初めて覺ゆ兩河深きを、

久しく趙盾の日に苦み、傅說の霖に逢ふを欣ぶ、坐して知る千里足るを、初めて覺ゆ兩河深きを、

破屋常持傘無薪欲爨琴。破屋常に傘を持し、薪無くして琴を爨せんと欲す、清詩似庭燎雖美未忘箴。清詩は庭燎に似たり、美なりと雖も未だ箴を忘れず、

破屋常に傘を持し、薪無くして琴を爨せんと欲す、清詩は庭燎に似たり、美なりと雖も未だ箴を忘れず、

【字解】【一】趙盾 晉の文公の臣、「左傳」に、趙衰冬日之日也、趙盾夏日之日也、冬日可畏、夏日可畏、【二】傅說 殷の仁者なり、「尙書」に、高宗謂說曰、若歲大旱、用汝作霖雨とあり、【三】兩河 汴河と蔡河なり、【四】庭燎 「詩經小雅」に、庭燎夜未央とあり、宮庭に焚く所のがりび、羣臣を照らす、

【題義】朱光庭が喜雨の詩に次韻す、

【詩意】久しく趙盾が如き酷熱に苦み、今は傅說が如き仁雨に逢ふを欣ぶ、坐し乍らに千里の間十分に濕ひたるを知る、又兩河の水深く益すを覺ゆ、破屋は常に傘を持する状態、薪は買ふ能はざれば琴を爨せんとまで思ふ、君が喜雨の詩は古の庭燎詩にも似て居る、唯是れ美なるにあらず、亦以て箴と爲すべきである、

【餘論】起句對を以て作る、盛唐五律の正法、唯五六の二句稍滑調に近くして、大雅には近からず、紀曉嵐評して咄咄怪事と曰ふは當る、

奉勅祭西太一和韓川韻四首

勅を奉じ西太一を祭る、韓川の韻に和す 四首

聖主新除祕祝

聖主新に祕祝を除し、

【字解】【一】新除 太一を祭る

古今體詩 次韻朱光庭喜雨 奉勅祭西太一和韓川韻四首



侍臣來乞豐年。

侍臣來りて豐年を乞ふ、

壽宮神君欲至。

壽宮神君至らんと欲す、

夜半靈風肅然。

夜半靈風肅然たり、

【題義】元祐元年に哲宗の勅を奉じて、西太一を祭るに際し、監察御史たる韓川が詩を作りて示されたるを和したるなり、

【詩意】皇帝が太一を祭らん爲め新に其の祭官を除任せらる、特に侍臣を列せしめて豐年を祈り乞はしむ、祭を設けて居る中に其の神が髣髴と眼前に至るかと思はる、更に夜半に及んでは、靈風が良に肅然として人の襟を正さしむる、

〔二〕

玉璽親題御筆。

玉璽親しく御筆を題し、

金童來侍天香。

金童來りて天香に侍す、

禮罷祝融參乘。

禮し罷んで祝融參乘し、

前驅已過衡湘。

前驅已に衡湘を過ぐ、

〔二〕

【字解】〔一〕玉璽「史記秦始皇紀」に、趙高令三子嬰受玉璽」とあり、〔二〕祝融 南方炎帝の佐、即ち火の神の名、

【詩意】祭を設くる詔は御筆と玉璽を親裁し玉ふ、天仙の童子は來りて天香に侍坐し、一齊に禮し罷む時に祝融神も參乘し、警蹕嚴然として其の前驅は已に衡湘を過ぎ去る、

〔三〕

解劍獨行殘月。

劍を解いて獨り殘月に行き、

披衣困臥清風。

衣を披きて清風に困臥す、

夢蝶猶飛旅枕。

夢蝶猶ほ旅枕に飛び、

粥魚已響枯桐。

粥魚已に枯桐に響く、

〔三〕

【字解】〔一〕夢蝶「莊子齊物論」に、莊周夢爲蝴蝶、栩栩然胡蝶也、俄然覺則遽遽然周也、不知周之夢爲胡蝶、與、胡蝶之夢爲周與とあり、〔二〕粥魚「晉書張華傳」に、臨平岸、出石鼓、槌之無聲、華

曰取蜀中桐材、刻爲魚形、扣之則鳴矣、如其言、果聲聞數里とあり、佛寺の木魚是と同じ、

【詩意】劍を解いて以て獨り殘月の曉に向つて行く、衣を披いて清風に向つて困臥す、夢蝶は猶ほ旅枕を繞りて飛ぶも、曉を報ずる粥魚は已に枯桐に響く、

〔四〕

陂水初含曉淥。

陂水初めて曉淥を含み、

稻花半作秋香。

稻花半ば秋香と作る、

〔四〕

【字解】〔一〕皂蓋 太守の製、



皂蓋却迎朝日。  
皂蓋却つて朝日を迎へ、  
紅雲正繞宮牆。  
紅雲正に宮牆を繞る、

【詩意】 陂の水は初めて曉濼を含み、稻花は半ば熟して秋香を作す、官人の乗る車の皂蓋は却つて朝日を迎へ、紅色の雲は正に是れ宮牆を圍繞する、

【餘論】 四首正しく祭を設ける事、天子親臨する事と、臣下が前夜より宿する事と、車駕還御の事と此の四意を含むものの如し、六言詩は漢の司農谷永より始まる、故に古詩の一體たるは論勿し、平仄も近體の如く整正するは却つて其の法にあらず、

西太一見王荆公舊詩偶次其韻二首

西太一に王荆公が舊詩を見る、偶ま其の韻に次す 二首

秋早川原淨麗。  
秋早くして川原淨麗、

雨餘風日清酣。  
雨餘にして風日清酣、

從此歸耕劍外。  
此從り劍外に歸耕せん、

何人送我池南。  
何人か我を池南に送らん、

【字解】 〔一〕淨麗、南史謝裕傳に、居宇淨麗とあり、〔二〕劍外、杜甫の詩に、草木變衰行劍外とあり、劍門關外を謂ふ、

【題義】 西太一宮に王荆公が題詩ありしを見て其の韻に次するなり、作者が故人と成りしなれば舊詩と題す、已むを得ざるならんが、余は舊詩を題詩と改むる方可なりと思ふ、  
【詩意】 夏去り秋來りて川原も淨麗と爲る、況んや雨の餘風日も清酣である、吾も此より劍門關外に歸耕せんと思ふ、何人か我が池南に返るを送る人なるや、

〔一〕

〔二〕

但有尊中若下。

但尊中の若下あり、

何須墓上征西。

何ぞ須ひん墓上の征西を、

聞道烏衣巷口。

聞く道らく烏衣巷口、

而今煙草萋迷。

而今煙草萋迷、

【字解】 〔一〕若下、邨の名、美酒を出す地、〔二〕墓上、今日北京本や上海本には墓上とあり、舊本悉く墓上に作る、魏武紀注、載公十二月己亥令云云、後徵爲都尉、及遷

爲典軍校尉、意遂更欲爲國家討

レ賊立也功、欲望封侯、作征西將軍、然後題墓道一言、漢故征西將軍曹侯之墓、〔三〕烏衣巷、金陵に在り、晉の王謝が居りし所、劉禹錫の詩、烏衣巷口夕陽斜とあり、〔四〕萋迷、荆公金陵に居せしも、是の時已に墓と爲る、荆公は元祐元年四月に卒す、

【詩意】 但尊中には若下邨にて醸造せる酒がある、生きて酒を飲むは死して征西將軍の墓なぞと題することは無用である、人の道ふ所を聞くと、烏衣巷口の狀態は、只今煙草が萋迷たるのみである、

【餘論】 此の二首は紀曉嵐評して曰く、六言難得三如レ此流利と、荆公の原作は、柳葉鳴蜩綠暗、荷



花落日紅酣、三十六陂春水、白頭相見江南、二十年前此地、父兄持我東西、今日重來白首、欲尋舊迹一都迷、可もなし、不可もなし、

次韻子由送陳侗知陝州

子由が陳侗の陝州に知たるを送るに次韻す

誰能如鐵牛、橫身負黃河、  
滔天不能沒、尺箠未易訶、  
世俗自無常、徐公故逶迤、  
別來不可說、事與浮雲多、  
當時無限人、毀譽即墨阿、  
虛聲了無實、夜蟲鳴機梭、  
相逢一笑外、奈此白髮何、  
天驥皆籬雲、長鳴飽芻禾、  
王庭旅百實、大貝隨弓戈、  
君獨一麾去、欲廣五袴歌、

誰か能く鐵牛の如く、身を横へて黃河を負ふ、  
滔天沒する能はず、尺箠未だ訶し易からず、  
世俗自から常無し、徐公故に逶迤、  
別來說く可からず、事浮雲と多し、  
當時限り無きの人、毀譽は即墨阿、  
虚聲は了に實無く、夜蟲機梭を鳴らす、  
相逢ふ一笑の外、此の白髮を奈何、  
天驥は皆雲を籬み、長鳴して芻禾に飽く、  
王庭百實を旅ね、大貝弓戈に隨ふ、  
君獨り一麾し去り、五袴の歌に廣がんと欲す、

甘棠古樂國、白酒金叵羅

甘棠古の樂國、白酒金叵羅、

知君不久留、治行中新科、  
過客足嘖喜、東堂記分鵝、  
此外但坐嘯、後生工揣摩、

知る君が久しく留まらず、治行新科に中る、  
過客嘖喜足り、東堂分鵝を記す、  
此の外但坐嘯し、後生揣摩工なり、

【字解】

【一】鐵牛 王註偉曰く、陝州有鐵牛廟、今封爲順濟王、頭在河之南、尾在河之北、世傳禹以此鎮河患也、  
【二】橫身 查初白曰く、開元十二年、於河東縣、開東西門、各造鐵牛四、其牛並鐵柱、連腹入地丈餘、負橋跨河と、  
【三】滔水 尙書に洪水滔天とあり、  
【四】尺箠 韓愈の詩に、恨無一尺箠、爲國管羌夷とあり、  
【五】徐公 杜甫の詩に、徐公自有常とあり、三國の世、魏に徐邈あり、  
【六】徐公 杜甫の詩に、徐公自有常とあり、三國の世、魏に徐邈あり、  
【七】毀譽 「史記」に、齊の威王、即墨大夫を召し、語りて曰く、子の即墨に居りしより、毀言日に至る、吾れ人をして即墨を視察せしむ、田野闢け、人民給し、官事を留むる無し、東方以て寧し、是れ子は吾が左右に事へて以て譽を求めざるなり、之を萬家に封す、阿の大夫を召し、語りて曰く、子の阿に在りしより、譽言日に聞ゆ、然して人をして阿を視察せしむ、田野闢けず、民愁苦す、昔日趙、甌を攻む、子救ふこと能はず、衛は薛陵を取る、子は是を知らず、子幣を以て吾が左右を厚くして以て譽を求むるなり、是の日之を煮る、  
【八】夜蟲 蟲に促織の名あり、  
【九】籬雲 籬は字音テフ、クビワ、鉗なり、漢書禮樂志に、籬浮雲とあり、  
【一〇】天驥 「文選白馬賦」に、漢道興而天驥早才とあり、  
【一一】大貝 「左傳」莊公二十二年の條に、庭實旅百、奉之以玉帛とあり、  
【一二】書經顧命に、大貝鼗鼓在西房、兌之戈、和之弓、



垂之竹矢、在東房とあり、【三】五袴歌「後漢書」二十一、廉范字叔度、京兆の人、趙の廉頗の後なり、世世邊郡の守と爲る、匈奴を破つて功あり、蜀郡の太守と爲つて、民の信賴する所と爲る、民歌うて曰く、廉叔度來ること何ぞ暮きや、平生襦無く、今五袴のみと、【四】甘棠 陝州の地を指す、甘水が山曲の中に導くに因つて、世人其の地を目して甘棠と爲す、魏には甘棠縣、隋には壽安縣、唐は福昌縣と改む、【五】金叵羅 宋の王楙の「野客叢書」に、北史を引いて曰く、祖暅盜神武金叵羅、蓋酒器也とあり、如何なる器なるや、要するに盃なることは明白、察するに印度地方より來るものならん、金叵羅は漢土の音にあらざるなり、【六】嘆喜 晉の劉毅傳に曰く、初め江州の刺史庾悅、隆安中に司徒長史と爲る、曾て京口に至る、毅時に甚だ屯塞、先づ府に就いて東堂を借る、親故と出でて射を爲す、而して後、悅、僚佐と徑ちに來つて堂に詣る、毅之に告げて曰く、毅は屯否の人、一射を合する甚だ難し、君諸堂に於て竝に可なり、望むらくは今日を以て讓られよ、悅許さず、既にして悅鵝を食ふ、毅其の餘を求む、悅又答へず、毅嘗に之を銜む、義熙中、悅が豫章を奪ひ、其の軍府を解く、人をして其の旨を徵示せしむ、悅忿懼して死す、【七】後生 「史記」蘇秦、周書陰符を得、伏して之を讀む、期年、以て揣摩を出して曰く、此れ以て當世の君を説く可し、「鬼谷子」に揣摩篇あり、

【題義】 弟の子由が其の友陳侗が陝州に知事と爲つて赴任するを送る詩に坡が次韻したるなり、陳侗が陝州に知たるに際し勅して云ふ、出入冊府、幾二十年、安於分義、不妄附麗、以干進取、願下爲二郡、以恤幼孤、其の人品概知すべし、

【詩意】 誰人能く鐵牛の如く爲つて、一身を横へて黄河の害を負ふ者であるか、河水滔天なるも、鐵牛の功は没すべからず、一尺の箠を持つて決して叱詞することは出来ない、世俗は其の心事常あることなし、徐公の如きは俗の反對に雍容として迫らぬ、一別來の事説くべからず、萬事浮雲と同じく變化多し、當時限り無き多くの官人、毀譽の虚實は古の即墨と阿との如きものである、阿の如きは虚聲にて了に實の無きこと、宛かも夜蟲が促織と名を持ちながら其の實何物をも織らざると同じ、相逢

うて一笑する外、我は此の白髪を奈何せんや、天驥は地上のものにあらず、天上の雲を籟む、長鳴して芻禾を十分に飽くまで食ふ、王庭は百實渾て天地の美を旅ねる、而して大貝や精巧なる弓矢も隨うてある、然るに君は何ぞや、王庭の其の名譽なるを一塵し去つて、以て彼の五袴の歌に廢せんとするや、但し甘棠も古の樂國である、白酒を盛るに金叵羅を以てするの贅澤である、知る君が茲にも久留しないであらうことを、治行は新科に中るが故に、過客或は嘖り或は喜ぶに足る、東堂に於て分鵝の事は君も記憶して居るであらう、此の外は但坐して長嘯するのみ、其の批評は後生の揣摩に工なる者に任せんのみ、

【餘論】 紀曉嵐曰く、以鐵牛擬人、未レ免不倫、又中間を評して曰く、句法好と、又結末を評して曰く、亦未レ免太露牢騷、要するに饒舌を弄することを厭はざるは宋人の僻、如何ともすべからざるなり、

送賈訥倅眉二首 賈訥の眉に倅たるを送る 二首

當年入蜀歎空回、  
未見峨眉肯再來、  
童子遙知頌襦袴、

當年蜀に入つて空しく回るを歎ず、  
未だ峨眉を見ず肯て再び來らんや、  
童子遙に知る襦袴を頌するを、

【字解】 【一】義眉 四川の嘉州

に在り、之を望めば、兩山相對して

峨眉の如ければ名づく、【二】襦袴

前首廉范の記事を見よ、【三】尊疊



使君先已洗尊疊（三） 使君先づ已に尊疊を洗ふ、

【自注】李大夫眉之賢太守也。

鹿頭北望應逢雁（四） 鹿頭北望すれば應に雁に逢ふべし、

人日東郊尙有梅（五） 人日東郊尙ほ梅あり、

【自注】人日田東郊渡江游慕頤山眉之故事也。

我老不堪歌樂職（六） 我老いて樂職を歌ふに堪へず、

後生試覓子淵才（七） 後生試みに覓めん子淵の才、

作中和樂職宣布詩、選好事者、令依鹿鳴之聲、習而歌之、宣帝召見武等、皆賜帛とあり、子淵は王褒の字なり、

**【題義】** 賈誼が眉州に倅即ち副使と爲りて赴くを送る詩なり、

**【詩意】** 當年僕が蜀に入りしとき何の所得も無く回る、其の時は峩眉山を見ざるが爲めに肯て再來する、眉は教化が満ちて居ることは童子が襦袴の歌を誦するにて判る、使君は祖を祭るに用ふる尊疊を自ら洗ふ、鹿頭關に在つて北方の中原を望めば應に雁に逢ふであらう、人日東郊には尙ほ梅花あるを見る、僕は年老いて樂職の歌を作るに堪へない、後進の士即ち君の如き王子淵に類する才を具へる人を求むるのみ、

尊もサカダル、疊もサカダル、雲雷の形を畫きしものなり、【四】 鹿頭關名、蘇州羅江縣、【五】 北望、蜀より中原を望む、【六】 人日、正月七日なり、「荆楚歲時記」に、一日を雞と爲し、二日を狗、三日を羊、四日を猪、五日を牛、六日を馬、七日を人日と爲すと、唐の高適の人日寄杜甫詩に、梅花滿枝空斷腸とあり、【七】 子淵、漢の王褒傳に、王褒使

（二一）

老翁山下玉淵回

老翁山下玉淵回る、

手植青松三萬栽

手づから植う青松三萬栽、

父老得書知我在

父老書を得て我が在るを知り、

小軒臨水爲君開

小軒水に臨んで君が爲に開く、

試看一一龍蛇活

試みに看よ一一龍蛇活くるを、

更聽蕭蕭風雨哀

更に聽け蕭蕭風雨哀むを、

便與甘棠同不剪

便ち甘棠と同じく剪らず、

蒼髯白甲待歸來

蒼髯白甲歸來を待つ、

（二二）

老翁山下玉淵回

老翁山下玉淵回る、

手植青松三萬栽

手づから植う青松三萬栽、

父老得書知我在

父老書を得て我が在るを知り、

小軒臨水爲君開

小軒水に臨んで君が爲に開く、

試看一一龍蛇活

試みに看よ一一龍蛇活くるを、

更聽蕭蕭風雨哀

更に聽け蕭蕭風雨哀むを、

便與甘棠同不剪

便ち甘棠と同じく剪らず、

蒼髯白甲待歸來

蒼髯白甲歸來を待つ、

**【詩意】** 老翁山下に玉淵回り、手自ら植う青松三萬栽、郷黨の父老は書を得て我の健在なるを知り、小軒は水に臨んで開くは君が爲の故である、試みに看よ當年手植の三萬の松は皆是れ龍蛇の勢を爲して活き、更に風雨の時は蕭蕭と聲が哀む如くである、昔召公の息うた地の甘棠は人民が剪らない、今の松もそれと同じく少しも剪らない、松の蒼髯白甲なると同じく、我が先考も蒼髯白髪にして此に神が歸り來るあらん、

**【字解】** 〔一〕老翁、山名にして地名なり、坡公が父老泉の墓の在る所、〔二〕父老、杜甫の詩、父老四五人、問我久遠行とあり、〔三〕龍蛇活、手植の青松が老木と爲りたるを謂ふ、〔四〕甘棠、毛詩に、蔽芾甘棠、勿剪勿伐とあり、〔五〕蒼髯、老泉が老翁井銘に、往歲十年、山空月明、常有老人、蒼顏白髮、偃息於泉上、就之則隱而入於泉、因築亭於其上、又甃石以禦水潦之暴、



【餘論】此の篇二律、紀曉嵐評するが如く、前首深穩、後首は一氣渾成と、坡公の面目は實に此に在り、杜甫の詩に、柴門今日爲君開とあり、小軒は開くに力無し、坡公の大才も唐賢に及ばざる所多し、

送程建用

程建用を送る

先生本舌耕。文字浩千頃。

先生本舌耕。文字浩として千頃、

空倉付公子。坐待發苜蓿。

空倉公子に付し、坐待苜蓿を發す、

十年困新說。兒女爭捕影。

十年新說に困み、兒女争ひて影を捕ふ、

鑿垣種蒿蓬。嘉穀誰復省。

垣を鑿ちて蒿蓬を種る、嘉穀誰か復た省せん、

空餘南陔意。太息北堂冷。

空しく南陔の意を餘し、太息す北堂の冷、

織屨隨方進。採薪教韋逞。

屨を織つて方進に隨ひ、薪を採つて韋逞を教ふ、

辛勤守一經。菽水賢五鼎。

辛勤一經を守り、菽水五鼎よりも賢れり、

今年聞起廢。魯史復光景。

今年聞く廢れたるを起すと、魯史光景を復す、

公子亦改官。三就繁馬頸。

公子も亦官を改む、三就馬頸を繁にす、

歸來一笑粲。素髮颯垂領。

歸來一に笑粲、素髮颯として領に垂る、

會看金花詔。湯沐奉朝請。

會す看ん金花の詔、湯沐朝請を奉せん、

天公不吾欺。壽與龜鶴永。

天公吾を欺かず、壽は龜鶴と永し、

【字解】

【一】舌耕。「王子年拾遺記」に、賈逵口授經文、獻者積粟盈倉、或云賈逵非力耕所得、誦經口倦、世所謂舌耕也とあり、  
【二】浩千頃。韓退之の詩、歸來閱書史、文字浩千頃とあり、  
【三】若穎。若は「詩經小雅」に若之華、芸其黃矣とあり、ノウセンカヅラを言ふ、穎は穂の端なり、劉禹錫の詩に、蒼蒼一雨後、若穎如雲發とあり、  
【四】新說。王荆公の三經新義を指す、多く性命の説を言ふ、故に捕影を以て之を言ふ、「漢郊祀志」、谷永説上曰、姦人挾左道、以欺罔人主、聽其言、若將可遇、求之盪盪如係風捕影、終不可得、  
【五】鑿垣。「莊子庚桑楚篇」に、是其於辯也、將妄鑿垣牆、而植蓬蒿也とあり、  
【六】南陔。「東晉補亡詩」に、循彼南陔、言采其蘭とあり、孝子相戒以養也、  
【七】北堂冷。其母を念ふなり、詩に、焉得護艸、言樹之背とあり、背は北、北堂、萱堂、皆母を謂ふ、  
【八】織屨。「漢翟方進傳」、欲西至京師、受經、母憐其幼、隨之長安、織屨以給とあり、  
【九】採薪。「晉書列女傳」に、韋逞年少、母宋氏晝則樵採、夜則教逞、遂學成名立とあり、  
【一〇】一經。「漢韋賢傳」に、宣帝初即位、賢以先帝師爲丞相、少子元成、復以明經位至丞相、故鄒魯諺曰、遺子黃金萬籊、不如一經とあり、  
【一一】菽水。「禮記」に、子路曰傷哉貧也、生無以爲養、夫子曰、啜菽飲水、盡其歡、斯之謂孝とあり、  
【一二】五鼎。「漢主父偃傳」に、丈夫生不五鼎食、死則五鼎重耳とあり、五鼎は美食の代名詞なり、  
【一三】起廢。元豐八年に新法を罷め、元祐元年に青苗法を罷め、二年に安石の經義を禁じ、而して舊に復す、  
【一四】公子。建用を稱す、建用此の時、當に宣德郎を以て、中江縣に知たるべし、  
【一五】三就。「禮記」に、大路繁纓一就、先路三就、次路五就とあり、杜預曰く、繁纓馬飾也と、三重に馬の飾りを爲す、  
【一六】素髮。「文選潘安仁秋興賦」に、悟時歲之遺盡、兮、慨俯首而自省、斑鬢影以承兮、素鬢颯以垂、頰とあり、  
【一七】金花詔。退朝錄云、予嘗判官告院、郡夫人使金花羅紙、七張法錦縹袋、賜以湯沐之邑、而奉朝請、乃奉親之榮事也とあり、

【題義】

程建用字は彝仲、眉山の人、親を稅居に奉じ、蘇老泉と東西相望む、今宣德郎と爲つて眉山



に歸るを送るなり、

【詩意】建用の父先生は本と舌耕の人である、文章を屬るも亦千言浩浩湖の如し、而して其の逝くや空倉を君に付與して、君をして自立して苜蓿を發せしむるの力を養はしむ、是の時や新説なる經義の爲に諸生は皆困めらる、十年間は兒女輩に到るまで争うて影を捕ふる癡態を學ぶ、其の學たる恰も垣を鑿ちて蒿蓬を種うる如き愚事を爲す、嘉穀なりと雖も誰も省視する人は無い、譬へば南陔の如き嘉穀は空穀を餘すのみ、北堂に孝を盡すなどの人は無く古を知る者は太息するのである、昔は履を織つて其の子を學ばしめた母あり、又薪を采りて以て其の子を教へたる母あり、辛勤して一經を眞に守るは黄金百萬にも勝る、菽水は疎末なるものなれど、孝心を以て奉ずれば、五鼎なぞ奉ずるよりも賢る、幸にも今年は新法なぞと云ふ俗欺しは廢して、却つて廢して行はなかつた正法が行はるる様になつた、魯史の如き正經は原の光景に復り、而して君も亦官が改まつた、三就して馬頭を繁纓するの名譽を見る、歸來して唯一に笑樂する、素髪は颯として領に垂れる、會ず敍任の金花詔書を見て、親に奉じて安らかなる天の公は實に吾を欺かない、君の壽は定めて龜鶴の如く長命するであらう、

【餘論】紀曉嵐曰く、氣自遒緊、但乏深味、又曰く、魯史句未穩愜と、如何に作れば深味を含む、如何に作れば穩愜と、余は紀に向つて問はんと欲す、

次韻李修孺留別二一首

李修孺が留別に次韻す

二首

十年流落敢言歸。

十年流落して敢て歸るを言はん、

【字解】

〔一〕流落 官に在つて

魚鳥江湖只自知。

魚鳥江湖只自ら知る、

の流落を謂ふ、坡公初め杭州、次に湖州に徙り、而して密州、而して徐州、而して湖州、而して黃州と十年間外に在り、〔二〕魚鳥 杜甫の詩に、江湖多白鳥とあり、〔三〕青天 晉樂廣傳に、衛瓘命諸子造焉、曰此人之水鏡、見之瑩然若披雲霧、而觀青天、今の青天は天子を指して謂ふ、〔四〕黃髮 書に、詢茲黃髮、則罔所愆とあり、唐書郭子儀傳に、以身爲天下安危者二十年とあり、〔五〕吾子 爾汝之稱、孟子に吾子過矣とあり、〔六〕人物 晉書劉毅傳に、毅好臧否人物、王公貴人、望風懼之とあり、〔七〕折繻 繻はウスギヤ、帛なり、漢代之を合符に用ふ、漢書終軍傳に、終軍年十八、選爲博士弟子入關、關吏與軍繻、終軍曰、以此何爲、吏曰爲復傳還、當以合符、終軍曰大丈夫西游、終不復傳還、棄繻而去、後爲謁者、建節東出關、關吏識之曰、此使者迺前棄繻生也、〔八〕繻衣 「禮記」に、孔子曰、好賢如繻衣、惡惡如巷伯、「毛詩」に、繻衣美武公也、美其德以明有國善之功焉とあり、

豈意青天掃雲霧。

豈意はんや青天雲霧を掃ふことを、

盡呼黃髮寄安危。

盡く黃髮を呼んで安危を寄す、

風流吾子眞前輩。

風流吾子眞に前輩、

人物他年記一時。

人物他年一時を記す、

我欲折繻留此老。

我繻を折つて此の老を留めんと欲す、

繻衣誰作好賢詩。

繻衣誰か賢を好むの詩を作る、

折繻

繻はウスギヤ、帛なり、漢代之を合符に用ふ、「漢書終軍傳」に、終軍年十八、選爲博士弟子入關、關吏與軍繻、終軍曰、以此何爲、吏曰爲復傳還、當以合符、終軍曰大丈夫西游、終不復傳還、棄繻而去、後爲謁者、建節東出關、關吏識之曰、此使者迺前棄繻生也、〔八〕繻衣 「禮記」に、孔子曰、好賢如繻衣、惡惡如巷伯、「毛詩」に、繻衣美武公也、美其德以明有國善之功焉とあり、

【題義】李修孺が留別の詩に次韻して作る、李の事蹟は未考、



【詩意】十年も他郷に流落して敢て歸ると言ふ、魚鳥のみ江湖に於て只自ら知、意はざりき雲霧散じて再び青天を觀るを得んとは、世人は此の黃髮の老人に依頼して安危を托する、意ふに風流なる吾子は真に前輩である、人物として他年聞く一時を救ふの力ある人と、我は退官しても此の老は是非遺留を望む、賢を好むの人は彼の縑衣の章の如きものを作りて、此の公の美を歌ふべきである、

〔一〕

〔二〕

此生別袖幾回磨。

此の生別袖幾回か磨す、

夢裏黃州空自疑。

夢裏黃州空しく自ら疑ふ、

何處青山不堪老。

何れの處か青山老に堪へざる、

當時明月巧相隨。

當時明月巧に相隨ふ、

窮通等是思家意。

窮通等しく是れ家を思ふの意、

衰病難堪送客悲。

衰病堪へ難し客を送るの悲み、

好去江魚煮江水。

好し去つて江魚江水に煮ん、

劍南歸路有姜詩。

劍南歸路姜詩有り、

ふ、姑感慚して呼び還す、恩養愈よ謹む、又姑魚鱸を嗜む、又獨り食ふ能はず、夫婦嘗て力作して鱸を供し、鄰母を呼んで之を共にす、

【字解】〔一〕明月 李太白の詩

に、人攀明月不可得、月行却與

人相隨とあり、〔二〕劍南 成都府

の地名、〔三〕姜詩 漢の人、其の

妻と共に母に事へて至孝、妻は奉順

尤も篤し、母好んで江水を飲む、舍

を去る六七里、妻常に流に浜りて汲

む、後風に値ひ、時に還るを得ず、

母渴す、詩責めて之を遣る、妻乃ち

鄰舍に寄止し、晝夜紡績、鄰母をして

其の姑に遣らしむ、是の如きもの久

し、姑怪み鄰母に問ふ、鄰母具さに對

舍側忽ち涌泉あり、味江水の如し、毎旦輒ち雙鯉魚出づ、常に以て二母の膳に供す、後世其の地を姜師鎮と呼ぶ、

【詩意】此の人生は幾回か別袖を繰り返すや、身は今黃州に在つて猶ほ夢裏かと自ら疑ふ、何の處の青山も老に堪へざる所は無い、當時の明月は變ずること無く影が我と隨處に在る、而かも窮に於て通に於て家を思ふの意は同じである、但衰病の中に在つて客を送るは第一の悲痛である、君は好し去つて江魚を取つて江水に煮よ、劍南への歸路には姜師鎮がある、

【餘論】曉嵐前首を評して、特多情と曰ひ、後首を評して、窮通句精警と曰ふ、前首を多情と言ふは、後首は反對に薄情であるのか、後首五六を精警と言ふは、三四は率易と言ふのであるか、余は寧ろ三四を以て精警と言はんと欲す、五六は平凡、決して精警にあらずと思ふ、堪二字あるは失考、

黃魯直以詩饋雙井茶次韻爲謝

黃魯直詩を以て雙井茶を饋らる、次韻謝を爲す

江夏無雙種奇茗。

江夏無雙奇茗を種う、

汝陰六一誇新書。

汝陰六一新書に誇る、

磨成不敢付僮僕。

磨成して敢て僮僕に付せず、

自看雪湯生玢珠。

自ら看る雪湯玢珠を生ずるを、

【字解】〔一〕江夏無雙 「後漢

書」に、黃香博學經典、能文章、

京師號曰天下無雙、江夏黃童、今以

て魯直を譬ふ、〔二〕汝陰 縣名、

今の安徽省阜陽縣治とす、〔三〕六

一 歐陽修は自から六一居士と號



列仙之儒瘠不腴。 只有病渴同相如。 明年我欲東南去。 畫舫何妨宿太湖。

列仙の儒瘠せて不腴、 只病渴の相如に同じき有り、 明年我東南に去らんと欲す、 畫舫何ぞ妨げん太湖に宿するを、

如は消渴と稱する病あり、【六】畫舫 優に五十人を乗せ得る舟、彩色を施すを以て畫舫と謂ふ、

【四】不敷 茶を製するに、自から用を爲し、童僕の手を勞せず、【五】生瓊珠 茶湯の湧沸するを謂ふ、【六】列仙之儒 司馬相如が大入賦序に、以爲列仙之儒、居三山澤間、形容甚臞、【七】病渴 司馬相

【題義】黃魯直即山谷が詩を寄せられ、且つ雙井の茶を饋られたるに酬ゆる詩である、

【詩意】江夏無雙の人が江夏無雙の茶を栽培する、汝陰の六一居士は新著の成るを誇る、茶を製し、茶を煮る童僕の解し得る所でない、必ずや夫子自ら煮ざるべからず、乃ち自ら煮る雪湯が瓊珠を生ずるの趣が出る、列仙の儒は瘠せて腴えずと聞く、司馬相如の渴は必ず飲料に依頼せざるを得ない、明年は我も亦東南方に向つて遊び、其の時は畫舫を太湖に泛べて茶を舟中に煮て宿せんと思ふのである、

【餘論】紀は評して曰く、眞效三山谷體、却非山谷之佳者、此の評は切當なるを覺ゆ、

次韻黃魯直赤目

黃魯直の赤目に次韻す

誦詩得非子夏學。 詩を誦する子夏が學に非ざるを得んや、【字解】【一】誦詩 ト商字は子

細史正作邱明書。

細史正に作る邱明が書、

天公戲人亦薄相。

天公人に戲る亦薄相、

略遣幻翳生明珠。

略ぼ幻翳を明珠に生ぜ遣む、

賴君年來屏鮮腴。

賴に君年來鮮腴を屏け、

百千燈光同一如。

百千燈光一如に同じ、

書成自寫蠅頭表。

書し成る自寫の蠅頭の表、

端就君王覓鏡湖。

端しく君王に就いて鏡湖を覓む、

【六】屏 坐右に寄せ付けざる、【七】鮮腴 魚肉や獸肉の類、【八】同一如 一燈二燈三燈、乃至百千の燈、燈光は益す明なるも、多きも彼燈と此燈と毫髪も光を妨げず、是を同一如と言ふのである、【九】蠅頭表 細字にて書く表を謂ふ、【一〇】鏡湖 賀知章、天寶の初、病んで夢に帝居に遊ぶ、數日にして寤む、乃ち請うて道士と爲り、郷に還る、詔して之を許す、宅を以て千秋觀と爲して居る、周官湖數頃を求めて、放生池と爲すと、李太白の憶賀監詩に、欲下江東去、定將誰舉杯、稽山無賀老、卻棹酒船回とあり、

【題義】黃山谷が眼病の詩を示されたるを次韻して作る、

【詩意】詩を誦するは乃ち是れ子夏の學統を繼がん爲である、明を失するも猶ほ書を著はせる丘明は今日に求むれば君である、然るに天公は無情にも惡戲をして其の形を損するや、何の用も無き幻影をして明珠に生ぜしむるや、唯賴とする所は君は年來魚肉を遠ざけて、精進して燈燈は一如なりとの

夏、詩序を爲る、毛公は其の弟子とす、子夏、子夏を哭して明を失ふ、【一】細史 「漢司馬遷傳」に、爲太史令、細史記石室金匱之書とあり、【二】邱明 司馬遷答任少卿書云、左邱明、厥有國語、左丘は複姓、明は名、複姓を一字割きて名と合す、諸葛亮を葛亮と稱するの類か、【四】薄相 明目を盲目に變ぜしむる類、是皆薄相なり、【五】幻翳 眼前物無きに物有る如くなるを幻翳と謂ふ、



正眼しやうげんを開ひらきて居をられる、所謂いはずる慧眼えいげんを肉眼にくげんの外ほかに具そなへて如何いかなる細字さいじでも書かき玉たまふ、乃すなはち端正たんせいに君王くんわうに就ついて鏡湖きやうこを覓もとむるの表へうを呈ていすることが出で来る、

【餘論】今體きんたいなるが如ごとく、古體こたいなるが如ごとく、再讀さいどく三讀さんどく、以もつて古體こたいたるを知る、紀曉嵐きけうらん曰いはく、亦また倣なま山谷さんくと、世よに山谷さんくを稱しょうして詩魔しまと稱しょうす、坡公はこうも亦また魔道まどうに墮だせるものである、

武昌西山

武昌西山

嘉祐かいう中翰林學士承旨鄧公聖求しやうせい爲な武昌令れい常游つね寒溪かんけい西山せいざん山中人さんちゆう。至いた今能言之いま。軾しやく謫居たくき黃岡わうかう與あひ武昌相望あひま。亦常往來またつね溪山間けいざん。元祐元年十一月二十九日考試館職げんじ與あ聖求會宿あひま玉堂ぎやうだう。偶話舊事ぐわ聖求嘗作せいきやう元次山げんじ窪尊銘くわそんめい刻之くわ巖石がんせき。因爲此詩請聖求同賦な當以遺邑人あそ使刻之銘側さんちゆう。

【訓讀】嘉祐中翰林學士承旨鄧公聖求、武昌の令と爲る、常に寒溪の西山に遊ぶ、山中の人、今に至りて能く之を言ふ、軾の謫居黃岡は武昌と相望む、亦常に溪山の間に往來す、元祐元年十一月二十九日、考試館の職、聖求と玉堂に會宿し、偶ま舊事を話す、聖求嘗て元次山窪尊銘を作り、之を巖石に刻す、因つて此の詩を爲る、聖求に同賦を請ひ、當に以て邑人に遣り、之を銘側に刻せしむべし、

【字解】(一) 嘉祐 北宋仁宗の年號、八年を以て治平に遷る、(二) 翰林學士承旨 正三品とす、(三) 爲武昌令 今の湖北省、(四) 謫居黃岡 神宗の元豐三年己未、年四十四を以て公は黃州に貶せらる、嘉祐元年より二十四年後とす、(五) 元祐元年 哲宗立ち、神宗崩す、元豐二年より八年後とす、(六) 玉堂 宋代祠官に玉局觀提舉あり、道觀を守る資格の者を試験する官、坡公は此職に居る、玉堂は即ち玉局と同じ、(七) 元次山窪尊 道家の仙神の名、彼の土の名山勝概、半は佛寺、半は道觀にて占領する、

春江淥漲蒲萄醅

春江淥漲りて蒲萄は醅す、

武昌官柳知誰栽

武昌官柳知る誰か栽うる、

憶從樊口載春酒

憶ふに樊口に春酒を載せしより、

步上西山尋野梅

歩して西山に上りて野梅を尋ぬ、

西山一上十五里

西山一たび上る十五里、

風駕兩腋飛崔嵬

風兩腋を駕して崔嵬に飛ぶ、

同游困臥九曲嶺

同游困臥す九曲嶺、

褰衣獨到吳王臺

衣を褰げて獨り到る吳王臺、

中原北望在何許

中原北望何の許にか在る、

但見落日低黃埃

但見る落日黃埃低るるを、

歸來解劍亭前路

歸來解劍亭前の路、

【字解】(一) 蒲萄醅 春江淥漲の景色を蒲萄醅の如しと形容する、

蒲萄酒を飲むのではない、應榴が東坡詩注に、梁溪漫志云と評すれども、梁溪漫志を檢するに其の記事無し、(二) 樊口 「水經注」に、江水右得樊口とある、「名勝志」に、樊山下、爲樊口、亦名樊港とある、

(三) 春酒 張平子の東京賦に、致欣權於春酒とある、(四) 兩腋 盧仝の詩に、兩腋生清風とある、

(五) 九曲嶺 「武昌志」に、樊山即西山、九曲嶺在樊山南嶺、路九折故名、有九曲亭、子由作記とある、

(六) 吳王臺 「名勝志」に、吳王避髡宮在寒溪上、今圓通閣是也、とある、



蒼崖半入雲濤堆。 蒼崖半は入る雲濤堆、  
浪翁醉處今尚在。 浪翁醉ふ處今尚ほ在り、  
石臼杯飲無尊疊。 石臼杯飲尊疊無し、  
爾來古意誰復嗣。 爾來古意誰か復た嗣ぐ、  
公有妙語留山隈。 公妙語有り山隈に留む、  
至今好事除草棘。 今に至りて好事草棘を除く、  
常恐野火燒蒼苔。 常に恐る野火の蒼苔を燒くを、  
當時相望不可見。 當時相望むも見る可からず、  
玉堂正對金鑾開。 玉堂正に金鑾に對して開く、  
豈知白首同夜直。 豈知らんや白首夜直を同じうし、  
臥看椽燭高花摧。 臥して看る椽燭高花の摧くるを、  
江邊曉夢忽驚斷。 江邊曉夢忽ち驚斷し、  
銅環玉鎖鳴春雷。 銅環玉鎖春雷鳴る、  
山人帳空猿鶴怨。 山人帳空しく猿鶴怨み、

る、【七】何許、ゆるす、聽許、從許が本義なるも、此と所との二義にも用ふ、坡詩特に多し、【八】黃埃、白樂天の句、風吹黃埃起、落日驅征車とある、【九】解劍亭、武昌に在る、越の子胥江を渡るの處、【一〇】浪翁、唐の詩人、元結、天下兵亂起るや、逃れて猗玕洞に入る、自から猗玕子と稱す、後、漢濱に家す、乃ち自から浪士と稱す、樊上の人、之を漫叟と呼ぶ、【二】石臼杯飲、杯はホリとハイとの二義に用ふ、例せば一抔土の如きは、掌の如き小さな土の意義、それと同じく杯飲は、手にて掬ひのむ義、元結は樊上に居て、杯尊の銘を爲る、序に曰く、郎亭西、乳有礫石、石臨樊水、漫叟構石、顛以爲亭、石有穴、顛者、因修之、以藏酒、孟子源愛之、命爲杯尊、公は聖求を指す、【三】金鑾、蓬萊山に在り、【三】椽燭、金蓮花を以て、椽燭を承ける、杜甫の詩に、空燒夜燭花とある、【四】帳空、山人が山中に在らずして、人中

江湖水生鴻雁來。  
請公作詩寄父老。  
往和萬壑松風哀。

江湖水生じて鴻雁來る、  
請ふ公詩を作りて父老に寄せよ、  
往いて和せん萬壑松風の哀むに、

蓬萊山に在り、【三】椽燭、金蓮花を以て、椽燭を承ける、杜甫の詩に、空燒夜燭花とある、【四】帳空、山人が山中に在らずして、人中

【題義】武昌の西山に遊ぶが主意にして、鄧公が武昌の令と爲りて居りしことを客意として記す、序言は記して字の如く別に解し難き所は無い、

【詩意】春江の水色は宛も蒲萄醕を漲らした如くである、武昌城を繞る官柳は初めは誰が栽るしものなるや、今に記憶する曾て樊口より春酒を載せて舟にて涉り、それより歩いて西山に上りて野梅を尋ねしことを、西山は一直線に上ること十五里、兩腋が全く風に駕して崔嵬に飛び上る、同游の人は疲勞して九曲嶺に困臥するも、我は衣を蹙めて獨り吳王臺址を弔ふ、此の處より中原を北望すれば何許である、但見る何物も無く、落日の黃埃の中に低るるを、下山し來りて解劍亭前の路に至れば、蒼崖は雲濤の堆中に入つて見え、浪翁が曾て醉ふ處は今尚ほ址が在る、石臼杯飲尊疊無きの風流を想像する、其の風流の古意を誰か復た嗣ぐや、唯鄧公は浪翁に嗣いで妙語を山隈に留む、今に至るまで好事の者は碑頭の草棘を除き、且つ常に恐る野火が古色愛すべき蒼苔を燒くを、當時同じく官人と爲つて、我は玉堂に在つて鄧公は金鑾殿に在る、而かも相望むも見ることは出來ぬ、豈知らんや兩人と



も白首にして夜直を同じうせんとは、而して兩人とも臥して看る椽燭の高花が摧け落つるを、江邊に曉夢が忽ち醒め來れば、銅環玉鎖して唯春雷が鳴り、山人山に在らず其の空帳に對して猿鶴が空しく怨む、江湖には水生じて鴻雁來る、雁は信を傳ふるもの、請ふ公よ余が爲に詩を作りて父老に寄し玉へ、西山に往つて相和せんかな松風の哀む聲に、

【餘論】此の篇二十八句、二百字、一韻到底の作である、王文簡の「古詩平仄論」に、此の詩を出して曰く、若二平韻到底者、斷不可雜以三律句、其要在第五字必平、第四字第五字平仄既合、第二字可レ平可レ仄、然不レ如三平之諧一也、今此に示さんに春江の句、平平仄仄平平、武昌の句、仄仄平仄平、平平、歩上の句、仄仄平平仄平、風駕の句、平仄仄仄平平、以下悉く此の法、王文簡は平韻到底者と謂ふ、案するに、杜甫の哀江頭にせよ、韋諷錄事宅觀曹將軍畫馬圖一引にせよ、丹青引贈曹將軍霸一にせよ、此等は一韻到底にあらず、數度換韻の作、而かも句脚の三字を見るに、皆平平平或は平仄平にして、仄平平は極めて寥寥と爲す、武昌の此の詩を除く外、自金山一放船至焦山の詩、答呂梁仲屯田の詩、游三徑山の詩、一韻到底の作として例と爲す、一韻到底の例と爲すは善、一韻到底にあらざる詩も、亦此の平仄法を守るものと心得て善し、紀評は、筆筆老健とある、

西山詩和者三十餘人再用前韻爲謝

西山の詩和する者三十餘人、再び前韻を用ひて爲に謝す

朱顔發過如春醕。胸中梨棗初未栽。丹砂未易掃白髮。赤松却欲參黃梅。寒溪本自遠公社。白蓮翠竹依崔嵬。當時石泉照金像。神光夜發如五臺。飲泉鑿面得眞意。坐視萬物皆浮埃。欲收暮景返田里。遠泝江水窮離堆。還朝豈獨羞老病。自嘆才盡傾空壘。

【字解】(一) 發過 過つて酒が顔色に出る、白樂天の詩に、朝酒發紅顔とあり、清潭案す、過は或は渦の誤字かと、羅大經の「鶴林玉露」に類上酒渦と云ふ語あり、酒の爲に類が赤色に渦を生ずるなり、胡澹菴が記事と并讀すれば、明白のものがある、(二) 梨棗 「眞語」に、右英王夫人、授許長史曰、火棗交梨之樹、已生君心中、猶有荆棘相雜、是以二樹不見、可剪荆棘、出此樹、單生とある、(三) 丹砂 丹砂化爲黄金と言ふを聞くも、白髮を黒髮と化することは出来ない、(四) 赤松 古の仙人、(五) 黃梅 唐の高僧、姓は周氏、名は弘忍、蕪州黃梅の人、禪宗第五祖とす、代宗の朝、大滿禪師と追諡せらる、始め破頭山の栽松道者たり、四祖に請うて曰く、道得べきや、祖が曰く汝已に老ゆ、



諸公渠渠若夏屋。  
 諸公渠渠夏屋の若く、  
 呑吐風月清隅隈。  
 風月を呑吐して隅隈を清うす、  
 我如廢井久不食。  
 我は廢井の如く久しく食はれず、  
 古甃缺落生陰苔。  
 古甃缺落して陰苔を生ず、  
 數詩往復相感發。  
 數詩往復して相感發し、  
 汲新除舊寒光開。  
 新を汲み舊を除きて寒光開く、  
 遙知二月春江闊。  
 遙に知る二月春江の闊きを、  
 雪浪倒卷雲峯摧。  
 雪浪倒卷して雲峯摧く、  
 石中無聲水亦靜。  
 石中聲無くして水亦靜か、  
 云何解轉空山雷。  
 云何ぞ轉を解く空山の雷、  
 欲就諸公評此語。  
 諸公に就いて此の語を評せんと欲し、  
 要識憂喜何從來。  
 識らんと要す憂喜の何より來るを、  
 願求南宗一勺水。  
 願はくは南宗一勺の水を求めて、

【自注】韋應物詩云。水性本云靜。石中固無聲。如何兩相激。雷轉空山驚。

若し再來せば、吾尙ほ運つべし、汝道者去つて水邊に行け、周氏の女子を見、水邊より策を回らし、歸山して化す、其の女輒ち孕む、已にして子を生む、後復た四祖に遇うて得度し、法を破頭山に傳ふ、衣鉢を盧能に付し、安坐して逝く、塔を黃梅東山に建つ、【六】遠公社。晉の高僧慧遠は道安の弟子なり、姓は賈氏、雁門樓煩の人、義熙中に寂す、廬山を出でざること三十年、東林寺に社を結び、之を白蓮社と稱す、【七】神光夜發。坡公の菩薩泉銘の序に云ふ、陶侃(晉人)廣州たり、漁人あり毎夕神光を海上に見る、之を跡せしむ、金像を得たり、初め武昌の寒溪寺に送る、其の後慧遠禪師、(雁門の慧遠、江陵の慧遠、敬煌の慧遠と三慧遠あり、此の慧遠は雁門の慧遠ならん)像を廬山に迎ふ、唐の會昌中、

往與屈賈湔餘哀。

往いて屈賈が與に餘哀を湔がん、

天下の寺を毀つ、二僧あり像を錦繡谷に藏す、佛教興復に及んで像を求むるも得べからず、而して谷中今に至りて光景の發見するあり、峩眉五臺山見る所の如し、今寒溪の西數百步、泉あり嶽竇の間より出づ、色白くして甘し、豈昔金像の在る所か、余今案するに五臺を以て云云するより見れば、文殊大士の像なること疑ひを容れず、【八】收暮景。夕暮の景色を言ふにあらず、【九】離堆。山の名、蜀の永康軍に在り、「漢溝洫志」に、蜀守李冰、離堆を鑿ち、沫水の害を避け、二江在成都の中に穿つ、【一〇】才盡。「南史江淹傳」江淹夢に、郭璞曰く吾、筆あり、卿が處に在ること多年、以て還さるる可し、淹乃ち懷中を探り、五色の筆を得たり、一に以て之に授く、爾後詩を爲る、絶えて美句なし、時人之を才盡と謂ふ、【一一】渠渠。毛詩、於我乎夏屋渠渠とあり、深廣の貌を言ふ、【一二】隅隈。「楚辭天問」に隅隈多有とあり、【一三】廢井。賈島の詩に、一日不讀書、心荒如廢井とあり、「周易」に、井泥不食、舊井無禽とあり、【一四】古甃。甃は今日の所謂煉瓦の類、井戸の周圍を疊むものなり、【一五】石中。韋蘇州の詩に、水性本云靜、石中固無聲、如何兩相激、雷轉空山驚とあり、【一六】南宗一勺水。南宗は北宗に對する語、南宗の一祖を六祖大師慧能とす、姓は盧氏、南海新興の人、少にして薪を買ひ母を養ふ、偶々酈市の中に金剛經を誦するを聞き、悚然として其の人に問うて曰く、此れ何の法なる、曰く金剛經、黃梅の忍大師に得と、師遽かに其の母に告げて、直ちに韶州に抵り、石を抱きて春つき、以て大衆に供す、後法衣を得、生地に廻るを計る、先天二年寂す、俗壽七十六、憲宗追諡して大鑿と曰ふ、【一七】屈賈。楚の屈原と漢の賈誼、

【題義】武昌西山の詩を作りて人に示す、人の和詩を作る者三十餘人の多きに至る、坡公乃ち此を賦して謝を爲す、

【詩意】誤つて朱顔をして春醕の如く爲したるは、曾中に荆棘多く梨棗の如き佳樹を栽るざるが爲である、丹砂は仙寶として貴きものなるが未だ白髪を變化させる力は無、赤松子は仙術を得て貴き仙人であるが、而かも黃梅には教を乞はざるを得ない、我が遊びし處の寒溪は晉の慧遠法師の隱栖した



る地である、其の白蓮社を繞る翠竹は崔嵬に依つて清風を吹く、當時の史を讀むと石泉が金瑞を照らして神光が夜發して五臺山の如きの狀である、其の清泉を飲み且面を鑿れば乃ち眞意を知ることが出来る、是に於てか坐しながら萬物が皆浮埃の如くなるを悟る、世の浮榮などは埃に等し、其の埃を愛せんより殘年を收めて田里に返らんと欲する、遠く江水を浜りて離堆の窮まる地まで行かんと思ふ、而かも其の願は空しく又朝に歸りて獨り老病を差づるのみでない、自ら太息する才力盡きて空疊を傾ける如く何物も智中より出て來ない、然るに諸公は渠渠深廣にして夏屋の若く、風月を吞吐して隅隈を清うするの才力を具へらる、我は廢井の如く久しく書物を讀まない、所謂古甃が缺落して陰苔を生ずる如くである、諸公の寄せらるる詩を讀んで唯感發するのみ、新を汲み舊を除きて寒光正に開く、遙に知る二月の節は春江が廣闊と爲つて、雪浪倒卷して雲峯摧くの概がある、石中聲無く水も亦靜である、云何がして空山の雷を轉ずることを解せる、我は自解の力なし、諸公に就いて此語を批評せんと思ふ、識らんと要することは憂喜は何くより來るものによ、願はくは南宗の大悟徹底せる一勺の烈水を求めて、往いて屈原や賈誼が爲に餘哀を滴かんと思ふ、

【餘論】 紀曉嵐は此の篇を評して、忽入三議論、發三出今昔升沈大感、波瀾壯闊之至、妙於本地風光、不三是横生三枝節、此の壯闊波瀾の語は、眞に此の詩に對して切當なるものである、本地風光とは何事を言ふや、佛氏の説を流用して、屈原や賈誼が、現世の事に憂喜を寄せて、終身悟る所無きを、坡公は佛より得たる慧眼を以て、彼等を濟度せんと爲したる事を指すならんが、本地風光では、其の事を評する語とは成らず、坡公は西山が佛寺と關係あるより、説いて此に及びしもの、此等の得力は太白や杜甫や韓退之の及ぶ所でない、況んや楊萬里をや、陸放翁をや、

狄詠石屏

狄詠の石屏

霏霏點輕素、渺渺開重陰。

霏霏として輕素を點じ、渺渺として重陰を開く、

風花亂紫翠、雪外有煙林。

風花紫翠を亂し、雪外に煙林有り、

雪近勢方壯、林遠意殊深。

雪近くして勢方に壯ん、林遠くして意殊に深し、

會有無事人、支頤識此心。

會ま無事の人有り、頤を支へて此の心を識らん、

【字解】 一 霏霏 細雪の形容、二 渺渺 廣大の形容、三 風花 庚開府の詩に、風花直亂回とある、

【題義】 狄詠字は子雅が石屏、即ち石が自然に屏風を爲したるものを詠するのである、

【詩意】 霏霏として輕素を點じたる處もある、渺渺として重陰を開く處もある、風が雪を花の如く散亂して石の紫翠なる處を點す、其の雪の外には別に煙林がある、雪の近き處は勢が方に盛んである、煙林の遠き處に對して意は殊に深きものがある、會ま無事の人、頤を支へて此の心を識認するであらう、

【餘論】 此等の詩、坡公として平平凡凡喫茶飯の類であるのみ、



雪林硯屏率魯直同賦

雪林硯屏、魯直を率へて同じく賦す

西山無時春。巉巖鎖頑陰。

西山時春無し、巉巖頑陰に鎖す、

分明倚天壁。點綴無風林。

分明に天壁に倚る、點綴風林無し、

物固爲人出。興誰於此深。

物固に人の爲に出づ、興は誰か此に於て深き、

窮奇眞自靈。詩句且娛心。

窮奇眞に自から靈む、詩句且つ心を娛ましむ、

【詩意】西山は春の來ることは無いかと疑ふ、巉巖が一年中頑陰に鎖すを見て判る、分明に高く天壁に倚りて、曾て點綴して一林も無し、萬物總て固に人の爲に出づる、興味は誰か深く此の景色を見て深くするや、自然の窮奇は自然に靈む、是に於てか人は詩句を以て心を娛ましむ、

蘇東坡詩集 卷二十八

古今體詩

和周正孺墜馬傷手

周正孺が馬より墜ち手を傷つくるを和す

平生學道已神完。

平生道を學んで已に神完、

豈復兒童私自憐。

豈復た兒童のごとく私に自ら憐まん、

醉墜何曾傷內守。

醉墜何ぞ曾て内守を傷らんや、

色憂當爲念先傳。

色憂は當に先傳を念ふ爲なるべし、

書空漸覺新詩健。

空に書して漸く覺ゆ新詩の健を、

把蟹行看樂事全。

蟹を把つて行くゆく看ん樂事全きを、

賣却老驄爲酒直。

老驄を賣却して酒の直と爲す、

大呼鄉友作新年。

大に郷友を呼んで新年を作さん、

【字解】 〔一〕神完 神氣完全なり、

〔二〕私自憐 「楚辭九辨」に、惆悵兮而私自憐とあり、

〔三〕色憂 「禮記」に、世子色憂不<sub>レ</sub>滿<sub>レ</sub>容とあり、祭義に樂正子春、堂より下りて其の足を傷き、數月出でず、猶ほ憂色あり、曰く父母全うして之を生む、子全うして之を歸す、孝と謂ふ可し、

今予孝の道を忘る、予是を以て憂色あるなり、是の故に道にして徑せず、

舟にして遊ばず、敢て父母の遺體を以て殆きを行かず、

〔四〕書空 晉



の股浩は放黜せらるると雖も、口に怨言無し、但終日空に書し、咄咄怪事の四字を作るのみ、【五】把蟹「晉書畢卓傳」に、嘗謂人曰、得酒滿數百斛船、四時甘味置兩頭、右手持酒杯、左手持蟹螯、拍浮酒船中、便足了一生矣とあり、

【題義】周正孺、官は考功郎、酔うて馬より墜ち手を傷けたる詩を作るを和するのである、

【詩意】平生道を學んで神氣は已に完全である、豈兒童の如くに私に自ら憐むあらんや、酔うて馬より墜つるも神氣完全を傷めることは無い、唯顔色に出して憂ふことは此の身體を毀傷したかしないかである、空に向つて字を書き其の詩は新健である、蟹を把つて行くゆく樂事の全きを期するは卓公と同じ、幸に身無事なるを祝ふ爲め、老馬を賣却して酒錢と交換し、大に郷友を呼び集めて新年祝賀會を開くべきである、

【餘論】紀評に曰く、色憂句腐、結末粗獷、要するに一時游戲の作、深く論ずるの要は無い、

戲周正孺二絶

周正孺に戲る 二絶

折臂三公未可知、臂を折つて三公未だ知る可からず、

會當千鎰訪權奇、會ま當に千鎰權奇を訪ふべし、

勸君鬻駱猶閒事、君に勸む鬻駱は猶ほ閒事、

腸斷閨中楊柳枝、腸は斷ゆ閨中の楊柳枝、

【字解】〔一〕折臂「晉書羊祜傳」に、有善相慕者言、祐祖墓所有帝王氣、若鬻之則無後、祐遂鬻之、相者曰、猶出折臂三公、祐竟墜馬折臂、位至三公、而無子とあり、〔二〕千鎰 多額の金兩の

義、「太公六韜」に、商王拘周伯昌于羸里、太公以金千鎰、求天下珍物、以免君之罪、予是得大戎氏文馬名雞斯之乘、以獻商王とあり、〔三〕權奇 額延年の白馬賦に、雄志獨儻、精權奇分とあり、人の詭計なるを稱するも、亦馬の精強をも稱するか、〔四〕鬻 白樂天の不能忘情吟序に、樂天既老又病、乃錄家事、會經費、去長物、馬有駱者、駟壯駿驥、乘之亦有年、籍在長物中、將鬻之、閨人牽馬出門、馬驥首反顧一鳴、似知去而旋戀者、予愍然且命迴勒とある、〔五〕楊柳枝 侍妾を謂ふ、

【題義】周正孺が身上に就いて馬を賣るとか、又は妾を放逐するとかの議起るを聞いて、乃ち此の詩を作りしものと思ふ、戲の字を見て其の事項を知ることが出来る、

【詩意】臂を折つて三公と爲る又爲らざるとは未だ知ることが出来ない、會す千兩金を以て權奇の門を訪はざるを得ない、僕は君に勸告する駱を賣却することはそれ程の問題でない、閨中の愛妓を去らしむるは腸斷の極である、

〔一〕

〔二〕

天廡新頌玉鼻驛、天廡新に頌つ玉鼻驛、

故人共敝亦常情、故人共敝も亦常情、

相如雖老猶能賦、相如老ゆと雖も猶ほ能く賦す、

換馬還應繼二生、馬を換へて還た應に二生に繼ぐべし、

【字解】〔一〕天廡 宮内省の廡舎、〔二〕驛 赤黄色の馬を謂ふ、

「毛詩」に有驛有駟とある、〔三〕敝 やぶれる(敗)、つかれる(罷)、我も君も共に馬は罷馬より外はない、査初白の注に曰く、東坡爲翰林一時被賜馬凡二、其一以贈李方叔と、之を破する者は曰ふ、正孺と唱和、元祐二年なり、方叔に馬を贈るは元祐四年なり、此の故人は方叔を謂



ふにあらず、正孺を指すと、正孺にあらずして他の人を指す理由がない、【四】二生 司馬相如と羊祜を指すか未詳、

【詩意】 宮廷内の廐舎に飼養する玉鼻驂を下賜せらる、所が今日まで我馬も故人の馬も同じく罷れて居る、二匹賜はらば一匹分與するが常情である、司馬相如は老いたりとも猶ほ賦を作る、君も亦馬を交換して還た應に詩を賦して二生の巧に繼ぐべきである、

【餘論】 紀曉嵐曰く、折筆却有思致、

題文與可墨竹

文與可の墨竹に題す

故人文與可爲道士王執中作墨竹。且謂執中勿使他人書字。待蘇子瞻來。令題詩其側。與可既沒八年。而軾始還朝。見之乃賦一首。

【訓讀】 故人文與可、道士王執中が爲に墨竹を作る、且執中に謂ふ、他人をして字を書かしむる勿かれ、蘇子瞻の來るを待つて、其の側に題詩せしめよと、與可既に没して八年にして軾始めて朝に還る、之を見て乃ち一首を賦す、

【字解】 【一】 道士 道士ならん、禪師を禪士と稱すると同じ、【二】 王執中 未詳、

斯人定何人。游戲得自在。

斯人定んで何人ぞ、游戲自在を得たり、

詩鳴草聖餘兼入竹三昧。

詩は鳴る草聖の餘、兼ねて竹三昧に入る、

時時出木石荒怪軼象外。

時時木石を出す、荒怪象外に軼す、

舉世知珍之賞會獨予最。

舉世之を珍とするを知る、賞會獨り予最、

知音古難合奄忽不少待。

知音古も合し難し、奄忽少くも待たず、

誰云生死隔相見如龔隗。

誰か云ふ生死隔つと、相見て龔隗の如し、

【字解】 【一】 游戲 游化と同じ、佛陀や菩薩が神通に遊んで、人を教化し、以て自からの娛樂とするを云ふ、佛典の通用語である、

【二】 自在 三昧を謂ふ、意の如くに筆が随ふを謂ふ、三昧は自在を謂ふ、「書苑」に、懷素自言、得草書筆法三昧とあり、「法華經」に、佛入無量義處三昧とあり、三昧は梵語の音寫、譯して正受と云ふ、【三】 軼 超越を謂ふ、象外即ち形の外に超越して氣韻を有するなり、【四】 賞會 「宋謝宏微傳」に、叔父混、風格高峻、少所交納、唯與族子靈運・瞻曜・宏微、並以文義賞會とある、【五】 知音 音律に精しき者を謂ふ、古詩に、不惜歌者劣、但傷知音稀、一轉して知己の義と爲る、韓退之の詩に、知音自古稱難遇とある、【六】 奄忽 古詩に、人生寄一世、奄忽若塵塵とある、【七】 龔隗 「晉書隗炤傳」に、隗、易を善くす、臨終に版に書し、其の妻に授けて曰く、吾亡びて後五年の春、當に詔使ありて、此の亭に來るべし、姓は龔、此人吾に金を負ふ、即ち此版を以て之を責めよ、期日に襄使者あり、亭中に止まる、妻遂に版を齎らし往いて之を責む、使者惘然、所以を知らず、沈吟良久しうして悟る、乃ち命じて著を取りて之を箴し、卦成る、嘆じて曰く妙なる哉隗生、是に於て炤妻に告げて曰く、吾金を負はず、賢夫自から金あるのみ、亡後當に暫く窮すべきを知り、故に金を藏し、以て太平を待つ、吾が易に善なるを知る、故に版に書し、以て意を寄するのみ、金五百斤あり、盛るに青氈を以てし、覆ふに銅料を以てし、埋めて堂屋の東頭に在りと、之を掘るに皆卜の如し、

【題義】 亡友の文與可が道士の爲に畫きて與へたる墨竹の讚詩を作る、文與可が此の墨竹を描き、王



執中しつちゆうに贈りし時謂ときいふ誰人たれひとにも字を書かせるな、獨ひとり蘇子瞻そしせんをして書かせよと、既すでにして生前せいぜんに其その讚さんを書かせることが出來ずして、死し後に坡公はこうが其その通り書いたものである、

【詩意】斯この人即ひとち文與可ぶんよかと云ふ人は如何いかなる人である、丹青たんせいに游戲ゆげすること真まことに自在じざいである、詩も草書さうしょも共に聖域せいよきに入る、其の上竹うへたけに於て特に三昧さんまいを發得はつとくする、時時ときときには木石ぼくせきをも畫えがく、其の筆致ひつちの荒怪くわいは象外しやうがいに超軼てういつする、世の中よなかの人皆ひとみな之を珍賞ちんしやうする、而して真しんに賞會しやうくわいする者は獨ひとり予われである、真しんに知音ちいんと云ふ者は古今ここん共に少すくない、哀あなしい哉かな歲月かみげつは人を待たず、堂堂だうだうと過すぎ去さつて生死しやうじを隔へだつるに至いたる、而かも我われと君きみとは古いにしへの龔きゆうと隗くわいとの如ごとく真しんの知音ちいんである、

【餘論】紀曉嵐きけうらん曰く、微覺きけう三局促さんきよく、而語特沈著にんごとくしんしやくと、荒怪軼くわい象外しやうがいの五字ごじを評して曰く、五字有レ神寫しんしやう盡じん高人筆墨こうにんひつぼくと、要えうするに游戲また又または三昧さんまい又または象外等しやうがいとうの佛語ぶつごを運用うんようして詩語しごと爲なすは坡公はこうの獨擅場どくせんじやうにて、他人たにんの追隨つゐすることを許ゆるさない、

潘推官母氏挽詞

南浦淒涼老逐臣

東坡還往盡幽人

杯杵慣作陶家客

【字解】(一) 老逐臣 坡公自ら云ふ、(二) 還往 東坡より已來往く者このかたはの意味、(三) 杯杵 杯盤と同じ、客を馳走すること、(四)

絃誦嘗叨孟母鄰

尙有升堂他日約

豈知負土一阡新

今年我欲江湖去

暮雨連山宰樹春

陶家客 晉の陶侃は早に孤貧、縣吏と爲るや、鄱陽の孝廉范滂嘗て過ぎらる、侃時に倉卒、以て賓を待する能はず、其の母髮を截つて雙髮を得、以て酒殺に易へ、飲を樂み歡を極む、【五】孟母鄰 孟軻の母、初め其の舍墓林に近し、孟子の嬉戲、墓間の事を爲す、去つて市中に舍す、嬉戲街

買の事を爲す、又去つて學宮の傍に舍す、嬉戲乃ち俎豆を設けて揖讓進退す、孟母曰く、此れ真に以て居る可きなりと、【六】升堂 王註に、後漢書范式傳を引いて曰く、范式字巨卿、少游太學、與汝南張劭爲友、劭字元伯、二人並告歸鄉里、式謂元伯曰、後二年當還、將過拜尊親、見孺子焉、乃共尅期日、後期方至、元伯具以白母、請設饌以候之、母曰二年之別、千里結言、爾何相信之深耶、對曰巨卿信士、必不乖違、至其日、巨卿果到、升堂拜飲、盡歡而別、【七】負土 孝子傳に、宗承字世林、母葬負土作墳、不役童僕、一夕之間、土壤自高五尺、松竹生焉とある、【八】宰樹春 宰樹は宰木と義同じ、公羊傳に宰上之木拱矣とある、宰は冢なり、墓木を謂ふ、盧師道の詩に、夕風吟宰樹とある、劉夢得の詩に、千行宰樹荆州道、暮雨蕭蕭聞子規とある、

【題義】潘推官は潘彥明、其の母の李氏を挽する爲に作る、

【詩意】我は黃州の南浦に放逐せられたる淒涼たる人である、但し我より以還此に至る人は盡く幽人であつて俗人では無い、例へば客に馳走するにも、母氏が賢明であればこそ其の髮を鬻いで以て酒を買ひし陶侃が家母の如き人がある、又禮樂や讀書の爲め子を思ふ孟母の様な人もある、僕も潘家を



訪うて老母の爲め世話に再びなるべしと嘗て約したるに、豈知らんや今は土を負うて一阡の新なるを  
見るに至らんとは、今年は僕も退官して自由の身と爲らんと思つて居る、其の時は暮雨蕭蕭たる中に  
母氏墓前の春を弔ふべきである、

【餘論】 當面殊更に哀詞を敘せず、而して其の中言ふべからざる哀詞を含む、人の母氏を哭す、後生  
宜しく此の篇を以て法と爲すべきである、紀曉嵐七律を以ての故に採らざるは何ぞや、

玉堂栽花周正孺有詩次韻

玉堂に花を栽う、周正孺詩あり次韻す

故山桃李半荒榛

故山の桃李半は荒榛、

粗報君恩便乞身

粗報君恩に報じ便ち身を乞ふ、

竹簟暑風招我老

竹簟の暑風我が老を招き、

玉堂花蕊爲誰春

玉堂の花蕊誰が爲に春なる、

纖纖翠蔓詩催發

纖纖なる翠蔓詩發するを催し、

皎皎霜葩髮鬪新

皎皎たる霜葩髮鬪新を鬪はす、

只有來禽青李帖

只有來禽青李帖有り、

【字解】 〔一〕君恩 公の爲め、  
〔二〕乞身 私の爲め、〔三〕翠蔓 唐の皮日休の詩に、翠蔓飄飄欲挂人とある、〔四〕來禽 果名、「廣志」に、林檎似赤奈子、一名黑禽、亦名來禽、甘熟則來禽也とある、王羲之取つて以て其帖に名づく、〔五〕青李 果名、亦以て帖名とす、「淳和法帖」收むる所、王羲之が書せる四百六十五帖の一とす、

他年留與學書人

他年留與學書の人、

【題義】 玉局の官庭に花を栽る、周正孺が詩を作れるを次韻したのである、

【詩意】 故山に於ては主人不在、従つて荒榛であらう、今身は官に在るも國恩に報じたる後は退役を願うて故山に歸るであらう、竹簟の暑風は早く歸りて老を養へと示すものの如くである、さらばとて玉堂に栽るし花蕊は要するに誰が爲の春である、纖纖たる翠蔓を見れば詩を作れとの催促でもある、皎皎たる霜葩を觀れば白髪と争ふものの如くでもある、自分が去つて後も官堂に留むるものは何である、それは來禽帖と青李帖との二帖、後來玉堂に住して學書する人の爲め、是は留めて置く、

【餘論】 此等の詩は唐詩を讀むが如く、聊かも勃率の態無く、情思景趣兩ながら議すべき所は無い、

杜介送魚

杜介魚を送る

新年已賜黃封酒

新年已に賜ふ黃封酒、

舊友仍分鱸尾魚

舊友仍は分つ鱸尾魚、

陋巷關門負朝日

陋巷關門朝日を負ひ、

小園除雪得春蔬

小園除雪して春蔬を得、

【字解】 〔一〕黃封酒 前已に注す、〔二〕鱸尾魚 前已に注す、〔三〕銀絲鱸 杜甫の詩に、鮮鯽銀絲鱸、香芹碧湖羹とあり、〔四〕謹 權、驢、同義の字にて叫謹と成語、稚子が喜悅して、かまびすしくよろ



病妻起斫銀絲繪。病妻起つて斫る銀絲繪、

稚子謹尋尺素書。稚子謹び尋ぬ尺素書、

醉眼朦朧覓歸路。醉眼朦朧歸路を覓む、

松江煙雨晚疎疎。松江の煙雨晩に疎疎たり、

こぶのである、

【詩意】新年に際し已に黃封酒の恩賜がある、それに又舊友から鱸尾魚の分與を蒙る、陋巷の關門も

暖かき朝日を負うて、小園の中は除雪して春蔬を發見する、病妻は新年なれば起つて銀絲繪を料理する、稚子は母の料理したる魚の中から尺素書を探し尋ねる、醉眼は朦朧として己が歸路を覓むれば、松江の煙雨は晩に疎疎として落つ、

【餘論】釋迦に向つて法を説き、孔子に向つて道を説く、狂人でなければ、稚子の態、笑ふべきであるが、此の詩、前六句は自家に於ける情致である、而して第七句に至り、覓歸路とある、他人の家を訪問して、馳走されて歸宅するならば明白であるが、自分の家にては、詩脈が貫かざるの憾がある、但し詩體は極めて杜甫に類してある、

送杜介歸揚州

杜介が揚州に歸るを送る

再入都門萬事空。

再び都門に入つて萬事空し、

閒看清洛漾東風。

閒に看る清洛東風に漾ふを、

當年帷幄幾人在。

當年帷幄幾人か在る、

回首觚稜一夢中。

首を回らせば觚稜一夢の中、

采藥會須逢薊子。

采藥會す須らく薊子に逢ふべし、

問禪何處識龐翁。

問禪何の處にか龐翁を識らん、

歸來鄰里應迎笑。

歸來鄰里應に迎笑すべし、

新長淮南舊桂叢。

新に長ず淮南の舊桂叢、

【字解】〔一〕再入。坡公翰林學士と爲つて都門に入る、〔二〕帷幄。漢書高祖紀に、運籌帷幄之中、決勝千里之外とある、〔三〕觚稜。堂殿上の最高轉角の處を謂ふ、上、屋背より下、前後の簷際に訖るまで

次を以て斜に削り、正三角形を成すものは是である、〔四〕薊子。後漢薊子訓傳に、有三百歲翁、自說兒童時、見三子訓賣藥於會稽之市、顔色不異於今、とある、〔五〕龐翁。碧巖錄の第四十二則に、龐居士は

馬祖と石頭の兩處に參して頌を作る、錄に曰く、居士辭藥山、山命十人禪客、相送至門首、居士指空中雪云、好雪片片、不落別處、時有全禪客云、落在什麼處、士打一掌、全云、居士也不得草草云云、龐蘊は衡州衡陽縣の人、字は道玄、世世儒を業とす、龐居士は少うして俗を脱し、禪法を志求す、貞觀中に石頭に謁して乃ち禪を問ふ、〔六〕淮南。招隱士は淮南の小山作る所、其の辭に、桂樹叢生兮山之幽、偃蹇連卷兮枝相繚とある、

【題義】杜介の傳は詳かならず、此の人が故郷の揚州に歸るを送るのである、

【詩意】再度都門に入つてからは、從前のもの皆已に空と爲つてゐる、唯閒に看る所は洛水が清く東風の爲め漾ふ景色のみである、當年帷幄に同じく在りし人は今は幾人を存するであらう、首を回らし



て觚稜の方を看る十年は一夢の中であつた、君も歸つたら會う葦子訓の如き隠士に逢ふであらう、又禪を問うて俗を脱したる龐翁の如き高人がドコかにあらう、乃ち鄰里も應に迎笑するであらう、殊に新に生長する淮南の舊桂叢も香氣が好からう、

【餘論】前半は自身が事を敘し、後半は杜介の事を敘す、律體として作法嚴密である、

和黃魯直燒香二首 黃魯直の燒香に和す 二首

四句燒香偈子 四句燒香偈子

隨香徧滿東南 隨香東南に徧滿す、

不是聞思所及 是れ聞思の及ぶ所にあらず、

且令鼻觀先參 且く鼻觀を先參せしむ、

【字解】 四句偈 普通には

諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂を指すが、今は金剛經の若復有レ人、於此經中、受持乃至四句偈等、爲他人説、其福勝彼の句を指すのである、偈は詩と同じく偶數

を以て定む、一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀(四句)、無我相、無人相、無壽者相、無衆生相(四句)、三句や五句の奇數は例外である、【二】 隨香 微塵の色も、微塵の香も、十方に徧滿すると云ふが佛説である、【三】 聞思 聞と思と修とな佛家にて之を三慧と云ふ、「楞嚴經」に、觀音由三聞思修、入三摩地とある、【四】 鼻觀 「楞嚴經」に、二十五圓通と云ふ説がある、其の第十四に謂はく、孫陀羅難陀、從佛出家、雖具三戒律、心多散動、世尊教其觀鼻端、遂觀鼻中之氣、出入如煙、身心内明、圓洞虛淨、煙相漸消、鼻息成白、とある、

【題義】 黃山谷が端坐して香を燒きし詩に和して作る、

【詩意】 四句の偈を誦して香を燒いて坐する、其の妙香の氣や東南に徧滿して功德が多い、聞慧や思慧の及ぶ所でない、人の人品を清うせんと欲するには、鼻觀を以て第一と爲すべきである、

【二】

【二】

萬卷明窗小字

萬卷明窗の小字、

眼花只有爛斑

眼花只爛斑あり、

一炷煙消火冷

一炷煙消して火冷か、

半生身老心閒

半生身老いて心閒なり、

【字解】 眼花 李白の詩、

眼花耳熱後、意氣素寃生とある、杜甫の詩、眼花落井水底眠とある、

爛斑 文采燦然の貌を謂ふ、李と杜との眼花は、醉人の眼に就いて言ふ、此の句は酒に關係無く、只文

采の光曜を言ふか、

【詩意】 萬卷の書を把つて明窓に讀む如何にも小字である、眼花が爛斑としてあるが爲め小字でも讀破する、今は靜坐して香を燒き煙消して火は冷かとなる、乃ち前半生は讀書の爲め勞勞と爲したのに、身老いて後の心の閒は眞に悟の境界である、

【餘論】 前首は四句共に燒香今日の事を敘し、後首は萬卷の十二字、徒に讀書するも世俗と同じ、一炷の十二字は讀書以外に香を燒いて眞の境界に入るを敘す、人に和する詩は必ず其の人の詩體に擬し



て作る、和の本意は此に在る、此の二首即ち山谷の宗旨を遺憾なく發揮するものである、

再和二首

再和二首

置酒未逢休沐。

酒を置きて未だ休沐に逢はず、

便同越北燕南。

便ち越北燕南に同じ、

且復歌呼相和。

且く復た歌呼し相和す、

隔牆知是曹參。

牆を隔てて知る是れ曹參なるを、

【字解】 〔一〕 越北燕南 「莊子

天下篇」に、我知天下之中央、燕之北、越之南是也とある、燕は天下の北、越は天下の南、有窮の上より然るも、無窮の上よりは、北の更に北がある、南の更に南がある、〔二〕

【詩意】 公然と未だ休沐の日を賜はつて酒を置くことは出来ぬ、便ち身は越北燕南定まりあることは無い、是の故に且く此に歌呼し相和して、長官も下官も共に同じく酔はんかな、

〔一〕

丹青已是前世。

丹青已に是れ前世、

〔二〕

竹石時窺一斑。

竹石時に一斑を窺ふ、

【字解】 〔一〕 丹青 唐の王維の

詩に、前身定畫師とある、〔二〕 竹石 陶淵明、〔三〕 高閑 韓退之の

五字當還靖節。

五字當に靖節に還るべし、

數行誰似高閑。

數行誰か高閑に似る、

文、送高閑上人二序に、往時張旭善艸書、不<sub>レ</sub>治<sub>二</sub>他技、喜怒窮窘、憂悲憊懼、怨恨思慕、醜醉無聊、不平有

【詩意】 詩を以て鳴り而かも丹青も前世の宿習であらう、是の故に其の描く所の竹石にても其の技の一斑を窺ふことが出来る、而して五言の詩は特に晉の淵明にも似て居る、數行書く艸書も唐の高閑に似て居る、

【餘論】 韻字を運用せん爲なるも、初めは曹參次は靖節次は高閑、妥當ならざるを覺ゆ、殊に高閑は韓文有るが爲め名を留むるのみにて、韓文が微りせば此の人の名は傳はらざるのである、然るに靖節を承けるに此の人を以てするは、不倫と言ふの外はない、坡公が靈にして如何に強辯するも余は其の不倫を叫ぶものである、

送楊孟容

楊孟容を送る

我家峨眉陰與子同一邦。

我家は峨眉の陰、子と同一邦、

相望六十里共飲玻璃江。

相望む六十里、共に玻璃江を飲む、



江山不違人。徧滿千家窗。  
但苦窗中人。寸心不自降。  
子歸治小國。洪鐘噓微撞。  
我留侍玉座。弱步敲豐扛。  
後生多高才。名與黃童雙。  
不肯入州府。故人餘老龐。  
殷勤與問訊。愛惜雙眉龐。  
何以待我歸。寒醅發春缸。

江山人に違はず、徧満す千家の窗、  
但苦む窗中の人、寸心自ら降らず、  
子歸りて小國を治め、洪鐘微撞に噓ぶ、  
我留まりて玉座に侍し、弱歩豊扛敲つ、  
後生高才多く、名黄童と雙ぶ、  
肯て州府に入らず、故人老龐を餘す、  
殷勤與に問訊す、愛惜す雙眉の龐、  
何を以て我が歸るを待つ、寒醅春缸を發す、

【字解】

【一】峨眉陰 峨眉山は嘉州の峨眉縣に在り、而して州則ち其の陰に面す、故に州は此を以て名を得、山北を陰と曰ふ、  
【二】玻璃江 范石湖の「吳船錄」に、眉州城外、即玻璃江也、冬時水色如此とある、  
【三】寸心不自降 心降は「詩」に、亦既觀止、我心則降とある、「三略」に、賢人之政、降人以體、聖人之政、降人以心、體降可<sub>レ</sub>以圖<sub>レ</sub>始、心降可<sub>レ</sub>以保<sub>レ</sub>終、杜甫の詩に、盡憐君醉倒、更覺片心降とある、心降は所謂安心すること、不自降は即ち反對にて不安心の態度を謂ふ、  
【四】噓微撞 洪鐘を力の無き者が撞つときは、音を發せざるを謂ふ、「魏志杜襲傳」に、萬石之鐘、不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>菘撞<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>音とある、菘は草莖である、噓は咽に同じ、  
【五】玉座 公が神女廟の詩に、玉座幽且閑とある、玉局に官を守ることを曰ふ、  
【六】敲豐扛 敲は敲頌、豐は豐偉、扛は扛舉、弱脚の人、重大なる責任は無理なりとの意である、  
【七】黃童 「後漢書黃香傳」に、黃博學經典能<sub>レ</sub>文章、京師號曰<sub>レ</sub>天下無雙、江夏黃童、山谷も黃姓、乃ち以て今山谷を稱したのである、  
【八】老龐 前首に記したる龐居士、  
【九】雙眉龐 一本霜眉龐に作る、龐も龐も同義であるが、龐の字が可い、

【題義】

楊孟容は眉山の人、治安軍に知たるも、新法と議合せずして、元祐中退官す、哲宗、清節の二字を書して賜ふ、其の人品知るべきである、

【詩意】

我が家は峨眉山の陰に在る、子と同一の邦である、其の地は六十里を隔たるも、飲む所の水は玻璃の同一江である、其の國の江山は人に背かず、其の翠色を以て千家の窗に入る、但苦む所は窗中に在るの人、各の生活に安心して居る者は無い、子の歸りて小國を治むるは良に可いが、惜むらくは子は洪鐘の若き人で小國なぞ治むる人ではない、我は留まりて玉座に侍する身なれども、君の洪鐘と反對に極めて弱歩の人間、重大なる責任を負ふ者でない、思ふに後生は高才が多い、君の名は山谷と雙んで高い、是の故に歸國しても肯て州府の中に入つてはならぬ、遊ぶべき故人には老龐がある、其の老龐を殷勤に問訊し玉へ、僕は愛惜する子と山谷との雙眉の龐を、何を以てか子に我が歸るを待てと言ふ、寒醅が正に春缸を發して飲むに宜しい、三人して飲むに宜しい、

【餘論】

紀曉嵐評して曰く、以<sub>レ</sub>窄韻<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>長、別無<sub>レ</sub>佳處<sub>レ</sub>と名評と謂ふ可し、山谷の詩、我詩如<sub>レ</sub>曹鄴、淺陋不<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>邦、公如<sub>レ</sub>大國楚、吞<sub>レ</sub>五湖三江、赤壁風月笛、玉堂雲霧窗、句法提<sub>レ</sub>一律、墜城受<sub>レ</sub>我降、枯松倒<sub>レ</sub>澗壑、波濤所<sub>レ</sub>春撞、萬牛挽不<sub>レ</sub>前、公乃獨力扛、諸人方嗤點、渠非<sub>レ</sub>聶張雙、但懷相識察、牀下拜<sub>レ</sub>老龐、小兒未<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>知、客或許<sub>レ</sub>敦龐、誠堪<sub>レ</sub>塔<sub>レ</sub>阿巽、買<sub>レ</sub>紅纏<sub>レ</sub>酒缸、



見子由與孔常父唱和詩。輒次其韻。余昔在館中同舍。出入輒相聚飲酒賦詩。近歲不復講。故終篇及之。庶幾諸公稍復其舊。亦太平盛事也。

子由が孔常父と唱和の詩を見る、輒ち其の韻に次す、余昔館中に在つて、舍を同じうす、出入輒ち相聚まり酒を飲み詩を賦す、近歲復た講せず、故に終篇之に及ぶ、庶幾はくは諸公其の舊に稍復せよ、亦太平の盛事なり、

君先魯東家門戶照千古。

君が先は魯の東家、門戶千古を照らす、

文章固應爾須鬣餘似處。

文章固より應に爾るべし、須鬣似處を餘す、

雖非蒙俱狀尙肖歷國苦。

蒙俱の狀にあらずと雖も、尙ほ歷國の苦に肖たり、

誦書口瀾翻布穀雜杜宇。

書を誦して口瀾翻り、布穀杜宇に雜はる、

十年困奔走櫛沐飽風雨。

十年奔走に困み、櫛沐風雨に飽く、

吾道其非邪野處豈兕虎。

吾道其れ非邪、野處豈兕虎ならん、

灞陵閑老將柏直口尙乳。

灞陵老將閑なり、柏直口尙ほ乳、

自君兄弟還鼎立知有補。

君が兄弟還りてより、鼎立補ひ有るを知る、

蓬山耆舊散故事誰刪去。

蓬山耆舊散じ、故事誰か刪去する、

來迎馮翊傳出餞會稽組。

來迎馮翊傳ふ、出でて餞す會稽の組、

吾猶及前輩詩酒盛册府。

吾猶ほ前輩に及ぶ、詩酒册府盛ん、

願君倡此風揚解斯杜舉。

願はくは君此の風を倡へよ、解を揚げ斯に杜舉、

【字解】 一、孔常父 兄を文仲と曰ひ、弟の武仲字を常父と曰ふ、起居舍人、中書舍人、正字、校書郎等の官に歴任せり、

魯東家 「孔子家語」に、魯人不識孔子聖人、乃曰彼東家邱者吾知之矣とある、

二、門戶 孔子が門戶、魯縣闕里は孔子が居る所、

三、須鬣 須は鬣なり、

四、蒙俱 荀子非相篇に、仲尼之狀面如蒙俱とある、注に俱方相とある、四目の鬼の假面が方相にて、

二目の假面を俱と曰ふ、

五、歷國 莊子天運篇に、孔子謂老聃曰、丘治詩書禮樂易春秋六經、自以爲久矣、孰知其故矣、

以奸者、七十二君、論先王之道、而明周召之迹、一君無所不鈞用、甚矣夫、人之難說也とある、

六、口瀾 自在に辯舌するを謂ふ、

漢書訓通傳に、説信曰酈生一士伏軾、掉三寸舌、下齊七十餘城とある、

七、布穀 鳴鳩の異名、

八、杜宇 杜鵑なり、

九、野牛 一角にて青色の動物、

史記孔子世家に、楚使三人聘孔子、陳蔡大夫謀曰、孔子用於楚、則陳蔡用事大夫危矣、於是乃相與發徒役、圍孔子於野、不得行、孔子曰、詩云、匪兕匪虎、率彼曠野、

吾道非耶、吾何爲於此と、

灞陵 漢の李廣、屏きて藍田南山中に居り射獵す、嘗て夜、一騎を從へて出で、人に從つて田間に飲し、還りて灞陵亭に至る、灞陵の尉、酔うて廣を呵止す、廣が騎曰く、故の李將軍なり、尉曰く、今の將軍すら夜行するを得ず、何ぞ乃ち故なるをや、廣を止めて、亭下に宿せしむ、幾何も無く、右北平の太守と爲る、灞陵の尉を軍中に伴ひ行き之を斬る、

漢書に、魏王豹反す、漢王問ふ魏將は誰なる、對へて曰く柏直と、王曰く是口尙ほ乳臭、韓信に當る能はずと、

三、鼎立 孔經父と孔常父と孔毅父の三人、

四、馮翊 前漢書蕭望之傳に、以爲左馮翊、望之從少府出爲左遷、恐有不合意とある、

五、會稽組 前漢書朱買臣傳に、拜爲會稽太守、衣故衣、懷其印綬、步歸郡邸、入室中、守邸與共食、食且飽、少見其綬、守邸怪



之、前引其綬、視其印、會稽太守章也、守邸驚列中庭、拜謁、有頃長安廐吏、乘駟馬來迎、買臣遂乘傳去と、〔二六〕册府藏書册之府、圖書寮、圖書館皆是れ、〔二七〕揚輝「禮記檀弓」に、知悼子卒未葬、平公飲酒、師曠、李調、侍鼓鐘、杜蕢入寢、酌飲、曠又飲、調又酌、堂上北面坐飲之、平公曰、寡人亦有過、酌而飲寡人、杜蕢、洗而揚輝、公謂侍臣曰、如我死、則必毋廢斯爵也、至於今、既畢獻、斯揚輝、謂之杜舉とある、

【題義】子由と孔常父とが唱和せる詩を見て、其の韻に次し、坡公自心の思ふ所を記するのである、昔は館中に於ても同僚が勤務の餘暇、會飲して互に習襟を披きたることがある、其の事が今絶えて居る様であるが、昔日に回復するが、是れ太平を喜ぶ一助であると云ふ、

【詩意】孔常父の家は孔子の系統なれば、其の家門の光彩は千古までも映照する、常父が作る文章は固より語の如く簡勁である、鬚鬣も先聖に似たる處あるかと思ふ、面貌は俱を蒙る様な状ではないが南船北馬辛勞せられたることは極く肖てゐると思ふ、書を誦すること口に瀾を翻す如く、又布穀と杜宇とが鳴聲頻なると同じく、余は其の息むこと無きを知る、而かも十年は所謂衣食の奔走に困み、風に櫛り雨に沐する辛苦を嘗めた、吾が道は其れ非であるか、假令野に處し山に奔るも我は兕虎では無い、李廣の如き名将も瀾陵に苦み、相直は奇才あるも尚ほ乳臭である、所が君が兄弟が歸還してより、鼎立するの才智を以て各の補ふ所がある、昔遊びし蓬山には耆舊四散して、故き事は皆刪り去る、幸にして來迎せる馮翊の傳がある、出でて餞する人にも會稽の組の清廉がある、吾輩も吾輩の前輩も共に册府に於て詩酒を盛んに太平を頌すべきや、願はくは君不遇は世の常、文酒を以て此の間

に樂むことを求めよ、古も觴を揚げて斯に之を杜舉せんと謂ふであらう、

【餘論】孔子が道の爲め困厄せられしことより、李廣に及び朱買臣に及び、言はんと欲したる所、言ひ盡したるの感がある、但し余が若し紀曉嵐ならば、結局の五字は不成語と評したのである、

趙令晏崔白大圖幅徑三丈

趙令晏の崔白が大圖幅徑三丈

扶桑大繭如瓊盎

扶桑の大繭瓊盎の如し、

【字解】〔一〕瓊盎 宋の李昉等の編する「太平廣記」に、閩客者、

天女織綃雲漢上

天女綃を織る雲漢の上、

濟陰人、嘗種五色香艸、積數十年、

往來不遺鳳銜梭

往來鳳をして梭を銜ま遣めずんば、

客收而薦之以布、生華蠶焉、蠶

誰能鼓臂投三丈

誰か能く臂を鼓して三丈を投するや、

出時有二女、自來助客養蠶、亦以

人間刀尺不敢裁

人間の刀尺敢て裁せず、

如蠶、每二繭練、六七日乃盡、繭大

丹青付與濠梁雀

丹青付與濠梁の雀、

訖俱去とある、〔二〕天女 「史記

風蒲半折寒雁起

風蒲半折寒雁起り、

天官書」に、織女天女孫也とある、

竹間的矚橫江梅

竹間的矚江梅横ふ、

左太冲が「吳都賦」に、泉室潛織而卷

畫堂粉壁翻雲幕

畫堂粉壁雲幕翻り、

綃とある、〔三〕鳳銜梭 唐の戴

叔倫の詩に、織女辭鳳梭、停織鶴



十里江天無處著。十里江天處著無。好臥元龍百尺樓。好臥元龍百尺樓。笑看江水拍天流。笑看江水拍天流。

無音とある、【四】濠梁、宣和畫譜に、崔白字は子西、濠梁の人、仁宗詔して畫旨に稱ふ、畫院藝學に補す、花竹翎毛、體製精贍、尤も寫生に長じ工を極む、鶯、佛像、道像、鬼

神・山林・人物・飛走の類、絶妙ならざるは無し、宋の畫院教藝の者、必ず黃筌父子を以て式と爲す、白と吳元瑜出づるに及んで、其の格遂に變ず、【五】雲霧、漢の武帝作る所の宮殿の名、杜甫の詩に、雲霧椒房親とあり、【六】元龍、「三國志」に、許汜與劉備、在劉表座、共論天下人、汜曰陳元龍、湖海之士、豪氣不除、昔遭亂過下邳、元龍無客主之意、自上大牀臥、使客臥下牀、備曰、今天下大亂、所望君、憂國忘家、有救世之意、而君求田問舍、是元龍所諱也、何緣當與君語、如小人、欲臥百尺樓上、臥君於地、何但上下牀之間邪とある、【七】水拍天、韓退之の詩、海氣昏昏水拍天とある、劉禹錫の詩に、蜀江春水拍天流とある、

【題義】趙令晏が家に蓄ふる崔白の大幅を觀て其の畫を讚して作る、

【詩意】扶桑の大藪は宛かも甕盎の如くである、思ふに天女が雲漢の上で織績したるものであらう、天女の使令と爲つて鳳凰が往來して梭を銜むの役を務むるのでなければ、誰か能く臂を鼓して三丈も有る大なるものを投ずることが出来るか、人間の刀尺を以て裁縫したものとは思へず、而して此の壯大美麗なる絹上に筆を染めたる人は誰である、それは濠梁の崔白で、其の描ける圖は何であるか、風蒲が半ば折れたる處より寒雁が起たんと欲し、竹間の的矚たる處に江梅が横出せる畫である、是の圖を挂ける處は如何なる處である、畫堂粉壁の上に於て雲霧翻る、十里の江天は物の一微塵も著處は無い、展觀して好し臥せん元龍の百尺樓に、而して笑うて看る江水の天を拍つて流るる雄壯なるを、

【餘論】紀曉嵐は扶桑以下四句二十八字を批圈して以て奇偉と評す、查初白は誰能の十四字を評して近俚と評す、奇偉の評は的確なりと思ふ、近俚の評は當らずと思ふ、三換韻にて作る、

次韻張昌言給事省宿

張昌言給事が省に宿するを次韻す

馮顛久已敲殘雪。馮顛久しく已に殘雪に敲ち、戎眼何曾眩落暉。戎眼何ぞ曾て落暉に眩せん、朔野按行猶爵躍。朔野按行して猶ほ爵躍、東臺瞑坐覺鳥飛。東臺瞑坐して鳥飛を覺ゆ、漫誇年少容吾在。漫に誇る年少吾を容るる在るを、若鬪尊前舉世稀。若し尊前に鬪はば舉世稀なり、待向嵩陽求水竹。嵩陽に向つて水竹を求むるを待つて、一犁煙雨伴公歸。一犁の煙雨公に伴うて歸らん、

【字解】(一)馮顛、漢の馮唐を謂ふ、顛は頭を謂ふ、郎中と爲つてより一官進まず、頭髮雪の如くなるに及ぶ、(二)戎眼、晋の王戎、裴楷は戎を目して曰く、戎眼爛爛、如巖下電と、目を視るも眼眩せず、(三)朔野、朔北塞野を謂ふ、(四)東臺、唐龍朔二年に給事中を改めて東臺舍人と爲す、(五)鳥飛、坡公の自注に、道家有下鳥飛入兔宮之說とある、(六)漫誇、樂天の句に、猶有誇長少年一處、笑呼張丈與殷兄とある、

【七】尊前、唐の牛僧孺が席上贈劉夢得詩に、休論世上昇沈事、且鬪尊前見在身とある、

【題義】張昌言名は問が給事の官にて省中に宿泊せる詩に次韻して作る、昌言は良吏として民に信



敬せらるる人、

【詩意】漢の馮唐は官吏と爲りて、一官久しく移らず頭上に残雪を敲する年と爲る、又晉の王戎は其の人相眼光が爛爛として、落暉に對して聊かも眩しない、君は曾て朔北に使節と爲つて行き而かも意氣は雀躍したのである、又時には東臺即ち門下省に在つて天仙の道をも慕ふ、自ら誇りて言ふ年少も吾が元氣を容れて同遊すると、酒を飲んで娛樂するときは決して人後に落ちた事は無い、君が嵩陽に向つて歸る日を待ち、同じく一犁の煙雨に水竹を看んと思ふのである、

【餘論】別に議すべき所の無き詩なるが、第二句、眩落暉とあるが、普通人でも落暉には眩するこ  
とが無い、況んや眼光の爛爛たる者に於てをや、日暉と改むれば可と思ふ、傳にも視日不眩とある  
も、落暉とは無い、殘の字に對を取る爲であらうが、戎眼の字が死んでしまふ、

次韻三舍人省上【自注】三月二十九日  
作。明日駕幸景靈宮。

三舍人の省上に次韻す 【自注】三月二十九日作る、  
明日駕、景靈宮に幸す、

紛紛榮瘁何能久。  
雲雨從來翻覆手。  
恍如一夢墮枕中。

【字解】〔一〕雲雨 杜甫の詩に、  
翻手作雲覆手雨、紛紛輕薄何須  
レ數とある、恍は恍惚、ウツトリする  
貌、〔二〕三賢 曾子開と劉貢父と

却見三賢起江右。

却つて三賢の江右に起るを見る、

嗟君妙質皆瑚璉。

嗟す君が妙質皆瑚璉、

顧我虛名俱箕斗。

顧みるに我が虚名俱に箕斗、

明朝冠蓋蔚相望。

明朝冠蓋蔚として相望み、

共扈翠輦朝宣光。

共に翠輦に扈して宣光に朝す、

武皇已老白雲鄉。

武皇は已に老す白雲の郷、

正與羣帝驂龍翔。

正に羣帝と驂龍翔り、

獨留杞梓扶明堂。

獨り杞梓を留めて明堂を扶く、

不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>效<sub>二</sub>武皇帝<sub>一</sub>、求<sub>二</sub>白雲鄉<sub>一</sub>也とある、〔六〕驂龍翔 杜甫の詩に、嬌如<sub>二</sub>羣帝驂龍翔<sub>一</sub>とある、〔九〕杞梓 孔鮒が撰と稱する「孔叢  
子」に、聖人官<sub>レ</sub>人、猶<sub>二</sub>大匠用<sub>レ</sub>木、取<sub>二</sub>其長<sub>一</sub>、棄<sub>二</sub>其短<sub>一</sub>、故杞梓連抱、而有<sub>二</sub>數尺之朽<sub>一</sub>、良工不<sub>レ</sub>棄とある、杞は柳に似、梓は楸に似た喬  
木である、

【題義】曾劉孔の三舍人が省上にて作れる詩を次韻したのである、

【詩意】世上に紛紛として多き榮や瘁は久しきものは無い、或は雲と爲り、或は雨と爲り、一寸手を  
翻覆する間に變る、宛かも恍惚として邯鄲一夢中に過ぎたのと同じである、卻いて見るに三賢は皆江

孔經父、〔三〕瑚璉 殷の六瑚、夏  
の四璉、宗廟に黍稷を盛る器、「論語  
公治長」に、子路問曰、賜也如何、子曰  
女器也、曰何器也、曰瑚璉也とある、

〔四〕虛名 古詩に、南箕北有<sub>レ</sub>斗、牽  
牛不<sub>レ</sub>負<sub>レ</sub>輓、良無<sub>二</sub>磐石固<sub>一</sub>、虛名復何  
益とある、〔五〕冠蓋 前に注せ  
り、〔六〕宣光 王明清の「揮麈錄」  
に、英宗御容殿、舊名英德、元豐中、  
改曰<sub>二</sub>治隆<sub>一</sub>、元祐初、即<sub>二</sub>治隆之後<sub>一</sub>、

建<sub>二</sub>宣光殿<sub>一</sub>、以奉<sub>二</sub>神宗<sub>一</sub>とある、〔七〕  
武皇 「飛燕外傳」に、飛燕進<sub>二</sub>合德<sub>一</sub>、  
成帝謂<sub>二</sub>爲<sub>二</sub>溫柔鄉<sub>一</sub>、曰吾老<sub>二</sub>是鄉<sub>一</sub>矣、



右より身を起し、其の藝術に於ける妙質は皆珊瑚である、而して我自身を顧みれば名と實と副はざる箕斗の如きである、思ふに明朝は參内するに冠蓋が蔚として盛んなる望であらう、共に羣輩に扈從して宣光殿に朝謁する、其の宣光殿に謁する天子は已に白雲の郷に老いて久しい、正に羣帝と龍馬を驂にして翔つて居らるるであらう、人間には三賢の如き杞梓を留めて明堂を扶翼せしめらる、

【餘論】此の篇は兩度換韻して作る、初めは世上一般を敍し、次は三賢を敍し、而して我に及び、結末は天子の事を敍し、作旨明白である、

送錢承制赴廣西路分都監

錢承制が廣西路分都監に赴くを送る

當年我作表忠碑。

當年我表忠碑を作る、

【字解】「表忠碑」表忠觀は吳越王錢氏の墳廟、杭州臨安に在る、熙寧十年、趙鼎が奏して以て立つる所、公が碑文を作る、施注に、東坡作「表忠觀碑」、有「三持以視王荆公、讀之沈吟曰、此何語耶、時客有在旁者、遽指摘而詆訾之、荆公不答、讀之再三、又攜之而起、行且讀、忽歎曰、此三王世家也、可謂奇文、

坐覺江山氣未衰。

坐に覺ゆ江山氣未だ衰へざるを、

舞鳳尙從天目下。

舞鳳は尙ほ天目より下り、

收駒時渥洼姿。

收駒は時に渥洼の姿有り、

踞牀到處堪吹笛。

牀に踞して到處に堪へたり、

橫槩何人解賦詩。

槩を横へて何人か詩を賦するを解する、

知是丹霞燒佛手。

知る是れ丹霞燒佛の手、

先聲應已懾羣夷。

先聲應に已に羣夷を懾れしむべし、

【自注】廣西僧寺。頃有佛勳之異。錢君碎而投之江中。

客大慚、或云客乃其塔祭下也、

兩山空缺橫爲案、數百年中出五王、

【五】吹笛。「晉書桓伊傳」に、伊有蔡邕柯亭管、常自吹之、王徽之、赴召京師、泊舟青溪側、素不相識、伊於岸上過、徽之令入謂曰、聞君善吹笛、試爲我一奏、伊時已顯貴、素聞徽之名、便下車踞胡牀爲作三調、弄畢便上車去、客主不交一言、杜甫傳「建安之後、曹氏父子、鞍馬間爲文、往往橫槩賦詩、故其狀抑揚冤哀、悲離之作、尤極於古」とある、

【六】丹霞。丹霞名は天然、唐の元和中、洛京に至りて、伏牛和尚と友と爲る、後慧林寺に於て、天大に寒きに遇ふ、木佛を取つて之を焚く、或之を譏る、師曰く吾燒いて舍利を取る、人曰く木頭何か有る、師曰く爾が若き者、何ぞ我を責めんやと、元和中、南陽丹霞山に挂錫す、長慶四年入寂す、年八十六、

【七】先聲。「漢書韓信傳」に、先聲而後實とある、

【題義】錢氏が承制の官を帶し、而して廣西路の分都監と爲つて赴任するを送る詩である、嘉祐五年各路に兵馬都監を置いたのである、

【詩意】當年に於て我は君が祖先の爲め表忠觀碑を作つた、坐に覺ゆ江山の秀氣が依然として盛んなるを見る、瑞を報ずる鳳凰は天目山より降下する、祥を表する駒は收め取つて知る是れ渥洼の靈種である、且つ君は吹笛に巧なれば、到處に牀に踞して吹くであらう、槩を横へて詩を賦す是れ豪傑の爲す所である、君の技能は當年丹霞が燒佛したのと同じ、君が名聲を聞いただけに已に羣夷を懾れ



しむるに足る、

【餘論】紀曉嵐は此の篇を評して曰く、亦是應酬之作、而有二點綴、有二開合、便覺三情致不同、余案するに一句より六句に到る間は一氣呵成なるも、第六句に至りて禪偈に墮したるの感がある、蓋し此の時廣西の佛寺紛紜の事ありて、錢氏佛像を碎きて江中に投じたることを表はさんと欲したからであらうが、然らば別の文字を以て出すを可と思ふのである、余先年甲州の慧林寺に遊び、一絶を得、欲レ見奇珍與二怪珍、私希院主幸無レ瞋、丹霞順世經三千載、我是會非下燒レ佛人、

次韻曾子開從駕二首

曾子開が從駕に次韻す

二首

槐街綠暗雨初勻。

槐街綠暗くして雨初めて勻し、

【字解】〔一〕槐街 韓退之の詩に、綠槐十二街とある、〔二〕滿後

瑞霧香風滿後塵。

瑞霧香風後塵滿つ、

塵 杜甫の詩に、青雲滿後塵とある、

清廟幸同觀濟濟。

清廟幸に同じく濟濟を觀、

〔三〕濟濟 美くしく且つ盛なる貌、

豐年喜復接陳陳。

豐年喜ぶ復た陳陳に接するを、

〔毛詩大雅〕に、濟濟多士、文王以寧とある、〔四〕陳陳 「前漢書」に、太倉之粟、陳陳相因とある、〔五〕鞏

雍容已饜天庖賜。

雍容已に饜く天庖の賜に、

路 「隋書音樂志」に、鞏路千門、王城九軌とある、天子幸する路、〔六〕

俯伏初嘗貢茗新。

俯伏初めて嘗む貢茗の新なるを、

路 鞏路千門、王城九軌とある、天子幸する路、〔六〕

鞏路歸來聞好語。

鞏路歸來好語を聞く、

●鞏路 哲宗を指す、〔七〕高辛 神宗を指す、

共驚堯類類高辛。

共に驚く堯類高辛に類するに、

【詩意】馳道の兩街路樹である槐は綠色が雨の爲め一樣に濕うて勻しく、瑞霧と香風は後塵に布滿する、天子が清廟に幸するとき從ふ者は濟濟である、又豐年が連續する爲に倉には粟が陳陳と積んである、雍容として已に天庖即ち宮廷の料理を賜はるに饜くのみではない、俯伏して初めて貢茗の新味を嘗むることもある、鞏路を歸來して君は好語を聞かされた、君も我も共に驚いたのは先帝と今帝との風彩が餘りに肖て居られることだ、

〔一〕

〔二〕

入仗魂驚媿草萊。

入仗魂驚きて草萊を媿づ、

【字解】〔一〕入仗 杜甫の詩に、侍臣諳入仗とある、百官が參内するを入仗と謂ふ、〔二〕草萊 「史記越世家」に、文身斷髮、披草萊而邑居とある、荒れたる地を謂ふ、

一聲清蹕九門開。

一聲の清蹕九門開く、

〔三〕清蹕 天子の出幸を報じて道路を清めて警戒する、〔四〕暉暉

暉暉日傍金輿轉。

暉暉たる日は金輿に傍うて轉じ、

杜甫の詩に、竹日靜暉暉とある、

習習風從玉宇來。

習習たる風は玉宇より來る、

〔五〕習習 「詩邶風」に、習習谷風、

流落生還眞一芥。

流落して生還眞に一芥、

杜甫の詩に、竹日靜暉暉とある、

周章危立近三槐。

周章危立三槐に近し、

〔五〕習習 「詩邶風」に、習習谷風、



【自注】學士  
班近執政

道傍倘有山中舊。 道傍倘有山中舊。

道傍倘有山中舊。 道傍倘有山中舊。

問我收身早晚回。 我問問はん身を收めて早晚か回ると、

輕禽狡獸、周章夷猶とある、あわてる氣味にも、周旋緩舒の意にも用ふ、【六】三槐 三公の義、周代の制として、朝廷に三槐樹を植ゑ、三公が之に面して坐し、左右に九棘樹を植ゑ、公卿大夫等が之に對して坐し、以て訟を聽く、

【詩意】

入仗して第一に驚魂することは草萊に甘んじて居るを媿づ、一聲清蹕するや九門忽ち開き、

暉暉たる日色は金輿に傍ひ得て轉ずるを見る、習習たる風聲は玉宇の高きより來るを聞く、我は流落

して幸に生還を許された一芥の如き身である、是の故に三槐に近くも周章して危立する状である、

道傍に倘しや山中の舊知あらば、我に向つて問ふであらう、汝は身を收めて早晚か回るのであると、

【餘論】

紀曉嵐の評に曰く、此種非東坡所長、凡詩人亦多不長於此、而長於此者、又往往非

詩人一と、入仗の詩を評して、如レ此說來、又不合三廟廊之體と、二評の中、後首の評は實に當れるを覺ゆ、前首の評の如きは要するに何事を言つたのであるか、此の評を評する人あらば、余は教を乞はんと欲するのである殊に、一聲、一芥、日傍、道傍、此の如き同字の使用法、全く邪魔外道である、坡公の眞に非ずと思ふ、

以陰以雨とある、春風の柔舒なる貌、

【六】一芥 「傳燈錄」に、一塵飛而

翳天、一芥墮而覆地とある、【七】

周章 「魯靈光殿賦」に、俯仰顧盼、東

西周章とある、左思が「吳都賦」に、

再和二首

再和二首

眼花錯莫鬢霜勻。

眼花錯莫として鬢霜勻し、

病馬羸驂只自塵。

病馬羸驂只自ら塵る、

奉引拾遺叨待從。

引を奉ずる拾遺待從を叨にし、

思歸少傅羨朱陳。

歸を思ふ少傅朱陳を羨む、

衰年壯觀空驚目。

衰年の壯觀空しく目を驚かし、

險韻清詩苦鬪新。

險韻の清詩苦んで新を鬪はす、

最後數篇君莫厭。

最後の數篇君厭ふ莫かれ、

搗殘椒桂有餘辛。

搗殘の椒桂餘辛あり、

【字解】【一】眼花 前に辨せり、

【二】錯莫 蕭殺と同じ、【三】奉

引 杜甫の詩に、拾遺曾奏數行書、

顛性從來水竹居、奉引濫騎沙苑馬、幽

棲真釣錦江魚とある、杜甫は官拾遺

である、【四】思歸 白樂天の詩に、

憶昨旅游初、迨今五十春、孤舟三

適楚、羸馬四經秦、一生苦如此、

長羨朱陳民と、樂天は官太子少傅を

以て致仕す、【五】衰年 白樂天の

詩に、攜手送衰年とある、【六】

險韻 窄韻と同じ、【七】椒桂

「唐溪詩話」に曰く、東坡兩和、辛字皆工、最後數篇君莫厭、搗殘椒桂有餘辛、案楚辭、昔三后之純粹兮、同衆芳之所不在、雜申椒與菌桂兮、豈唯紉夫蕙齒、蓋以椒桂蕙齒、皆艸木之香者、喻賢人也、而西清詩話改其句云、讀罷君詩何所似、搗殘椒桂有餘辛、以爲坡識首唱多辣氣、此何理也、坡爲人慷慨疾惡、亦時見於詩、有古人規諷體、然亦詎肯效閭閻以鄙語相詈哉、恐誤後人心術、不復得辨、韓詩外傳に、薑桂不因地而辛とある、

【詩意】

唯眼花が錯莫たるのみでは無い鬢霜も 一列に勻し、譬へて見れば病馬や羸驂が只自ら塵るる



と同じものである、引を奉ずるの拾遺は侍従の職を叨にして、歸を思ふの少傅は朱陳邨を羨む、衰年に及んで壯觀は唯空しく目を驚かすのみである、險韻なる清詩は苦んで新を鬪はす、最後の數篇は益す努力して厭うてはならぬ、搗き残せる椒桂は殊に餘辛がある、

〔一〕

〔二〕

憶觀滄海過東萊。

滄海を觀て東萊を過ぎんと憶ふ、

日照三山迤邐開。

日は三山を照らして迤邐として開く、

桂觀飛樓凌霧起。

桂觀飛樓霧を凌ぎて起り、

仙幢寶蓋拂天來。

仙幢寶蓋天を拂うて來る、

不聞宮漏催晨箭。

聞かず宮漏の晨箭を催すを、

但覺簷陰轉古槐。

但覺の簷陰古槐轉するを、

供奉清班非老處。

供奉清班老處にあらず、

會稽何日乞方回。

會稽何の日か方回を乞はん、

旗の屬、蓋は傘に似たるもの、仙觀佛寺には必ず是を用ふ、〔六〕宮漏「周禮」に、時を計る具を漏と曰ふ、壺以爲漏、漏之箭晝夜共百刻、冬夏之間、有長短焉、太史立成、法有四十八箭とある、杜甫の詩、五夜漏聲催曉箭とある、〔七〕供奉 杜甫の詩に、投老歸來供奉班とある、〔八〕會稽 公の自注に、時方開會計守とある、「管鄴傳」字方回、除太常、固讓不拜、樂補遠郡、從

レ之、田爲會稽內史、久之乞骸骨、因居會稽とある、

【詩意】滄海を觀んことを憶念して今東萊を過ぎる、時宛かも日光が三山を照らして迤邐として山色が開く、而して桂觀も飛樓も高く霧を凌ぎて起り、仙幢も寶蓋も天を拂うて來るを見る、宮漏が晨箭を催すことは未だ聞かぬが、簷陰に當つて古槐の影が轉じたるは知覺する、供奉の清班は重き役なるも是にて老ゆるは志でない、會稽郡の邊土に向つて古の方回を節を同じうするは何の日である、

【餘論】此の篇に憶觀と桂觀と同字あるが、使用法上、名詞と動詞との別あれば、妨げざるものと思ふ、

次韻劉貢父省上

劉貢父が省上に次韻す

密雲今日破郊西。

密雲今日郊西に破る、

疎雨脩脩未作泥。

疎雨脩脩未だ泥を作さず、

要及清閒同笑語。

要す清閒に及んで笑語を同じうせん、

行看衰病費扶攜。

行くゆく看る衰病扶攜を費すを、

花前白酒傾雲液。

花前の白酒雲液を傾け、

【字解】〔一〕密雲 「易」に、密雲不雨、自我西郊とある、〔二〕脩脩 毛詩幽風に、予尾脩脩とある、〔三〕未作泥 杜甫の詩、山雨不泥とある、〔四〕雲液 前に辨ゼり、〔五〕月題 「古樂府焦仲卿妻」の詩に、躑躅青驢馬月題とある、莊



戶外青驄響月題。戶外の青驄月題響く、  
不用臨風苦揮淚。用ひず風に臨んで苦に涙を揮ふを、  
君家自與竹林齊。君が家自から竹林と齊し、

【自注】貢父詩中。有不及與其兄原甫。同時之嘆。然其兄子仲馮今爲起居舍人。

子疏に、額上當顛、形似月者也  
とある、

【詩意】密雲が天を鎖してあつたが、今日は郊西の方より先づ破れて来た、疎雨が脩脩と過ぎ、路は未だ泥土と作らない、要すや清閑を得て笑語を同じうせんと思ふ、且つ行くゆくは互に衰病の身と爲らば其の扶攜を費すに惜んではいかぬ、花前に於て白酒は雲液の美を飲み、戶外に於て青驄の嘶く聲を聞いて直ちに知る月題であることを、風に臨んで涙を揮ふ事などは用らぬ、君が一家は皆俊秀にて竹林と齊しと思ふ、

【餘論】貢父は兄を原父と稱し、兄の子を仲馮と稱し、今起居舍人の官に居て、一家は良に闕事無し、原父の如きは雄文博學、天下師表と仰がる、坡公が此の結句を以て稱揚する所以である、密雲、雲液、此の同字は法として許さぬもの、病と謂ふべきか、

再和

再和

當年曹守我膠西。

當年曹守我膠西。

【字解】一、曹守。貢父は熙寧

共厭舖糟與汨泥。  
自古赤丸成習俗。  
因公黃犢免提攜。  
生還各有青山興。  
病起猶能小字題。  
莫怪歌呼數相和。  
曾將獄市寄全齊。

共に厭ふ舖糟と汨泥と、  
古より赤丸習俗を成し、  
公に因つて黃犢提攜を免る、  
生還して各の青山の興あり、  
病起して猶ほ能く小字を題す、  
怪む莫かれ歌呼數ば相和するを、  
曾て獄市を將て全齊を寄せたり、

【自注】貢父爲曹州。盜賊皆奔鄰境。嘗有詩云。從教晉盜稀奔秦。

劍を賣つて牛を買ひ、刀を賣つて犢を買はしめて曰く、何爲れぞ牛を帶び、犢を佩ぶるやと、【五】獄市。「漢書曹參傳」に、參去、屬其後相曰、以齊獄市爲寄、慎勿擾也、注に曰く、獄市者、兼受善惡、若窮極姦人、姦人無所容竄、久且爲亂、秦人極刑而天下畔とある、貢父が曹州に知と爲る、盜賊皆鄰境に奔る、

【詩意】當年君は曹州を守り我は膠西を守りしことがある、而して酔うたる世人と共に酔ひ、濁りたる衆人と共に濁ることは、君も我も共に厭うた、前古より赤丸や黒丸を探りて悪事をする習俗は如何ともすることが出来ない、幸に君の力に頼つて刀犢賣買の徒と提攜することを免る、生還して後は各の青山に遊ぶの興がある、病後と雖も猶ほ能く小字を題書することが出来る、他人は怪んではならぬ、



【餘論】此の篇は可も無く、又不可も無し、坡公として平平凡凡に屬するもの、  
我輩が歌呼して唱和を數ばするを、曾ては獄市を將て全齊を寄せし同官の人である、

送顧子敦奉使河朔

顧子敦が使を河朔に奉ずるを送る

我友顧子敦。軀膽兩俊偉。

我が友顧子敦、軀膽兩ながら俊偉、

便便十圍腹。不但貯書史。

便便十圍の腹、但書史を貯ふるのみならず、

容君數百人。一笑萬事已。

容るる君數百人、一笑萬事已む、

十年臥江海。了不見愠喜。

十年江海に臥し、了に愠喜を見ず、

磨刀向豬羊。醜酒會鄰里。

刀を磨して豬羊に向ひ、酒を醜みて鄰里を會す、

歸來如一夢。豐頰愈茂美。

歸來一夢の如く、豐頰愈よ茂美、

平生批勅手。濃墨寫黃紙。

平生批勅の手、濃墨黃紙に寫す、

會當勒燕然。廊廟登劍履。

會す當に燕然に勒し、廊廟劍履登るべし、

翻然向河朔。坐念東郡水。

翻然河朔に向ふ、坐に念ふ東郡の水、

河來屹不去。如尊乃勇耳。

河來るも屹として去らず、尊の如きは乃ち勇のみ、

【字解】

【一】十圍。「三國志」に、董卓腰十圍とある、【二】磨刀。「古樂府木蘭歌」に、小弟喜姊來、磨刀霍霍向豬羊とある、

【三】醜酒。「毛詩」に、醜酒有衍、蓬豆有踐とある、【四】豐頰。馮應榴は云ふ、獨醒雜志に、子敦肥碩、當暑袒褐據案而寐、東坡書

批勅手。「唐李藩傳」に、遷給事中、制有不便、就勅尾批卻之、吏驚請聯他紙、藩曰聯紙是牒、豈曰勅耶と、【六】勒燕然。

後漢竇憲、擊匈奴大破之、遂登燕然山、刻名勒功、紀漢威德、令班固作銘、東軒筆錄、顧子敦、好談兵、劉放目爲顧將軍、云

云、故先生詩亦用勅燕然事也とある、【七】向河朔。孔武中が顧子敦の河北に赴くを送る序に云ふ、上之二年、子敦自河東轉運使、

召給事中、在門下省、事有不便、輒爭還之、議論堅決、不多少迎合、時河北數有水災、潭魏故道、久湮未復、子敦拜天章閣待制、

使河北、士大夫以爲河爲數州患、雖急一方事也、子敦以侍從之官、撤而使一方、忽所大、而治所小、非計也、舉朝之人、睥

睨前卻、不肯徑往、以蹈後悔、子敦獨日夜計畫、以爲己任、非確然不易、其肯爲之乎、【八】東郡水。公が送魯元翰の詩に、

坐憂東郡決、老守思王尊とある、今も同じ意である、【九】屹不去。王尊が東郡太守と爲る、其の時や水災あり、老弱奔走して防水

に努む、王尊は主簿が泣いて其の危救を説くも聽かずして、獨り屹然として、動き去らざるのである、

【題義】顧子敦が勅使と爲つて河朔に赴くを送る詩である、

【詩意】我が友人の顧子敦は、軀も膽も共に俊偉である、便便たる其の腹は十圍もある、其の腹中に

貯ふるものは但書史のみではない人を容れるの量が十分にある、而して一笑の裏に萬事を解決する、

十年の間浪人を爲したるも、其の間一度も愠と喜との顔色を見せない、客を遇せんと欲するときは自

ら刀を磨して豬羊を屠り、酒を醜みて以て鄰里の諸人と會談する、其の十年間を過ぎ歸來して見れば

一夢と同様である、豐頰愈よ茂美で衰容は聊かも無い、今や給事中の官に在り、濃墨を以て黃紙に書

して詔勅を批評し、少しも迎合することは無い、會す當に功を燕然山に勒し、劍履のままにて殿に上



るの優遇を受けらるるに至るであらう、翻然として河朔郡に向はる、僕は公の赴任を聞いて昔の王尊の事を想像する、東郡に若しや水災ある場合、公は屹然として獨守するの人であることを、

【餘論】此の篇二十句一韻の詩である、顧子敦の面目躍如たるものがある、

次韻子由送家退翁知懷安軍

子由が家退翁の懷安軍に知たるを送るに次韻す

吾州同年友。粲若琴上星。

吾州同年の友、粲として琴上の星の若し、

當時功名意。豈止拾紫青。

當時功名の意、豈止だ紫青を拾はん、

事既與願違。天或不假齡。

事既に願と違ふ、天或は齡を假さず、

今如圖中鶴。俯仰在一庭。

今圖中の鶴の、俯仰して一庭に在るが如し、

【自注】吾州同年友十三人。今存者六人而已。故有琴上星圖中鶴之語。

退翁守清約。霜菊有餘馨。

退翁清約を守り、霜菊餘馨あり、

鼓笛方入破。朱絃微莫聽。

鼓笛方に破に入る、朱絃微にして聽くこと莫し、

西南正春早。廢沼黏枯萍。

西南正に春早、廢沼枯萍黏す、

翩然一麾去。想見靈雨零。

翩然一麾し去つて、想ひ見る靈雨の零つるを、

我無謫仙句。待詔沈香亭。

我に謫仙の句無し、待詔沈香亭、

空騎內廐馬。天仗隨雲駟。

空しく騎る内廐の馬、天仗雲駟に隨ふ、

竟無絲毫補。眷焉誰汝令。

竟に絲毫の補無し、眷焉誰か汝を令せん、

永懷舊山叟。憑君寄丁寧。

永く懷ふ舊山叟、君が丁寧を寄するに憑る、

【字解】〔一〕琴上星 次公曰、言十三徽也、〔二〕拾紫青 漢の制、金印紫綬、銀印青綬、〔三〕不假齡 左傳僖公二十八年、

楚子曰、晉侯天假之之年而除其害とある、〔四〕圖中鶴 查注に曰く、琴上星以當十三人數、則圖中鶴、當是六數と、又「圖畫見聞志」に、孟蜀後主、廣政甲辰、淮南馳聘、副以六鶴、蜀主遂命黃筌、寫六鶴於便坐之壁、名曰六鶴殿と、六鶴は一日二暎天、二日三警露、三日四啄苔、四日舞風、五日梳翎、六日顧歩とある、〔五〕入破 「唐書五行志」に、天寶後詩人、多爲流寓之思、樂曲亦多以邊地爲名、至其曲遍繁聲、謂之入破とある、〔六〕靈雨零 毛詩に、靈雨既零、命彼倌人、星言夙駕、稅于桑田とある、〔七〕沈香亭 開元中、禁中牡丹を重んじ、興慶池の東、沈香亭前に植う、李白の詩、解釋春風無限恨、沈香亭北倚闌干と、〔八〕内廐馬 翰林學士、初めての入院、例として名馬を賜はる、

【題義】蘇子由が蘇家の一族である、退翁名は定國が劍南西道懷安軍に赴くに就いて之を送る詩を作る、乃ち次韻せるものが此の詩である、定國の弟を安國と曰ひ、東坡の弟を子由と曰ふ、此の四人、少時皆眉州の劉微之に従うて學びしものである、

【詩意】我が郷の眉州にて同年の友を見ると、其の人粲然として十三が琴上の星の如く光を放つ、各



の其の當時の意氣は功名の念を抱き、而かも其の意氣は勅任官となるとか、奏任官になるとかのみの小希望ではない、所が事は志願と違ふことが多く、多くは年壽長からずして逝き、殘存する者は六羽の鶴の如く、六人が現在するに過ぎない、而して其の一人なる退翁は清約を守りて、霜菊が秋後に餘馨を放つが如きである、任地にて聞く所のものは何である、鼓笛は方に入破して名曲なるが、朱絃の如く高尚なる樂は恐らくは聴くことは莫からう、その上西南の地は春早と同じく教化も早にて、廢沼も廢校も共に枯澤が黏りつき居るのである、君の力にてそれらの惡を一磨し去つて、靈雨を下して地を沾すことを我はそれを想ふのである、我は謫仙の如き詩を作るものではないが、翰林院に待詔して空しく天上賜ふ所の馬に騎り、天仗を將て雲輦に隨ふ身である、自ら知る竟に國家に於て絲毫も補ひなきを、脊焉として思ふ誰か汝を令となしたるや、余は永く懷ふ舊山の舊友叟を、君を煩はして丁寧に語を寄せたと述べて呉れ玉へ、

【餘論】 紀曉嵐は評して、應酬詩之清歷者と曰ふ、案するに坡公の詩僻として龍頭にして蛇尾と思へるもあり、此の篇は然らずと思ふ、

諸公餞子敦軾以病不能往復次前韻

諸公、子敦を餞す、軾病を以て往く能はず、復た前韻に次す

君爲江南英。面作河朔偉。

君は江南の英たり、面は河朔の偉を作す、

人間一好漢。誰似張長史。

人間一好漢、誰か張長史に似ん、

上書苦留君。言拙輒報已。

上書して苦に君を留む、言拙にして輒ち報する已、

置之勿復道。出處俱可喜。

之を置いて復た道ふこと勿かれ、出處俱に喜ぶ可し、

攀輿共六尺。食肉飛萬里。

攀輿六尺を共にし、肉を食して萬里に飛ぶ、

誰言遠近殊。等是朝廷美。

誰か言ふ遠近殊なると、等しく是れ朝廷の美、

遙知送別處。醉墨爭淋紙。

遙に知る別を送る處、醉墨争うて紙に淋ぐ、

我以病杜門。商頌空振履。

我病を以て門を杜づ、商頌空しく振履、

後會知何日。一歡如覆水。

後會知る何の日ぞ、一歡覆水の如し、

善保千金軀。前言戲之耳。

善く千金の軀を保てよ、前言は之に戲るのみ、

【字解】 一、張長史、「舊唐書狄仁傑傳」に、武后問曰、朕要一好漢任使、有乎、仁傑曰、荊州長史張柬之、其人雖老、宰相才也、若用之必能盡節於國家とある、二、留君、坡公別に乞留願臨狀云、方今二聖臨御、肅正紀綱、如臨等輩、正當下置之

左右、以輔闕遺、三、攀輿、「漢袁盎傳」に、天子所與共六尺輿者、皆天下英豪とある、四、食肉、「後漢班超傳」に、超行詣相者、曰生燕頰虎頭、飛而食肉、此萬里侯相也とある、五、杜門、「史記張良世家」に、性多病導引不食穀、杜門不出とある、六、商頌、「新序」に、原憲曳杖拖履、行歌商頌而反、聲滿天地、如出金石、天子不不得而臣、諸侯不不得而友、七、覆水、「後漢何進傳」に、覆水不復收、悔將何及と、太白の詩に、雨露不上天、水覆難重收とある、八、善保、杜甫の詩に、善保千金軀とあ



る、【七】前言戲之耳。この五字は論語の語を用ふ、「王立之詩話」に、元祐中、顧子敦、有顧屠之號、以其極肥偉也、其後奉使河朔、居士有詩送之云、我友顧子敦、軀膺兩俊偉、便便十圍腹、不三但貯書史、又云、磨刀向豬羊、醜酒會鄰里、又云、批動手、皆用屠家語也、子敦讀之頗不樂、所以居士復和前篇云、善保千金軀、前言戲之耳、

【題義】諸公が子敦の爲め送別會を設けたるも、余は病臥して往く能はざるを以て、前韻を用ひて其の意を敍したのである、

【詩意】君は眞に江南の俊英である、其の面は河朔に於ける偉傑である、人間の一好漢は曾て漢の張長史を稱したのであると思ふたが君は即ち其の人である、僕は君が地方官と爲らず、中央の官吏として都に留まる様に上書したのであるが、其の言が拙で其の意は通せず竟つた、そんな事は復た道ふの要はない、丈夫は出も處も俱に喜ぶべきである、生れて王公と六尺の攀輿を同じうし、其の志を萬里に馳するを得れば足る、遠の近のと論ずる者は誰ぞ、遠も近も皆一朝廷の支配下である、謂ふに其の送別の會は、定んで諸公が醉墨を揮うて紙面に淋漓としたであらう、我は病んで門を出ることが出来ず、従つて商頌振履の盛状を見ることも出来なかつた、後會は何の日であるか知ること能はざるが、恐らくは此の一歡は今日去つては全く覆水の如くである、幸に君は國家の爲め善く千金の軀を保てよ、前に彼れ此れ言うたことは皆戲言であるから恕し玉へ、

【餘論】紀曉嵐曰ふ、一好漢究竟不雅と、武后の言を其の儘使用したるもの、此の語に因つて下の張長史が出るのであるから此の一句のみに就いて雅不雅を論ずることは出来ない、坡詩を讀む者注意して見るの要がある、

て見るの要がある、

走筆謝呂行甫惠子魚

筆を走らし呂行甫が子魚を惠むを謝す

臥沙細肋吾方厭

臥沙細肋吾方に厭ふ、

【字解】一 臥沙「詩義疏」に鯊魚吹レ沙也、似ニ鯽魚ニ而小、常張

通印長魚誰肯分

通印長魚誰か肯て分たん、

レ口吹レ沙、背上有レ刺蝮レ人とある、

好事東平貴公子

好事なる東平の貴公子、

二 細肋「埤雅」に、肋魚似ニ鱗魚ニ而小、身薄首細とある、【三】

貴人不與與蘇君

貴人に與へず蘇君に與ふ、

通印「遼齋閒覽」に、莆陽通應子魚、名著天下、蓋其地有通應侯廟、廟前有港、港中之魚最佳、今人必求其大可容印者、謂之通印子魚、又「酉陽雜俎」に、印魚長一尺三寸、額上四方如印有字、諸大魚應死者、先以印封之とある、【四】東平地名、【五】貴公子「晉書嵇康傳」に、潁川鍾會貴公子也とある、【六】不與「類說」に、宋顯仁后、謂秦檜妻曰、子魚大者絕少、對曰、妾家有之、檜答其失言、乃以青魚百尾進、太后笑曰、我道這婆子痴、可見子魚大者、非權貴不多得也、

【題義】忽卒に筆を走らして呂行惠が子魚を惠まれたるを謝して作れる詩、

【詩意】沙上に多く取れる肋筋の多い魚は吾は厭であるが、然りと云うて通印の長魚は誰も分與して呉れることはない、幸に好事の東平貴公子は、其の貴人に貽るべき魚を我に貽られたるは有り難い、

【餘論】紀曉嵐の評に、此在當日一只簡代、東原不以詩論とある、詩を以て簡の代用と爲すのが



坡公の長所である、豈此詩のみならんや、他に往往有る、東原が詩を以て論せずと曰ふも、東原自身の作は多く此の類の作である、他面は見るも、自面は見る事が出来ないのである、

送呂行甫司門倅河陽

呂行甫司門の河陽に倅となるを送る

結交不在久。傾蓋如平生。

結交久しきにあらず、傾蓋平生の如し、

識子今幾日。送別亦有情。

子を識る今幾日ぞ、別を送りて亦情あり、

子生公相家。高義久崢嶸。

子は公相の家に生れ、高義久しく崢嶸、

天才既超詣。世故亦屢更。

天才既に超詣、世故も亦屢ば更たり、

譬如追風驥。豈免羈與纓。

譬へば風を追ふ驥の如く、豈羈と纓とを免れんや、

念我山中人。久與麋鹿并。

念ふ我山中の人、久しく麋鹿と并ぶ、

誤出挂世網。舉動俗所驚。

誤りて出でて世網に挂り、舉動俗の驚く所、

歸田雖未果。已覺去就輕。

歸田未だ果さずと雖も、已に去就の輕きを覺ゆ、

河陽豈云遠。出處恐異程。

河陽豈遠しと云はんや、出處恐らくは程を異にせん、

便當從此別。有酒無徒傾。

便ち當に此より別れ、酒あり徒に傾くること無かるべし、

【字解】 〔一〕傾蓋 道に行き相違うて、車を並べて對語、兩蓋相切にして下傾く、孔子家語に、孔子之郷、遭程子於途、傾蓋而語終日、甚相親とある、〔二〕崢嶸 李白の「大鵬賦」に、吐崢嶸之高論とある、〔三〕河陽 今日河南の孟縣、元魏の時、南城と北城と中潭城の三城を築く、

【題義】 呂行甫の官は司門郎中であるが、今河陽に向つて其の副知府と爲つて赴くを送る詩である、

【詩意】 君と僕と交を結ぶことは久しいのではないが、傾蓋の深情は久しき以上のものがある、子を識つてより今日まで幾日を経たる、別を送るに亦特別の情がある、子は公相たる所の名家に生れ、高義は山の崢嶸として侵す能はざる概がある、天才は既に超詣して常人の及ぶ所でない、世故の經歷も種種に閱して居られる、譬へば風を追ふ驥の如くである、羈と纓との事あるは免れることが出来ない、念ふに我は素山中の人にて、久しく麋鹿の友と爲つて居りしが、誤つて山を出て世網に挂りて、其の一舉一動俗人の驚く所と爲る、歸田の計は未だ果さないが、心は已に世事に執著せずして去も就も良に輕し、河陽はそれほど遠くはないが、去就を同一にすることが出来ないのを恐る、便ち當に此より別れる、別盃を意義あるものとして別れたい、

【餘論】 紀曉嵐曰く、不レ失清妥、然非出色之作、余は案ず識子の二句十字、或は刪る方可ならんと、

和張昌言喜雨

張昌言の喜雨を和す

二聖憂勤忘寢食

二聖憂勤して寢食を忘る、

【字解】

〔一〕二聖 哲宗と太后



百神奔走會風雲。 百神奔走して風雲に會す、  
 禁林夜直鳴江瀨。 禁林夜直して江瀨鳴り、  
 清洛朝回起穀紋。 清洛朝に回りて穀紋起る、  
 夢覺酒醒聞好句。 夢覺め酒醒めて好句を聞き、  
 帳空簾冷發餘薰。 帳空しく簾冷かに餘薰を發す、  
 秋來定有豐年喜。 秋來定んで豐年の喜び有らん、  
 剩作新詩準備君。 剩へ新詩を作りて君に準備せん、

を謂ふ、【一】禁林 禁苑の林木を謂ふ、班固賦に、接翼側足、集禁林而屯聚とある、又翰林院の別稱、今の句は翰林院を謂ふ、【二】穀紋 劉禹錫の詩に、瀼西春水穀紋生とある、杜牧の詩に、水紋如穀燕差池とある、【三】準備 預備と殆んど同じ、

【題義】張昌言が喜雨の詩を示されたるを和するのである、

【詩意】二聖早天を憂へられて寢食を廢するの状である、此の二聖の憂勤に感じて、遂に天の百神は奔走して風雲會するに及ぶ、自分は禁林に夜直して雨の爲め江瀨が鳴るを聞き、又晨朝に退出して清洛の水に穀紋を生ずるをも見る、夢覺め酒も亦醒めて君に好句ありしをも聞く、帳も簾も共に空冷なるも餘薰は猶ほ發る、秋來定んで是れ豐年の喜びで、剩へ我は新詩を作り君が寄せ來らば直ちに和せんと其の準備を爲して居る、

【餘論】此の篇前半と後半と一致せず、初に二聖憂勤と言ひ、第五句に至り、夢覺酒醒なぞと言ひ、

喜びの酒ではあらうが、憂勤の字に對して、不謹慎も極まる、此れ杜甫には無き所、坡公には往往に於てある、宋人の僻獨り坡公の罪ではない、蓋し坡詩として最下劣のものである、

次韻劉貢父西省種竹

劉貢父が西省に種竹を次韻す

要知西掖承平事。 知らんと要せば西掖承平の事を、  
 記取劉郎種竹初。 記取せよ劉郎種竹の初を、  
 舊德終呼名字外。 舊德終に呼ぶ名字の外、  
 後生誰續笑談餘。 後生誰か續がん笑談の餘、  
 成陰障日行當見。 陰を成して日を障ふ行く當に見る、  
 取筍供庖計已疎。 筍を取つて庖に供す計已に疎なり、  
 白首林間望天上。 白首林間より天上を望み、  
 平安時報故人書。 平安時に報せよ故人の書、

【詩意】西掖と云ふ役所が承平であることを知らうと思はば、諸君記取し玉へ劉郎が竹を種る様な

【字解】【一】西掖 即ち西省、

【二】舊德 「周易」に、食舊德、貞厲終吉とある、【三】笑談餘 公の自注を譯記する、昔、李公擇、竹を館中に種う、戲に同舍に語る、後人此の竹を指して必ず云はん、李文正の手植と、貢父笑つて曰く、文正獨繫筆ならず、亦種竹を知るか、時に筆工に李文正あり、【四】平安 「西陽雜俎」に、李衛公言、北都童子寺、有竹一窠、才長數尺、公令其寺綱維、每日報平安とある、綱維は寺務を執る者の役名、

【自注】昔李公擇種竹館中。戲語同舍。後人指此竹必云。李文正手植。貢父笑曰。文正不獨繫筆。亦知種竹耶。時有筆工李文正。



閒事を爲したのを見て、其の舊徳は定めし名字の外に人が呼ぶことであらうし、又後生は此の種竹を以て二人の文正ありしことを談柄とするであらう、竹が陰を成して日光を障ふるの林となるも遠くは無い、但し筍を取つて之を食膳の材料とするなどの經濟は已に疎である、白首の我は林間に坐して西掖なる天上を望み、平安の消息が其の方より來るを待つのである、

【餘論】紀曉嵐曰く、舊徳句、太費三解意、謂三文正一是諡、法諡所以易名耳、今謂ふ記取と取筍と取が重複、掘筍とすれば可い、

偶與客飲孔常父見訪方設席延請忽上馬馳去已而有詩

戲用其韻答之

偶客と飲む、孔常父訪はる、方に席を設けて延請す、忽ち馬に上つて馳せ去る、已にして詩あり、戯れに其の韻を用ひて之に答ふ

揚雄他文皆不奇、揚雄他文皆奇ならず、

獨稱觀餅居井眉、獨り稱す觀餅居井眉、

酒客法士兩小兒、酒客法士兩小兒、

陳遵張竦何曾知、陳遵張竦何ぞ曾て知らん、

【字解】(一)揚雄、魏の曹丕は「典論」を作り文を論ず、曰く、今之文人云云、王粲長於辭賦、徐幹時有三齊氣、然粲之匹也、如粲之初征、登樓、槐賦、征思、幹之玄猿、漏卮、圓扇、橘賦、雖張蔡不復過也、然於他文、

主人有酒君獨辭、主人酒あり君獨り辭す、

蟹螯何不左手持、蟹螯何ぞ左手に持たざる、

豈復見吾衡氣機、豈復た見る吾が衡氣機を、

遣人追君君絕馳、人を遣はし君を追ふ君は絶馳す、

盡力去花君自癡、力を盡して花を去る君自ら癡なり、

醍醐與酒同一卮、醍醐と酒と同一卮、

請君更問文殊師、請ふ君更に文殊師に問へ、

未だ能く稱是、魏文は揚雄に就いて言ふにあらず、坡公が揚雄を評して言ふ、(二)獨稱、揚侍郎集を案するに、雄が作る酒賦と酒箴との二文が載せてある、文字に増減あるが同一のものである、酒箴に曰く、子猶瓶矣、觀瓶之居、居井之眉、處高臨深、動常近危とある、全首百字に満たざるもの、(三)陳遵、前漢陳遵傳に、遵與張竦俱以列侯歸長安、竦居貧無賓客、時時好事

者、從之論道經書、而遵晝夜號呼、車騎滿門、先是揚雄作酒箴、爲酒客、難法度士、譬之於物、曰、子猶餅矣、觀餅之居、居井之眉、自用如此、不如此、鳴夷、遵大喜之、謂竦曰、吾與爾猶是矣、足下讀誦經書、苦身自約、不致差跌、而我放意自恣云云、(四)蟹螯、「晉書畢卓傳」に、卓嘗謂人曰、得酒滿數百斛船、四時甘味置兩頭、右手持酒杯、左手持蟹螯、拍浮酒船中、便足了一生矣、乃ち「酒の杯と蟹の螯」である、(五)衡氣機、「莊子應帝王篇」に、列子入以告壺子、壺子曰、吾鄉示之、以太冲莫勝、是殆見吾衡氣機也云云、列子追之不及とある、動靜が平衡して半動半靜の貌を曰ふ、(六)去花、「維摩詰經觀衆生品」に、時維摩詰室、有一天女、見諸天人、聞所說法、便現其身、即以天花、散諸菩薩大弟子上、花至諸菩薩、即皆墮落、至大弟子、便著不墮、一切弟子、神力去花、不能令去、爾時天問舍利弗、何故去花、曰此花不如法、是以去之、天曰勿謂此花爲不如法とある、(七)醍醐、佛法の玄理が究極して、深味が諸物に超えるを醍醐と曰ふ、大乘の法門と心得て可い、(八)文殊、普通に稱して文殊、文殊師利、又は曼殊室利、今は韻法の上から利を略して單に師と書す、維摩居士に對し、彌勒と文殊が智慧の鼎足と爲るもの、



【題義】公が一日客と酒を飲む、其の時に偶然孔常父が訪問せられたるを以て、直ちに席を設けて延請したるに、孔は忽ち馬上の人と爲つて去る、而して孔が詩を寄せられたれば、直ちに其の韻を用ひて作りしものである、

【詩意】揚雄は大文豪の名は高いが、多くの文章は奇なるものがない、獨一文酒箴の觀餅居井眉の語が奇である、それは酒を飲む客も、法度を難する士も共に小兒の如きである、彼の酒を多く飲む陳遵も貧なる張竦も知る所ではない、今主人の僕は酒あり故に客と飲む、而して君の飲まずして辭去するは何である、古人も蟹螯を左手に持したと云ふことがある、君は我が客に對して衡氣の機を以てするを見ないのであるが、君が辭去すると聞いて人をして君を追はしめたるも及ばなかつた、君は何故に衡氣の機を見ることが出來ずして執著が強いぞ、是の故に僕は佛典の醍醐味と酒と同一厄であると思ふ、君が若し我が言に疑ひあらば、請ふ之を文殊師利に問ひ玉へ、

【餘論】紀曉嵐曰く、豈復句寫三馳去一雅切、結句正答三來語、此亦不見三原唱、則不知三所云者、一二の句、揚侍郎集を假り、三四の句は漢書を借り、五六七の句、自身を敘し、九十一句と維摩經の語を以て結を取る、此を讀んで余は謂ふ昔李子鱗は李白を以て英雄欺人と稱す、余は此の語を以て坡公其の人に移さんと思ふ、盡力以下三句、詩にもあらず、偈にもあらず、邪魔外道の語である、昔人山谷を評して詩中魔と喚ぶ、此の詩も所謂詩中魔と言はんのみ、

次韻子由書李伯時所藏韓幹馬

子由が李伯時藏する所の韓幹が馬に書するに次韻す

潭潭古屋雲幕垂、  
潭潭たる古屋雲幕垂る、  
省中文書如亂絲、  
省中の文書亂絲の如し、  
忽見伯時畫天馬、  
忽ち見る伯時が畫天馬を、  
朔風胡沙生落錐、  
朔風胡沙落錐に生ず、  
天馬西來從西極、  
天馬西來西極よりす、  
勢與落日爭分馳、  
勢落日と分馳を争ふ、  
龍膺豹股頭八尺、  
龍膺豹股頭八尺、  
奮迅不受人間羈、  
奮迅人間の羈を受けず、  
元狩虎脊聊可友、  
元狩の虎脊聊か友とす可し、  
開元玉花何足奇、  
開元の玉花何ぞ奇とするに足らん、  
伯時有道眞吏隱、  
伯時道あり眞に吏隱、  
飲啄不羨山梁雌、  
飲啄羨まず山梁の雌、

古今體詩 次韻子由書李伯時所藏韓幹馬

【字解】 潭潭 「史記應劭注」に、沈沈宮室深遠之貌、音長合反、字典通作潭とある、乃ち潭潭は沈沈と同義なるを知る、 省中 官署の牀に挂ける圖、 落錐 「五代史安肇傳」に、安肇曰安朝廷、定禍亂、直須長槍大戟、若尾錐子、安足用哉とある、筆鋒を謂ふ、 西極 「史記樂書」に、武帝伐大宛、得千里馬、作歌曰、天馬來兮從西極、經三萬里、今歸有德とある、大宛は大月氏の東北に當る、清には浩罕國と爲す、今日は露鎮中亞細亞の佛爾哈那州が即ち是れ、 八尺 「周禮」に、馬八尺以上爲龍とある、 元狩 漢の武帝の年號、三年に馬が渥洼水中に生る、天馬歌を



丹青弄筆聊爾耳。

丹青筆を弄すること聊爾耳、

意在萬里誰知之。

意は萬里に在り誰か之を知らん、

幹唯畫肉不畫骨。

幹は唯肉を畫きて骨を畫かず、

而況失實空留皮。

而かも況んや實を失して空しく皮を留

煩君巧說腹中事。

君を煩はして巧に説く腹中の事、

妙語欲遺黃泉知。

妙語を黃泉に遣り知らしめんと欲す、

君不見韓生自言

君見すや韓生自ら言ふ學ぶ所無し、

無所學。

「むるをや、

廐馬萬匹皆吾師。

廐馬萬匹皆吾師と、

作る、天馬徠出三泉水、虎脊兩化若鬼とある、【七】開元、唐の玄宗の年號、杜甫の詩に、先帝天馬玉花驄とある、【八】伯時、姓は李、名は公麟、一の字は叔時、舒城の人、家に名畫を多く藏す、伯時少時より之を好み、遂に古人用筆の妙を悟り、千古の大畫宗と爲る、官は御史檢法に至りて罷む、【九】山梁雌、論語に、山梁雌雉、時哉時哉とある、「法言」に、山雌之肥、其意得乎、或曰回之簞瓢、如之何、曰、明明在上、百官牛羊亦山雌也、闇闇在上、簞瓢

拵茹、亦山雌也、何其體、注言山梁雌雉とある、【一〇】聊爾、「世説」に、未能免俗、聊復爾爾とある、俗語の「マ」姑らく姑らくとの義に當る、【一一】幹唯、杜甫の詩に、幹唯畫肉不畫骨、忍使華鬚氣彫喪とある、【一二】煩君、君は子由を指す、【一三】無所學、杜甫の詩に、弟子韓幹早入室とある、杜は幹を以て曹霸の弟子と爲す、然るに「歷代名畫記」に、上令韓幹師陳闕、怪其不同、幹曰、臣自有師、陛下内廐馬、皆臣師也と、

【題義】子由が詩を作りて李伯時が藏する所の韓幹の畫馬に讚したるを兄の坡公が其の韻を次ぎて作れるもの、韓幹は藍田の人、天寶の初、王維が之を推薦して入つて供奉と爲り、太府寺丞の官と爲る、

人物を善寫するも、尤も畫馬に工で、玄宗の爲め大に奇とせられたる人である、

【詩意】潭潭たる古屋に雲幕が垂れて居る、省中の文書は亂絲の如く整頓は出來て居ないが、忽ちに目に著きたるは伯時が愛藏する幹が畫ける天馬の圖である、一瞥したのみにて心に覺ゆ、朔北の風が吹いて筆鋒の上に生ずるかと、天馬は本西極より來るものにて、勢は落日と分馳を争ふが如く、其の形たるや龍の膺豹の股丈は八尺である、其の奮迅の威容は決して人間の羈を受くるものでない、元狩の年に西來せる虎脊のみが其の友である、開元の玉花驄は之に比すれば奇とするに足らない、李伯時は其の人有道にて眞の吏隱である、他の俗吏輩の如く飲み啄む山梁の雌の類は羨むことはせぬ、丹青に筆を弄するも聊か自ら戲遊とするのみ、本志は萬里と云ふ遠大の處にあるも、誰も之を知る人なく、或は畫師位と思ふ者もあらん、幹の馬は古人も言ふ肉を畫きて骨を畫かずと、而かも其の上には實相を失うて空しく皮相を留むるをや、君を煩はして腹中藏する天馬畫の來歴を巧に説かしむるを、冀はくは其の妙語を黃泉の下に眠る幹をして知らしめたい、君も已に知る韓生自ら言ふ所の語を、活馬萬匹を師として、人間の一人や二人を師として學んだもので無いと云ふことを、

【餘論】此の題の詩は子由が初めて作り、蘇子容、黃山谷、劉貢父、王仲至、而して坡公が此の詩と盛んに和せられたものである、紀曉嵐曰く、只就伯時一生情、韓幹只於三筆端、縈繞、運意運筆、俱極奇變と、幹唯畫肉の句に至りて曰く、至此纔用三韓幹、用筆之妙、前無古人と、余案するに老杜の集、殊に畫馬に關する詩が多く、且つ妙を極む、坡公の集にも亦馬に關する詩が多い、又良工の苦



心なるもの多し、坡公の本領を遺憾なく發表したるもの、是の篇に於て見るべきである、

次韻劉貢父獨直省中

劉貢父が省中に獨直するを次韻す

明窗畏日曉先暎

明窗畏日 曉先づ暎

高柳鳴蜩午更喧

高柳鳴蜩 午更に喧

筆老新詩疑有物

筆老い新詩物あるかと疑ひ

心空客疾本無根

心空しく客疾本根無し

隔牆我亦眠風榻

牆を隔てて我亦風榻に眠り

上馬君先鎖月軒

馬上上りて君先づ月軒を鎖す

共喜早歸三伏近

共に喜ぶ早く歸り三伏近きを

解衣盤礴亦君恩

衣を解いて盤礴するも亦君恩

【字解】 〔一〕畏日 夏日、前に

趙盾の事を辨す、〔三〕曉先暎 「楚

辭」に、暎將出兮東方、照吾檻兮

扶桑とある、〔三〕鳴蜩 「陸子衡

擬古詩」に、寒蟬鳴高柳とある、

〔四〕有物 白樂天集、劉禹錫詩、

在在處處、當有靈物護之とある、

〔五〕客疾 暗に維摩經の意を用ふ、

〔六〕三伏 夏至後の第三庚日を初

伏と爲し、第四庚日を中伏と爲し、

立秋後の第一庚日を末伏と爲す、

〔七〕盤礴 「莊子田子方篇」に、宋

元君將畫圖、衆史皆至、受揖而立、

既筆和墨、一史後至、僂僂不趨、

受揖不立、因之舍、公使二人視之、

則解衣盤礴、君曰

【題義】 劉貢父が省中に於て一人にて宿直せる詩を示さる、之を和するのである、

元君將畫圖、衆史皆至、受揖而立、既筆和墨、一史後至、僂僂不趨、受揖不立、因之舍、公使二人視之、則解衣盤礴、君曰可矣、是真畫者也、盤礴は即ち箕坐を言ふ、

【詩意】 明窗夏日に曉暎に對して坐し、而して日午に高柳に鳴蜩の喧聲を聞く、君の筆は老熟して靈

物が有るかと思ふほどである、心を空虚にして置けば客疾も本は根無きを知る、牆を隔てる位近き處

に僕も風榻に馮つて眠る、但し今君は省中に宿直なれば、馬上上つて月軒を鎖すのであらう、只共

に喜ぶことは近く三伏の官休を得て、衣を解いて自由に起臥することが出来る是れ亦君恩である、

【餘論】 紀曉嵐曰く、首句用杜預語「未佳」と、佳ならざるのみならず語を成さないかと思ふ、坡詩

の最下乗なるもの、

軾以去歲春夏侍立邇英而秋冬之交子由相繼入侍次韻

絕句四首各述所懷

軾、去歲春夏を以て邇英に侍立す、而して秋冬の交、子由相繼ぎ入つて侍す、次韻絶

句四首各の所懷を述ぶ

瞳瞳日脚曉猶清

瞳瞳たる日脚 曉猶ほ清し、

細細槐花暖欲零

細細たる槐花 暖零ちんと欲す、

坐閱諸公半廊廟

坐して閱す諸公 半は廊廟、

【字解】 〔一〕瞳瞳 日初出之貌

也、〔三〕諸公 自注の如く、呂公

著・韓維・劉摯である、〔三〕黃色

黄昏の日色を謂ふ、

【自注】 僕射呂公。門下韓公。右丞劉公皆自講席大用。

古今體詩 次韻劉貢父獨直省中 軾以去歲春夏侍立邇英而秋冬之交子由相繼入侍次韻



時看黃色起天庭。 時に看る黄色の天庭に起るを、

【詩意】 邇英閣前に當つて、瞳瞳と上る日脚は、曉に猶ほ清い、閣の四面に當つて、槐花は暖の爲め遂に零ちんと欲する、坐して関する大官諸公は、廊廟に半は面識である、既にして看る暮色が、天庭の隅より起るを、

〔一〕

〔二〕

上尊初破早朝寒。 上尊初めて破る早朝の寒を、

茗盃仍霑講舌乾。 茗盃仍ほ霑す講舌の乾くを、

陞楯諸郎空雨立。 陞楯に諸郎空しく雨に立つ、

故應慚悔不儒冠。 故に應に儒冠ならざるを慚悔すべし、

【字解】 〔一〕 上尊 宮廷より賜ふ酒である、進講の前後に賜ふものと思はる、〔二〕 講舌乾 「道彦傳燈錄」に、眞淨文禪師、問講師曰、火災起時、山河大地、俱被焚盡、許多灰燼、將置何處、講師舌大而乾、

笑曰不知、師笑曰、汝所講者紙上語耳と、傳燈錄は坡公より五十年前の著述なれば公が借用したること疑ひ無い、又葉夢得の「石林燕語」に、經筵講讀官、初入皆坐賜茶、唯當講官起就案立、講畢復就坐、賜湯而退、侍讀亦如之、蓋乾興之制也とある、〔三〕 陞楯 「史記滑稽傳」に、優旃善爲笑言、秦始皇時、置酒而天雨、陞楯者皆沾寒、優旃見而哀之、居有頃殿上上壽、優旃臨楯大呼曰、陞楯郎、汝雖長何益、幸雨立、我雖短也、幸休居、於是始皇、使陞楯者、得半相代とある、楯は陞の「テスリ」である、〔四〕 儒冠 「史記」に、沛公、諸客冠儒冠來者、輒解其冠、洩溺其中とある、何焯曰、言看人勝化、僅比儒士爲優耳と、

【詩意】 上尊を一飲して僅に早朝の寒を防ぎ、又茗盃を賜ふに因つて講舌の乾きしも霑すことを得た、

〔三〕

〔三〕

兩鶴摧頹病不言。 兩鶴摧頹病んで言はず、

年來相繼亦乘軒。 年來相繼ぎ亦軒に乗る、

誤聞九奏聊飛舞。 誤つて聞く九奏聊か飛舞、

可得褰徊爲啄吞。 得べけんや褰徊啄吞を爲すを、

【字解】 〔一〕 乘軒 左傳閔公二年の條に、衛懿公好鶴、鶴有乘軒者、注軒大夫車とある、〔二〕 飛舞 「史記扁鵲傳」に、百神游于鈞天、廣樂九奏萬舞とある、「樂書」に、師曠鼓琴一奏、有三元鶴二八、集於廊門、

再奏之、延頸而鳴、舒翼而舞とある、〔三〕 褰徊 「藝文類聚」に、白鶴古詩云、五里一反顧、六里一褰回、吾欲衛汝去、口噤不能開、吾欲衛汝去、毛羽日摧頹とある、

【詩意】 兩鶴が摧頹の形を以て病んで言ふことも出来ないが、年來相繼ぎて軒に乗する身と爲つた、誤つて非常なる身分と爲つたと思つて聊か飛舞したるが、自由に褰回し自由に啄吞することが得られ、るとは思はぬ、

〔四〕

〔四〕

微生偶脫風波地。 微生偶また脱す風波の地、

【字解】 〔一〕 鐵石 唐の皮日休

古今體詩 賦以去歲秦夏侍立邇英而秋冬之交子由相繼入侍次韻



晚歲猶存鐵石心。 晚歲猶ほ存ず鐵石の心。

定似香山老居士。 定んで似ん香山老居士、

世緣終淺道根深。 世緣終に淺く道根深し、

【自注】樂天自江州司馬除忠州刺史。旋以主客郎中知制誥。遂拜中書舍人。賦雖不  
敢自比。然謫居黃州。起知文登。召爲儀曹。遂忝侍從。出處老少。大略相似。庶幾復享  
此翁晚節閒  
適之樂焉。

て其の心を治め、道教を以て其の壽を養ふ、坡公は暗に之を慕うたのである、【三】世緣 坡公自から注す、樂天は江州司馬より、忠  
州の使史に除せられ、旋りて主客郎中知制誥を以て、遂に中書舍人に拜せらる、賦敢て自から比せずと雖も、然れども黃州の謫居より  
起ちて文登に知し、召されて儀曹と爲り、遂に侍從を忝うす、出處老少、大略相似たり、庶幾はくは復た此の翁晚節閒適の樂みを享け  
んかと、樂天の詩に始知不才者、可三以探道根と、

【詩意】 微微たる此の身は偶ま生死危険の地を脱し、幸に晚節を維持して鐵石の心を失はない、必定  
香山老居士と出處が似て居るかと思ふ、世の榮達の緣は淺いが道に得たる根は深きものがある、

【餘論】 邇英閣は侍臣講讀の所であれば、此に入つて其の光榮を歌ふべきものと思ふに、此の四首共  
に權喜の情は少しもない、何焯の評せる如く僅に衛士に優ると爲すに過ぎない、余は坡公の心事を知  
るに苦むものである、

送宋構朝散知彭州迎侍二親

宋構朝散が彭州に知となり二親を迎侍するを送る

東來誰迎使君車 東來誰か迎ふ使君の車、

知是丈人屋上烏 知る是れ丈人が屋上の烏、

丈人今年二毛初 丈人今年二毛の初、

登樓上馬不用扶 樓に登るも馬に上るも扶くるを用ひず、

使君負弩爲前驅 使君弩を負うて前驅を爲す、

蜀人不復談相如 蜀人復た相如を談せず、

老幼化服一事無 老幼化服して一事無し、

有鞭不施安用蒲 鞭有りて施せず安んぞ蒲を用ひん、

春波如天漲平湖 春波天の如く平湖漲る、

鞞紅照坐香生膚 鞞紅坐を照らし香膚に生ず、

帟鞞上壽白玉壺 帟鞞壽を上る白玉壺、

公堂登歌鳳將雛 公堂登歌す鳳將雛、

諸孫歡笑爭挽鬚 諸孫歡笑争うて鬚を挽く、

の「桃花賦序」に、余嘗慕宋廣平之  
爲相、疑其鐵腸石心、不復解吐  
媚之辭、然其梅花賦、清便富麗、得南  
朝徐庾體、殊不類其爲人也、【三】  
香山 香山寺、洛都の龍門に在る、  
白樂天、晩年自から香山居士と稱し、  
儒教を以て其の身を飾り、佛教を以

【字解】 〔一〕丈人 長老の稱、

論語に、遇丈人以杖荷蓆とあ  
る、又妻の父を稱し、又祖を稱す、  
〔二〕屋上烏 「說苑」に、武王克殷、  
召太公而問曰、將奈其士衆何、太  
公對曰、臣聞愛其人者、兼屋上之  
烏、憎其人者、惡其餘膏と、杜甫  
の詩に、丈人屋上烏、烏好人亦好とあ  
る、〔三〕二毛 「左傳僖公二十二  
年」に、君子不重傷、不禽二毛  
とある、半老の人を謂ふ、老人髮斑  
白にして二色ある、〔四〕不用扶  
杜甫の詩に、上馬不用扶、每扶  
必怒嗔とある、〔五〕負弩 弩はイ  
シユミ、機械にて石を發射する武器、  
〔六〕蜀人 「漢書司馬相如傳」に、  
相如爲中郎將、使西南夷、至蜀太  
守以下郊迎、縣令負弩先驅、蜀人



蜀人畫作西湖圖

蜀人畫作西湖圖

言爲父之榮也、〔七〕安用蒲、後漢書劉寬傳に、劉寬爲南陽太守、吏人有過、但蒲鞭罰之、示辱而已、〔八〕鞞紅、牡丹の別種、宋の待制服、紅鞞犀色、花の色、帶鞞の紅の如きを以て故に鞞紅と曰ふ、陸游の詞に、一朵鞞紅凝露とある、彭州は特に多く牡丹を種う、〔九〕鞞、鞞は底のある鞞を曰ふ、鞞はユゴテ、臂捍、弓を射る時、左の臂に著ける鞞製の具、史記淳于棼傳に、鞞鞞勝、侍酒於前除とある、〔一〇〕公堂、毛詩に、躋彼公堂とある、〔一一〕登歌、周禮に、太師帥登歌とある、〔一二〕鳳將、宋の吳兢樂府古題要解に、鳳將雛、漢世樂曲名也、晉書樂志に、吳歌十曲、一曰子夜、二曰上柱、三曰鳳將雛、〔一三〕捩、杜甫の詩、生還對童稚、似欲忘飢渴、問事幾捩髮、誰即眞噴噴とある、〔一四〕西湖、名勝志に、彭州治内有東湖、宋元符中、袁鷹有記、又有西湖、唐元和中、太守王潛蕭祐創と、

【題義】宋構が朝散大夫員外郎の官より蜀郡の彭州に知事と爲つて赴任し、而して二親を其の任地に迎へて之に侍するに送りて此の詩を呈せしものである、

【詩意】東來せる使君の車を迎へに出でしものは、使君を迎ふると同時に其の丈人をも迎ふのである、丈人も今年には已に五十を越して居る、其の人樓に登るにも馬に上るにも他人の扶けを借らぬ健康の身である、其の子たる使君は弩を負うて前驅する、今日まで蜀人は相如を光榮として談柄に供したのであるが、今日よりは相如を談ずる人は無くなる、使君は今日より良政を執るが故に蜀の老幼共に風化して訴訟などの事は無くなる、鞭有るも施用する道はない況して蒲などは猶ほ無用である、春波は溶溶として天の如く平湖に漲るを見る、牡丹の花光は坐を照らして香氣は膚に生ずるを覺ゆ、谷鞞を著ける所の武夫も壽を上りて白玉壺を捧げる、而して公堂に登歌する所の詞は鳳將雛である、諸孫

相集まはりて歡笑して丈人の白鬢を挽る、蜀人は西湖の圖を畫き作るものもある、

【餘論】此の篇も一韻にして第五字第六字仄聲なるもの多し、乃ち仄仄平なるもの四句、平平平なるもの亦四句、仄仄平なるもの亦四句、平仄平なるもの二句、古詩平仄論者は如何に之を論ずるや、

郭熙畫秋山平遠

【自注】文潞公爲三跋尾、郭熙が畫く秋山平遠

【自注】文潞公、跋尾を爲る、

玉堂畫掩春日閒

玉堂畫掩うて春日閒なり、

【字解】〔一〕郭熙、河南温の人、御院藝學と爲る、山水は李成を慕し、

中有郭熙畫春山

中に郭熙が畫ける春山有り、

長松巨木、回溪斷崖、岩岫巖絶、峯

鳴鳩乳燕初睡起

鳴鳩乳燕初めて睡より起ち、

轉秀起、雲煙變滅、曉霧の間、一時

白波青嶂非人間

白波青嶂人間にあらず、

に獨歩す、年老いて筆益す壯、自か

離離短幅開平遠

離離たる短幅平遠を開き、

ら山水畫論を著はし、山水を畫くの

漠漠疎林寄秋晚

漠漠たる疎林秋晚に寄す、

法式と爲す、〔三〕白波青嶂、杜甫

恰似江南送客時

恰も江南客を送る時に似たり、

の詩に、白波吹粉壁、青嶂插雕梁、

中流回頭望雲巘

中流に頭を回らして雲巘を望めば、

とある、〔三〕平遠、王維傳に、

伊川佚老鬢如霜

伊川佚老鬢霜の如し、

畫思入神、至山水平遠、雲勢石色、



臥看秋山思洛陽。 臥して秋山をみて洛陽を思ふ、  
 爲君紙尾作行草。 君が爲に紙尾に行草を作る、  
 炯如嵩洛浮秋光。 炯として嵩洛秋光を浮ぶるが如し、  
 我從公游如一日。 我公に從つて遊ぶ一日の如し、  
 不覺青山映黃髮。 覺えず青山黄髮に映ず、  
 爲畫龍門八節灘。 龍門の八節灘を畫かんが爲め、  
 待向伊川買泉石。 待つて伊川に向うて泉石を買はん、

進士と爲り、四朝に累任、五十餘年、  
 年九十二に至りて卒す、【五】行草  
 「法書苑」に、晉世以來、工書者、多  
 以行書名、兼眞者、謂之眞行、帶  
 草者、謂之行草とある、【六】嵩  
 洛、嵩山と洛水、【七】黄髮、前に  
 辨ぜり、【八】龍門八節灘、洛陽縣  
 に在り、唐の白樂天が致仕後、香山  
 の石樓に龍門八節灘を鑿ち、以て游  
 賞の地と爲したのである、

【詩意】玉堂の門は晝も掩うて春日清閑である、牀には掛けてある郭熙が畫ける春山の圖を、鳴鳩も  
 乳燕も初めて睡より起ち、白波も青嶂も人間世界のものではない、離離たる短幅の中にも餘裕綽綽  
 として平遠が開きてある、漠漠たる疎林を點綴するは秋晚を寓寄するのである、恰も江南に客を送り  
 し時の蕭條たる景に似て居る、而して中流に頭を回らして雲巘を望む人がある、伊川の佚老は鬢髮霜  
 の如く白く、臥して秋山を看て洛陽を思ふ情がある、乃ち君が爲に紙尾に行草を作る、其の筆墨の光  
 が炯として嵩山と洛水に秋光が浮ぶかと思はる、我は公に從つて賞游すること十年一日の如くである、  
 覺えず青山が黄髮に映する感を爲すのである、爲に龍門の八節灘の圖を畫きて、晝の成るを待つて以  
 て伊川に向ひ泉石を買はんと思つて居る、

【餘論】紀曉嵐評して曰く、用古格亦自宛轉と、四度換韻して作る、古體の定法、但し題目に秋山  
 平遠とありて、詩中には晝春山とある、然らば玉堂に掛けてある晝と、今此の題の晝とは全く別物で  
 あると思ふ、字字句句、秋景のみを敍して春山の景色は敍してない、春山の晝も善であるが、秋山は  
 猶ほ是れ善なるを嘆じて此の詩を作られしものと思ふ、それにしても一幅であるか、二幅であるか、  
 明白でない所、東坡の面目を見る、

次韻張昌言喜雨

張昌言が喜雨に次韻す

千里黃流失故居。 千里の黃流故居を失す、  
 年來赤地到青徐。 年來赤地青徐に到る、  
 遙聞爭誦十行詔。 遙に聞く争うて十行の詔を誦すと、  
 無異親巡六尺輿。 異なること無し親しく六尺の輿を巡す、  
 精貫天人一言足。 精貫けば天人一言にして足る、  
 雲興嶽瀆萬靈趨。 雲興りて嶽瀆萬靈趨る、  
 愛君誰似元和老。 君を愛す誰か似ん元和の老に、

古今體詩 次韻張昌言喜雨

【字解】【一】黃流、韓退之の詩  
 に、黃流渾渾とある、【二】赤地、  
 旱天にて地に青色の滅するを言ふ、  
 「說苑」に、晉平公時、赤地千里とあ  
 る、後漢臧宮傳に、人畜疫死、旱  
 蝗赤地とある、【三】十行詔、元祐  
 二年四月辛卯詔、冬夏旱暵、海内被  
 災者廣、避殿減膳、責躬思過、癸  
 卯雨、御殿復膳とある、【四】親  
 巡、「史記秦始皇紀」に、刻石泰山、



賀雨詩成即諫書

とある、【六】愛君 君主を曰ふ、【七】元和老 白樂天が元稹に與ふる書に、聞僕賀雨詩、衆口籍籍、以爲非宜と、【八】諫書「漢王式傳」に、臣以三百五篇諫、是以無諫書とある、

辭曰、親巡遠方とある、【五】精貫「文選馬汧督諫」に、精貫白日

【詩意】 權喜の雨が下るや、千里の黃流渾渾として何處が何處であるか分らなくなる、年來赤地である土地が青州徐州の境まで通到したとか思はれる、遙に聞く衆人が十行の詔書を謹誦することを、人民が詔書を謹誦するは六尺の鳳輿に乗つて親巡し玉ふと同じことである、至精一貫する語は一言にても天も共に満足する、天が満足した結果雲は興りて雨は降り嶽にも瀆にも萬靈が趨る、君主に忠愛なる元和の古老に似て居る者は誰であるや、賀雨の詩成るは詩そのまゝが諫書である、

【餘論】 紀曉嵐は評して曰く、亦是應酬詩、而結語自有三斤兩と、余案するに前後二聯共に數字を以て對を取る、坡公を以て宗とする人には法として取つてよい、坡公を宗とせざる人から論ずれば、工なる詩とは言へないである、

章質夫寄惠崔徽眞

章質夫、崔徽が眞を寄惠せらる

玉釵半脫雲垂耳

玉釵半ば脱して雲耳に垂る、

【字解】 【二】玉釵「洞冥記」に、

亭亭芙蓉在秋水

亭亭たる芙蓉秋水に在り、

元鼎元年、起招仙閣、有二神女、留一玉釵、以與帝、帝以賜趙婕妤

當時薄命一酸辛

當時薄命一酸辛、

千古華堂奉君子

千古華堂君子に奉せらる、

水邊何處無麗人

水邊何の處にか麗人無からん、

近前試看丞相嗔

近前試みに看る丞相が嗔るを、

不如丹青不解語

如かず丹青語を解せざるに、

世間言語原非眞

世間の言語は原眞にあらず、

知君被惱更愁絶

知る君が惱まされ更に愁絶するを、

卷贈老夫驚老拙

卷いて老夫に贈り老拙を驚かす、

爲君援筆賦梅花

君が爲に筆を援つて梅花を賦す、

未害廣平心似鐵

未だ害せず廣平が心鐵に似たるを、

人行と題する詩に、長安水邊多麗人とある、【五】丞相嗔 杜甫の詩に、憤莫近前丞相嗔、

有千葉白蓮、數枝盛開、帝與貴戚宴賞、帝指貴妃、示左右曰、何如我解語花とある、【七】賦梅花 前に出せる邇英詩にて辨

【題義】 章質夫が崔徽と稱せる女人の圖を寄惠せられたるを謝して作れる詩である、

【詩意】 玉釵は頭髮より半は脱げて、雲髪が殆んど耳に垂れんとする狀である、崔徽の容姿は亭亭たる



芙蓉が秋水を出るが如きである、生前の薄命は酸辛に過ぎざるも、死後は華堂に其の眞を掛けられて君子に奉せらるる幸福がある、水邊は何の處でも麗人が多く行く、但し皆主人を有する麗人であるから手を出せば丞相に嘖らるる、それよりは畫中に在つて沈黙して居る美人が可い、且つ世間の言語は多くは虚欺にて眞言ではない、君も其の言の虚欺に惱されたり愁絶せられたりする、今は此の畫卷を老夫に贈られて老拙を驚かさされたるが、老夫が報ゆるものは他に無い、筆を援つて唯梅花賦を作るのみである、廣平が梅花を賦して其の鐵石の心腸を少しも紊さなかつたのである、

【餘論】紀曰く、小題以輕淺、還之最合一大做、便不格と、余案するに小題大做は小家の爲す所、大家は決して小題大做を爲さざるのである、此の詩を以て小題大做と爲すは當らずと思はる、

蘇東坡詩集 卷二十九

古今體詩 四十七首

和穆父新涼

穆父の新涼を和す

家居妻兒號。出仕猿鶴怨。  
 未能逐什一。安敢搏九萬。  
 常恐樛櫟身。坐纏冠蓋蔓。  
 受恩如負債。粗報乃焚券。  
 但知眠牛衣。寧免刺虎圈。  
 清風來既雨。新稻香可飯。  
 紫蟹應已肥。白酒誰能勸。  
 君今崔蔡手。政比趙張健。

家居すれば妻兒號び、出仕すれば猿鶴怨む、  
 未だ什が一を逐ふ能はず、安んぞ敢て九萬を搏たんや、  
 常に恐る樛櫟の身、坐して纏ふ冠蓋の蔓、  
 恩を受くるは債を負ふが如く、粗報ゆれば乃ち券を焚く、  
 但牛衣に眠るを知るも、寧ろ免れんや虎圈を刺すを、  
 清風既雨に來る、新稻香飯すべし、  
 紫蟹應に已に肥ゆべし、白酒誰か能く勸めん、  
 君今崔蔡の手、政は趙張が健に比す、



三公行可致。一語先自獻。  
幸推江湖心。適我魚鳥願。

三公行くゆく致すべし、一語先づ自ら獻す、  
幸に江湖の心を推して、我が魚鳥の願に適はしめん、

【字解】 〔一〕 孟子に、夏后氏五十而貢、殷人七十而助、周人百畝而徹、其實皆什一也、言古之田賦、皆十分中取其一也、又「史記」に、范蠡自謂陶朱公、候時轉物、逐什一之利、言貿易之利、得十分之一也、又「南史」に、劉伯龍、少貧、及至尚書左丞少府武陵太守、貧窶尤甚、常在家慨然、召左右、將營什一之方、忽見一鬼、在旁大笑、伯龍嘆曰、貧窮固有命、乃復爲鬼所笑也、遂止とある、然らば什一の字義は利に就いて言ふのみなるを知る、〔二〕 九萬、莊子逍遙游に、擗扶搖而上者九萬里とある、〔三〕 樛櫟、莊子逍遙游に、惠子謂莊子曰、吾有大樹、人謂之樛、其大本擁腫、而不中繩墨、其小枝卷曲、而不中規矩、又「人間世篇」に、匠石之齊、至於曲轅、見櫟社樹、其大蔽牛、匠伯不顧、曰散木也、〔四〕 焚券、史記孟嘗君傳に、問左右、何人可使收債於薛者、又馮驩乃持券、如前合之、能與息者與爲期、貧不能與息者、取其券而燒之、〔五〕 眠牛衣、「前漢書」王章疾病無被、臥牛衣中、與妻決涕泣、其妻呵怒之曰、仲卿京師尊貴、在朝廷、人誰踰仲卿者、今疾病困厄、不自激昂、乃反涕泣、何鄙也、後章仕官歷京兆、欲上封事、妻止之曰、獨不念牛衣中涕泣時邪、書上果下獄死、妻子徙合浦、采珠致產數百萬とある、〔六〕 刺虎圖、「漢書張釋之傳」に、上登虎園、禽獸食所、園言、問上林尉禽獸簿、十餘問、尉左右視盡不能對、虎園畜夫、從旁代尉對とある、〔七〕 既雨、「易」に、既雨既處とある、〔八〕 崔蔡手、「舊唐書柳宗元傳」に、韓愈評其文曰、雄深雅健、似司馬子長、崔蔡不足多也と、後漢の崔瑗と蔡邕との二人を言ふ、〔九〕 趙張健、漢の張敞と趙廣との二人を言ふ、二人共に京兆の尹と爲る、穆父は開封の尹である、

【題義】 穆父が秋日の新涼に遇うて作る詩を和したのである、公は翰林學士の職に在る元祐二年丁卯の秋である、

【詩意】 家居は道を修するに善なるも妻兒は號ばざるを得ない、出仕は道を修するに疎となる猿鶴は怨む所以である、未だ家計に於て什が一をも逐ふの利は求むることは出来ない、況して仙人と爲つて九萬里を擗つことも出来ない、常に恐れて恥づるは此の樛櫟の身である、樛櫟の身でありながら坐して纏ふ冠蓋蔓の身と成る、是に於てか君恩を受くるは債を負はざる感が起る、粗報すれば乃ち券を焚き負債償却済と心得たきものである、王章の如く但牛衣に眠るを知つて、寧ろ免れんや虎園を刺すことを、清風は既雨を來すが故に新涼である、新秋に刈り取る稻は飯に供すべきに足る、紫蟹も秋風の爲め應に肥えてある、白酒誰か能く勸むるであらう、君は今日の崔蔡の手を具する人である、政治を執る手腕も趙張の健に劣らぬ、官等も愈よ進んで三公の位に登ると思ふ、此の一語を先づ自ら獻じて置く、幸に江湖に悠遊せんと思ふ我が心を推して、我をして魚鳥と親むの願に適ふ様にして呉れ玉へ、

書晁補之所藏與可畫竹三首

晁補之が藏する所の與可が畫竹に書す 三首

與可畫竹時。見竹不見人。  
豈獨不見人。嗒然遺其身。  
其身與竹化。無窮出清新。

與可竹を畫く時、竹を見て人を見ず、  
豈獨り人を見ざるのみならん、嗒然として其の身を遺る、  
其の身竹と化す、無窮に清新を出す、



莊周世無有。誰知此疑神。

莊周世に有ること無し、誰か知らん此の疑神を、

【字解】 〔一〕 嗒然。「莊子齊物篇」に、嗒然似失其耦とある、心に懐ふことを忘るる貌、〔二〕 疑神。「莊子達生篇」に、用志不レ分、乃疑於神とある、翁方綱云、用志不レ分、乃疑於神之語、本田於列子、今「列子」皆作疑、今本莊子、作「疑誤矣」と、紀曉嵐云、「莊子」に、用志不レ紛、乃疑於神、本作「疑」、後人乃訛沿爲「疑也」、方綱又云、乃疑於神者、謂「直與神一般」耳、非謂「見疑之疑」也と、

【題義】 晁補之が所藏にて文與可が畫く所の竹を讚したるものである、

【詩意】 文與可が竹を畫く時の態度は如何である、一意専心に竹を見るのみにて、旁人あるを見ない、人を見ないのみならず、嗒然として自分が自分を忘るる、竹は即我で我は即竹である、竹の外に天地間一物も無い、是に於てか無窮の清新を描寫する、今の世に莊周は見ることを得ざる人であるから、誰か此の畫竹が疑神の境に入るを知らんや、

〔一〕

〔二〕

若人今己無。此竹寧復有。

若き人今己に無し、此の竹寧ぞ復た有らん、

那將春蚓筆。畫作風中柳。

那ぞ春蚓の筆を將て、畫き作る風中の柳、

君看斷崖上。瘦節蛟蛇走。

君看よ斷崖の上、瘦節蛟蛇走る、

何時此霜竿。復入江湖手。

何れの時か此の霜竿、復た江湖の手に入る、

【字解】 〔一〕 春蚓。文字細曲して、筆力無きを謂ふ、「晉書王羲之傳」に、子雲近世、擅名江表、僅得成書、無丈夫之氣、行行如「蔡邕」春蚓とある、〔二〕 蛟蛇。「義之傳」に、字字如「秋蛇」とある、秋蛇は春蚓と同じく、力弱き字を謂ふ、蛟蛇はミヅチ、強力を謂ふ、〔三〕 江湖手。杜牧之の詩に、惆悵江湖釣竿手、卻遮西日向長安とある、

【詩意】 此の如き名手は今世に無い、此の如き竹も復た有る筈はない、凡工の多くは春蚓の如き弱筆を將て、虎を描きて猫と爲るの類、竹を描きて風中の柳と爲る、君よ別に斷崖の上を見玉へ、瘦節稜稜として蛟蛇の走る勢である、何の時か知らざるが、此の霜竿が眞實の竹と爲つて江湖釣者の手に入るであらうぞ、

〔三〕

〔二〕

晁子拙生事。舉家聞食粥。

晁子生事に拙、家を擧げ粥を食ふと聞く、

朝來又絶倒。諛墓得霜竹。

朝來又絶倒、諛墓霜竹を得たり、

可憐先生盤。朝日照苜蓿。

可憐む可し先生の盤、朝日照苜蓿を照らす、

吾詩固云爾。可使食無肉。

吾詩固より爾か云ふ、食に肉無から使むべし、

【自注】 吾舊詩云。可使食無肉。不可使居無竹。

【字解】 〔一〕 食粥。顔魯公與李太白「乞米帖」云、拙於生事、舉家食粥來已數月とある、〔二〕 絶倒。「晉書衛玠傳」に、每聞玠言、輒歎息絶倒とある、又「五代史晉家人傳」に、左右皆失笑、帝亦自絶倒とある、笑ふにも哀むにも、其の甚だしきを謂ふ、〔三〕 古今體詩 晁補之所藏與可畫竹三首



諛墓「唐書韓愈傳」に、劉又持愈金數斤去曰、此諛墓中人得耳、不若與劉君爲壽とある、  
【四】苜蓿 王註厚曰、薛令之、爲東宮侍讀、官僚閒澹、以詩自悼云、朝日上團團、照見先生盤、盤中無所有、苜蓿長欄干と、  
【五】無肉 公の自注の如く、舊詩に云ふ、可レ使食無肉、不レ可レ使居無竹と、

【詩意】 晁子は平生活計の事に拙である、是の故に全家皆粥を食ふのである、然るに朝來人をして絶倒せしむる事件は何である、それは外ではない他人の墓碑文を作りて其の謝金を得、其の謝金を以て此の畫竹を購入せることである、先生の生活は簡疎極まるもので、苜蓿に類する惡食である、先生のみ然るのではない、吾も曾て詩を作つて云うた、食には肉無きも一日として竹は無かるべからずと、

【餘論】 紀は第一首を評して、大有三手與筆化之妙、第二首を評して、忽爾宕開、正以不規規、收繳爲妙、第三首を評して、先有末二句、乃有三前六句、隨手牽絙、無不入妙と、

戲用晁補之韻

戲れに晁補之が韻を用ふ

昔我嘗陪醉翁醉

昔我醉翁に陪して醉ふ、

今君但吟詩老詩

今君但吟す詩老の詩、

清詩咀嚼那得飽

清詩咀嚼して那ぞ飽くを得ん、

瘦竹瀟灑令人飢

瘦竹瀟灑として人をして飢ゑしむ、

【字解】

【一】醉翁 歐陽永叔を言ふ、

【二】詩老 梅聖俞を言ふ、

【三】風風 「莊子秋水篇」に、鷓鴣非梧桐不レ止、非練實不レ食、練實乃竹實也、

【四】布穀 前に辨べり、

試問鳳凰飢食竹

試みに問ふ鳳凰飢ゑて竹を食ふは、

何如駑馬肥苜蓿

何如ぞや駑馬の苜蓿に肥ゆると、

知君忍飢空誦詩

知る君が飢を忍んで空しく詩を誦し、

口頰瀾翻如布穀

口頰瀾翻して布穀の如きを、

【詩意】 昔は我醉翁に隨陪して酔うた、今は君但詩老の詩を吟ずる、詩老の清詩は咀嚼して飽くことを知らない、瘦竹は瀟灑出塵の態であるが、人を肥えしむる力は無い、試みに鳳凰に問うて見る君は飢ゑて竹を食ふと聞くが、駑馬が苜蓿を食うて肥えて居ると何如が可いか、君が今飢を忍んで詩を誦して、口頰瀾を翻して布穀の如きは戲れざるを得ない、

【餘論】 游戲の文字、坡公の本色にはあらず、紀も評して、此調終俗と曰ふ、醉翁醉、詩老詩など滑調派の喜ぶ所であるが、大雅の道には背くものである、

書皇親畫扇

皇親の畫扇に書す

十年江海寄浮沈

十年江海浮沈を寄す、

夢繞江南黃葦林

夢は繞る江南の黃葦林、



誰謂風流貴公子。誰か謂ふ風流貴公子、  
筆端還有五湖心。筆端還た五湖の心ありと、

【題義】皇親は詳かならざるが、風流貴公子の語に由つて之を觀れば、貴戚の人であると思はる、其の扇に畫きたる圖意にて此の詩を書せるものである、

【詩意】我は十年も世上の江海に、或は沈み或は浮ぶものである、夢は常に江南の黃葦林を慕ひ繞るものである、誰か謂ふや風流の貴公子、心は塵外に在ることを知る、是の故に筆端に表はるる所、五湖悠悠たる圖である、

書李世南所畫秋景二首

李世南畫く所の秋景に書す 二首

野水參差落漲痕。野水參差として漲痕落つ、

疎林敲倒出霜根。疎林敲倒して霜根出づ、

扁舟一櫂歸何處。扁舟一櫂何の處に歸る、

家在江南黃葉邨。家は江南黃葉の邨に在り、

【題義】李世南字は唐臣、安肅の人、明經に及第し、大理寺丞に終る、山水寒林に長ず、今其の秋景

【字解】(一) 參差 不齊の貌、詩經に、參差荇菜とある、(二) 一 櫂 一棹に作る木あり、

山水の讚を作つたのである、

【詩意】野水は東西南北參差として、何も漲痕が落ちてある、其の上の疎林は敲倒の形を爲して霜根を露出する、扁舟は舟人一櫂して何の處に歸るやを知らず、察するに江南黃葉邨に歸るのであらう、其の方向に舟は進みつつある、

(一)

(二)

人間斤斧日創夷。人間の斤斧日に創夷、

誰見龍蛇百尺姿。誰か見る龍蛇百尺の姿、

不是溪山成獨往。是れ溪山獨往を成すにあらずんば、

何人解作挂猿枝。何人が解作せん挂猿枝、

【詩意】斤斧の入らざる山林は創夷無きも、人間斤斧の入る山林は山林盡く創夷がある、松樹の如きも龍蛇百尺の姿は見ることとは出来ない、唯溪山の深き處、獨往する者でなければ、猿猴が樹枝に挂つて居ることなど解作する者はない、

【餘論】紀曉嵐は評して、意境殊高と曰ふ、我邦の齋藤拙堂は前首を評して、風流蘊藉、不類坡翁他作と曰ふ、眞に唐人に逼るかと思ふ、扁舟の字、或は浩歌に作る、一舟子、頤を張り柁を鼓する

【字解】(一) 創夷 瘡痕と同じ、(二) 挂猿枝 太白の詩に、山光搖積雪、猿影挂寒枝とある、



の態を作す、扁舟の圖にあらざるを、雕本盡く扁舟に作る、浩歌が是か、扁舟が是か、坡公に問はなくては分らぬのである、

書鄴陵王主簿所畫折枝二首 鄴陵王主簿が畫く所の折枝に書す 二首

論畫以形似見與兒童鄰 畫を論ずるに形似を以てするは、見兒童と鄰る、

賦詩必此詩定非知詩人 詩を賦し此の詩を必とするは、定んで詩を知る人にあらず、

詩畫本一律天工與清新 詩畫は本一律、天工と清新と、

邊鸞雀寫生趙昌花傳神 邊鸞の雀は寫生、趙昌の花は傳神、

何如此兩幅疎澹含精勻 何如ぞや此の兩幅、疎澹にして精勻を含むに、

誰言一點紅解寄無邊春 誰か言ふ一點の紅、無邊の春に寄するを解すと、

【字解】 〔一〕形似「文心雕龍」に、文貴形似とある、〔二〕清新 杜甫の詩に、清新庾開府とある、〔三〕邊鸞 唐の邊鸞は京兆の人、右衛長史と爲る、貞元中、新羅國、孔雀を進む、善舞す、鸞を召して之を寫す、娑婆の態を得、節奏に應ずるが若し、花鳥に長じ、折枝草木、蜂蝶雀蟬、皆妙品に入る、〔四〕趙昌 宋の趙昌字は昌之、劍南の人、「宣和畫譜」に曰ふ、寫生逼真、直與花傳神也とある、

【題義】 鄴陵王主簿が畫く所の花鳥折枝の讚を作る、折枝は字の如く一兩朶の花枝を寫生せるもの、

【詩意】 畫の巧拙を論ずるに若し形似を主として論ずる者は、其の見識は兒童の見識と大差はない、又詩を賦して此の詩でなければならぬと論ずる者あらば、此の人は眞に詩を知る人ではない、極論すれば詩は有聲畫、畫は無聲詩即ち一律である、而して花鳥に於て天工と稱せられ、清新と嘆せられしものは、唐の邊鸞と我が朝の趙昌の二人である、邊鸞は形似に妙を得、趙昌は傳神に工を得、此の邊と趙との二人を以て今主簿が畫く所の兩幅と比較して優劣は何如である、疎も澹も共に精勻を含む、誰か言ふや此の一點の紅、天地無邊の春を此の中に解寄せしめたるものと、

〔一〕

〔二〕

瘦竹如幽人幽花如處女 瘦竹は幽人の如く、幽花は處女の如し、

低昂枝上雀搖蕩花間雨 低昂す枝上の雀、搖蕩す花間の雨、

雙翎決將起衆葉紛自舉 雙翎決として將に起たんとす、衆葉紛として自ら舉がる、

可憐采花蜂清蜜寄兩股 可憐なり采花の蜂、清蜜兩股に寄す、

若人富天巧春色入毫楮 若き人天巧に富む、春色毫楮に入る、

懸知君能詩寄聲求妙語 懸に知る君が能詩、寄聲妙語を求む、

【詩意】 瘦竹の瀟灑たるは幽人の如くである、幽花の窈窕たるは處女の如くである、枝上の雀は低昂



して飛ぶ、花間の雨は搖蕩として降る、一面には雙翎が決然として起たんとする状である、一面には衆葉が紛として擧がる態である、可憐なる所の蜂は花蕊を采つて、其の清蜜を兩股に引き寄せる姿を爲す、此の若き人は本質が天巧に富んで居る、是の故に宇宙の春色を筆端や楮上に引入する、懸に聞知する君は能詩であると、然らば我が寄聲に對し、我は君の妙語を求めない、

【餘論】前首の論畫以下二十字は、詩家畫家の爲に一大痛棒を下したるもの、紀曉嵐は、識入ニ深微、不嫌ニ説理一と、又後首を評して、忽回ニ應前首一作章法、可謂法之所向、無レ不レ如志と、眞に是れ坡公集中、上等妙覺の位に登るものである、

昨見韓丞相言王定國今日玉堂獨坐有懷其人

昨韓丞相を見る、言ふ王定國今日玉堂に獨坐すと、其の人を懷ふあり

畫臥玉堂上。微風舉輕紈。畫玉堂の上に臥す、微風輕紈を擧ぐ、

銅餅下碧井。百尺鳴飛瀾。銅餅碧井に下し、百尺飛瀾鳴く、

俛仰清夢餘。愛此一掬寒。俛仰清夢の餘、愛す此の一掬の寒きを、

似予平生友。苦語涼肺肝。予が平生の友に似す、苦語肺肝を涼しうす、

秀眉玉兩頰。嬌嬌如翔鸞。秀眉玉兩頰、嬌嬌として翔鸞の如し、

置之江淮交。清詩洗江湍。之を江淮の交に置き、清詩江湍を洗はん、

紅鱗對白酒。信美非所安。紅鱗白酒に對し、信美安んずる所にあらず、

丞相功業成。還家酒杯寬。丞相功業成る、家に還りて酒杯寬かなり、

人間有此客。折簡呼不難。人間此の客あり、折簡呼ぶ難からず、

相將扣東閣。起舞盡餘歡。相將ゐて東閣を扣き、起舞して餘歡を盡さん、

【字解】「一」輕紈 春夏の間は皆輕紈を著す、「二」苦語 韓退之の詩に、苦語感我耳とある、劉孝綽の文に、苦語輒言、隨方弘訓とある、苦言と略ぼ同じきも、諫言とは違ふ、何となく讀んで悲觀的に流るるを言ふ、「三」秀眉 「後漢書鄭元傳」に、秀眉明目玉頰とある、「四」江淮 長江と淮水、「左傳」に、吳越邗溝通江淮とある、「五」紅鱗 白樂天の詩は、膾炙落紅鱗とある、「六」功業成 韓絳は元祐二年七月致仕す、「七」酒杯寬 杜甫の詩に、誰家數去酒杯寬とある、

【題義】昨日韓丞相に謁見したら丞相の言はるるには王定國が一人にて今日玉堂に獨坐すと、乃ち其の人を懷うて作る、

【詩意】白晝に玉堂の公署に臥す、微風吹き來りて輕紈を擧ぐ、夢中に聞くらんか銅餅が碧井に下ると、同時に百尺の飛瀾が鳴く、俛仰の間に清夢より覺めて、此の冷冷一掬の寒きを愛受する、予が平生の友に似すの苦語は肺肝を涼しうするの概がある、懷ふに定國其の人は秀眉なる上に兩頰は玉の如く、嬌嬌として翔鸞の如くである、此の人を江淮の中間に置き、此の人の清詩を以て他の俗詩を一



洗せんことを思ふ、紅鱗と白酒、物は完全信美であるが玉堂の上は安心の所ではない、幸に丞相は國家に對して功業は成就せらる、家に還りて酒杯を寛かに把ることが出来る、人間の世に於て此の同調の客がある、折簡を飛ばして呼ぶことは難事ではない、王君よ冀ふ君と相將りて東閣を扣き、三人にて起舞以て餘歡を盡さんと思ふ、

【餘論】 紀曉嵐曰く、入得別致、却極自然と、評語大に味あるを知る、

和張耒高麗松扇

張耒が高麗松扇を和す

可憐堂堂十八公。

可憐堂堂たる十八公、

老死不入光明宮。

老死して光明宮に入らず、

萬牛不來難自獻。

萬牛來らずんば自ら獻じ難し、

裁作團團手中扇。

裁して作す團團手中の扇、

屈身蒙垢君一洗。

身を屈し垢を蒙る君一洗す、

挂名君家詩集裏。

名を挂く君が家詩集の裏、

猶勝漢宮悲婕妤。

猶ほ勝る漢宮の悲婕妤、

【字解】 一 十八公 漢の丁固

は松樹が腹上に生ずと夢む、人に謂つて曰く松の字は十八公なり、後十八年吾公と爲るか、卒に夢の如く公と爲る、二 光明宮 漢の武帝太初四年起つ所、三 萬牛 杜甫の古柏行に、大廈如傾要梁棟、萬牛回首邱山重とある、四 蒙垢 吳越春秋に、吳胥蒙垢受恥とある、五 悲婕妤 漢の成帝、初めは婕妤

網蟲不見乘鸞子。

網蟲見ず乘鸞の子、

素、鮮潔如霜雪、裁成合歡扇、團團似明月、出入君懷袖、動搖微風發、常恐秋節至、涼颺奪炎熱、棄捐篋笥中、恩情中道絕、南北朝の江文通の詩に、執扇如圓月、出自機中素、畫作秦王女、乘鸞向煙霧とある、唐の劉禹錫が扇歌に、秋風入庭樹、從此不三見、上有乘鸞女、蒼蒼網蟲偏とある、

を寵し、後に寵を趙飛燕に奪はる、秋扇詩を作り自から悲む、新製齊純

【題義】

張耒字は文潛、楚州淮陰の人、蘇子由に從つて學び、蘇門四學士の一人と爲る、國史院檢討を経て著作郎と爲つて卒す、高麗松扇は徐兢の高麗圖經に云ふ、取三松之柔條、細削成縷、搥壓成

綫而後織成、上有花紋、不減穿藤之巧とある、王雲の「雞林志」に、高麗松扇、揭三松膚柔軟者、緝成、文如櫻とある、或は云ふ水柳木の皮にて松にはあらずと、今孰れとも斷ずる事は出来ぬ、公の詩は松の意を以て作らる、

【詩意】

可憐なるは堂堂たる十八公である、死るるまで老いて以て明光宮の建築材料とはならない、萬牛も挽かざれば自ら獻することはない、所が今裁して團團たる手中の扇と成る、身を屈し垢を蒙ることは君一洗し去る、唯高麗扇の名を君が家の詩集裏に挂く、猶ほ勝る漢宮に婕妤が悲んで書する秋扇に、又網蟲偏と歌はれたる乘鸞子にも勝るであらう、

【餘論】

紀曉嵐曰く、短而不促、意境甚闊と、次公曰く、先生使事、曲折如此と、今「春風堂隨筆」を譯記して見る、今世用ふる所の摺疊扇、亦聚頭扇と名づく、吾郷張東海先生、東夷より貢す



るものと爲す、永樂(明の年號)間、始めて中國に盛行す、予南宋以來の詩詞を見るに、聚扇を詠する者頗る多し、予收得せる楊妹子寫す所の絹扇面、摺痕尙ほ存す、東坡謂ふ、高麗白松扇、之を展ぶれば廣さ尺餘、之を合すれば止だ兩指許、正に今の摺扇、蓋し北宋より已に之れ有り、倭人亦製して泥金面烏竹骨を爲る、貢に充つ、東夷より出づ、果して然り、格致鏡原卷五十八に據る、

故李誠之待制六丈挽詞

故の李誠之待制六丈が挽詞

青青一寸松。中有梁棟姿。  
天驥墮地走。萬里端可期。  
世無阿房宮。下建五丈旂。  
又無穆天子。西征燕瑤池。  
才大古難用。老死亦其宜。  
丈夫恐不免。豈患莫己知。  
公如松與驥。少小稱偉奇。  
俯仰自廊廟。笑談無羌夷。

清朝竟不用。白首仍憂時。  
願斬橫行將。請烹乾沒兒。  
言雖不見省。坐折姦雄窺。  
嗟我去公久。江湖生白髭。  
歸來耆舊盡。零落存者誰。  
比公嵇中散。龍性不可羈。  
擬公李北海。慷慨多雄詞。  
淒涼五君詠。沈痛八哀詩。  
邪正久乃明。人皆屬公思。  
九原不可作。千古有餘悲。

清朝竟に用ひず、白首仍ほ時を憂ふ、  
橫行の將を斬らんと願ふ、乾沒の兒を烹んと請ふ、  
言省せられずと雖も、坐して折く姦雄の窺を、  
嗟我公を去ること久し、江湖白髭を生ず、  
歸來耆舊盡き、零落存する者は誰ぞ、  
公を嵇中散に比す、龍性は羈すべからず、  
公を李北海に擬す、慷慨雄詞多し、  
淒涼五君の詠、沈痛八哀の詩、  
邪正久しく乃ち明か、人皆公に思を屬す、  
九原作すべからず、千古餘悲あり、

【字解】

【一】五丈旂、「史記」に、秦始皇、營作朝宮渭南上林苑中、先作前殿阿房、東西五百步、南北六十丈、上可坐萬人、下可建五丈旂、以其作宮阿房故、天下謂之阿房宮とある、  
【二】穆天子、「列子周穆王篇第三」に、穆王肆意遠遊、命駕八駿之乘、別、日升昆侖之邱、以觀黃帝之宮、而封之、以詔後世、遂賓於西王母、觴於瑤池之上、一日行萬里とある、  
【三】豈患、「論語學而篇」に、不患人之不己知、患不知人とある、  
【四】偉奇、韓退之の詩、少小倚奇偉、平生足悲吒とある、  
【五】橫行將、「前漢書樊噲傳」に、願得十萬衆、橫行匈奴中、季布曰噲可斬也、夫以高帝兵三十萬餘、困於平城、噲時亦在其中、今噲奈何、以二十



萬衆、横ニ行匈奴中ニ哉とある、【六】 乾沒兒 「漢卜式傳」に、武帝時歲旱、上令百官求雨、卜式曰、縣官當食粗衣稅而已、今宏羊令吏坐市列肆、販物求利、烹羊烹犬乃雨とある、又「漢張湯傳」に、始爲小吏乾沒、與長安富賈、田甲、魚翁叔之屬、交私とある、【七】 不見省 「後漢書虞翻傳」に、寧陽主簿上書曰、臣章百上、終不見省とある、【八】 魯中散 魯康は三國魏の譙郡の人、字は叔夜、丰姿俊逸、醒むるときは孤松の獨秀するが如く、醉ふときは玉山の頽れんとするが如し、尊氣養性、養生篇を著す、中散大夫に拜せらるるも受けず、常に彈琴以て自から樂む、景元中、司馬昭の殺す所と爲る、世多く晉人と稱するは誤る、【九】 龍性 顏延年、魯を詠じて曰く、鸞翻有時鍛、龍性誰能馴とある、【一〇】 李北海 李邕は唐の江都の人、玄宗の時、北海の太守と爲る、善書にして才藝衆に超ゆ、名を天下に擅にす、人と爲り剛毅激烈、盧藏用、之に語つて曰く、君は千將莫邪の如く、與に鋒を争ひ難し、然れども終に缺折を虞るのみ、後李林甫の爲め殺さる、【一一】 五君詠 顏延年が阮籍と魯康と劉伶と向秀とを詠じたる詩を指す、【一二】 八哀詩 杜甫が王思禮と李光弼と嚴武と汝陽王璣と李邕と蘇源明と鄭虔と張九齡の八人を哀める詩を指す、

【題義】 李師中字は誠之、應天府楚邱の人、進士に擧げらる、龐籍其の才を薦む、屢ば直史館に遷り、鳳翔府の知と爲り、天章閣待制と爲り、河東轉運使と爲り、年六十六を以て卒す、人と爲り落落氣節あり、然れども好んで大言を爲し、時に容れられずと云ふ、坡公之を挽して此の詩を作る、

【詩意】 青青たる一寸の松は稚小なるも、其の質は已に梁棟と爲る姿を備へて居る、又天驥は此の地に墮ちたとき直ちに走る、生長せば萬里の端も期待すべきである、世に阿房宮と云ふもの無きときは、下に五丈も高き旂を建つる事も出来ない、又穆天子と云ふもの無きときは、西征して瑤池に燕する事も出来ない、古來より言ふ才の大なるものは用を爲し難しと、老に至るまで不遇に死するも亦宜なりである、丈夫たるもの恐らくは此の不遇を免るる者は少い、併しながら人の己を知る莫きを思へては

不可、乃ち公を譬へて見れば松と天驥との如くである、公は少小より偉奇と稱せられた、是を以て廟廟の上に俯仰する身となつたのである、談笑の中に邊境を治めた事がある、然るに清朝は竟に重用しない、公は白首と爲つて仍ほ時世を憂ふ、其の氣概は横行の軍將をも斬らんと願ひ、乾沒の惡兒も烹んと請ふのである、其の言は省せられずに終つたが、公は坐ながら姦雄の窺を折くの人である、我は公を去ること後輩であるが、江湖に流浪して居る間に白髭を生ずるを見る、既にして歸り來れば耆舊は多く盡きて、零落の餘存するものは誰である、公を古の嵇中散に比較して居る、其の龍性は人間の羈すべきではない、又公を李北海に比較して居る、其の雄詞は皆慷慨極まるものである、公を挽して更に思ふ彼の五君の詠は淒涼である、彼の八哀の詩は沈痛である、邪正の區別は已に明白である、世人は皆公に正義を托するの思を將て居る、如何せん九泉の下作することが出来ない、千古に至るまで餘悲がある、

【餘論】 紀曉嵐は評して、香山門徑と曰ふ、頗る遠見と思はる、「長慶集」に七古として八駿圖を詠する詩あり、次に又澗底松と題する七古あり、今青青の松を出し、次に天驥を以て之を承く、白氏より得來れる思構なるは明白である、松を出せるを以て阿房を描き、天驥を出せるを以て穆天子を描き、隔句に對を取る、而して字字句句、李に對する情思を盡す、李は偉才を抱きながら、或は罷められ、或は貶せらるるの不幸を哀むの餘、此に至れるものと思ふ、余は香山門徑と言はんより、寧ろ香山神境と評したきものである、



次韻孔常父送張天覺河東提刑

孔常父が張天覺河東提刑を送るに次韻す

送君應典鷓鴣裘。君を送りて應に典すべし鷓鴣裘、

憑仗千鍾洗別愁。千鍾に憑仗して別愁を洗ふ、

脫帽風流餘長史。帽を脱するの風流長史を餘し、

埋輪家世本留侯。輪を埋むるの家世本留侯、

子河駿馬方爭出。子河の駿馬方に争ひ出づ、

昭義疲兵得少休。昭義の疲兵少しく休ふを得、

定向秋山得佳句。定んで秋山に向つて佳句を得ん、

故關黃葉滿行轡。故關の黃葉行轡に滿つ、

【字解】(一)鷓鴣。鷓鴣とも書

く、西方の神鳥、雁に似たる鳥、羽

毛を以て裘を作る、「西京雜記」に、

司馬相如、初與卓文君還成都、居

貧愁慙、以所著鷓鴣裘、就市人楊

昌、買酒、與文君、爲歡とある、

李白の詩に、投筋解鷓鴣、換酒

醉北堂とある、(二)憑仗。仗は

劍戟の總名に屬すると、憑仗と二様

に使用する、北周の庾信賀妻公碑に、

少習邊將、憑仗智勇とある、唐の

鮑溶の詩に、更宜明月含芳露、憑仗

蕭郎、夜賞春とある、(三)脫帽。

杜子美の飲中八仙歌に、張旭三杯草

聖傳、脫帽露頂王公前とある、自

注に、君草書を喜び而して工ならず、

故に此を以て戲と爲すと、(四)埋輪。

「後漢張綱傳」に、健爲武陽人、順帝漢安元年、選遣八使、徇行風俗、皆者備知名、多歷顯位、

唯綱年少、官次最微、餘人受命之節、而綱獨埋其車輪於洛陽都亭、曰、豺狼當路、安問狐狸、遂奏大將軍冀、條其十五事、京師震

悚とある、自注に、張綱は子房七世の孫なり、健爲武陽の人、墓は今の彭山に在り、君豈其の後かと、(五)子河。古人、西蕃地理志を

引いて曰く、隋築長城、起於此河、今謂之紫河、地產良馬と、子河は當に是れ紫河の譌なるべしと、自注に、麟府の馬は子河泌に

出づと、(六)昭義。「九域志」に、河東龍德府潞州上黨郡、唐昭義軍節度とある、自注に、唐昭義の歩兵、蓋し澤潞弓箭の手と、

(七)故關。河東の故關を曰ふ、唐の李端の詩に、水國葉黃時、洞庭霜落夜、行舟開商賈、宿在楓林下、此地送君還、茫茫似夢間、

とある、(八)軌。車が主にて舟は客、ナガエ、即ち小車を言ふ、韓退之の詩に、冰凍絕行軌とある、

【題義】孔常父が張天覺が河南開封府より出で、河東の提刑と爲つて赴くを送る詩に公が次韻して作

る、張商英字は天覺は蜀州新津の人、鯁骨を以て世に稱せらる、元祐黨籍の事、議論紛紛、今遽に

定むること不能である、天覺は晩年佛を學び「護法論」を著はし、氣を吐く、其の性は坡公と極めて

似て居る、

【詩意】君を送るに寸志を表したきが故に鷓鴣裘を典するまでに至る、酒千鍾を借りて以て別愁を洗

はんと思ふ、帽を脱するの風流は唐の張旭にも似て居る、輪を埋める程に民衆に愛せられたる家世は

漢の張良にも似て居る、河東の子河は駿馬の名産地である、昭義の疲兵が少休を得たる地でもある、定

んで秋山に向はば佳句を得らるであらう、故關を通過する際は黃葉が紛紛と行轡に滿つるであらう、

【餘論】紀曉嵐は三四の句を評して、二句切、姓俗格と、俗格は俗格なるも、作詩者の用意は必ず此の

如きを要する、今人張姓の人を送るに何の關係も無き人の故事を使用し、以て得得たる者がある、雅

格なるも亦取るべきものが無いと思はる、



送張天覺得山字

張天覺を送る、山字を得たり

西登太行嶺北望清涼山。

西には登る太行嶺、北には望む清涼山、

晴空浮五髻。掩靄卿雲間。

晴空に五髻浮ぶ、掩靄卿雲の間、

餘光入巖石。神草出茅菅。

餘光巖石に入り、神草茅菅を出づ、

何人相指似。稍稍落人寰。

何人か相指し似す、稍稍人寰に落つ、

能令墮指兒。蚪髻茁冰顏。

能く墮指の兒をして、蚪髻冰顏茁せしむ、

祝君如此草。爲民已痼瘵。

祝る君が此の草の如く、民の爲め痼瘵を已む、

我亦老且病。眼花腰脚頑。

我亦老いて且つ病む、眼花腰脚頑なり、

念當勤致此。莫作河東慳。

念ふ當に勤めて此を致すべし、河東の慳と作ること莫れ、

【字解】

【一】太行 太行、太行山、首始河内、北至幽州、凡百嶺、連亘十三州之界とある、【二】清涼山 一名五臺山、代州五臺縣東北四十里

に在る、澄觀が華嚴大疏に云ふ、清涼山歲久冰堅、夏仍飛雪、曾無炎暑、故曰清涼とある、【三】浮五髻 山色髻の如く空に浮ぶを

言ふのが當面にて、側面は文殊大士が空中に現すると云ふのである、文殊の頭上は髻を五箇に結ぶ、此の山を訪ふ者は、文殊大士に謁

するの主旨である、【四】曉露 「楚辭」に、揚雲霓之曉露とある、【五】餘光 「清涼山志」に、山中有圓光、不次呈現とある、

【六】神草 「山志」に、山中有草藥、名長松、亦名仙茅とある、「張天覺文集」に、僧普明居五臺、患大風、眉髮俱墮、忽遇異人、

教服長松、示其形狀、明采服之、旬餘毛髮俱生、今并代間、多以長松雜甘草山藥、爲湯煎甚佳、然方書不載、獨釋惠祥清涼傳、

始序其詳とある、【七】墮指兒 「漢書高帝紀」に、至樓煩會大寒、士卒墮指者、十二三、【八】茁 草の初めて生ずる貌、動物

の生長する貌にも用ふ、孟子萬章に、牛羊茁壯長而已矣とある、【九】河東慳 王註に、河東古晉地、其俗儉嗇とある、

【題義】張天覺が任地に赴くを送るに就いて諸友が分韻して賦す、坡公は山の字を得たのである、

【詩意】西の方太行嶺に登りつつ之く、而して北の方清涼山を望見する、山は晴空に聳えて五髻常

に浮び出づ、其の靈瑞の氣は卿雲の間に掩靄として在る、其の餘光は私すること無く巖石の隅まで入

る、而して其の山には茅や菅の藥草を多く産する、知らざる者の爲め知つて居る者は能く指示して、

今日よりは稍稍と人寰に此の神草を落して、指を墮して苦む者を、蚪髻をして氷顏を改め蘇生せしめ

ん、君を祝幸する願はくは此の草の如くに、民人が多く痼瘵なるを愈さしめたい、民人のみではない

我も亦老いて且つ病む、眼は眩する、脚も腰も自由がきかぬ、僕が言はずとも君は必ず此を致すを知

る、請ふ河東の俗習の慳嗇に染む莫かれよ、

【餘論】前半は五臺の景狀を敘し、後半は山中の藥草に托して、民苦を救へと説く、人を送るに必ず

規諷を以てするは、知らざるべからざる法と爲す、邦人が人を送る、唯諛語を陳列して讀むに堪へが

たきものがある、坡公が詩を以て藥と爲せ、張天覺は清涼山の十律、佳妙を極む、「清涼山志」を

讀むべきである、



次韻王定國倅揚州

王定國が揚州に倅たるに次韻す

此身江海寄天游

此の身江海に天游を寄す、

一落紅塵不易收

一たび紅塵に落ちて收め易からず、

未許相如還蜀道

未だ許さず相如が蜀道に還るを、

空教何遜在揚州

空しく何遜をして揚州に在らしむ、

又驚白酒催黃菊

又驚く白酒の黃菊を催すを、

尙喜朱顏映黑頭

尙ほ喜ぶ朱顏の黑頭に映するを、

火急著書千古事

火急に書を著はす千古の事、

虞卿應未厭窮愁

虞卿も應に未だ窮愁を厭はざるべし、

【字解】 (一) 何遜 南朝梁の東

海鄭の人、字は仲言、八歳にして詩

を賦す、弱冠、范雲と忘年の友と爲

る、官は尙書水部郎に至る、文は劉

孝綽と名を齊しうす、時に何劉と稱

す、詩亦豔美の習無く、本真を摯寫

す、齊梁間矯矯たる者と爲す、揚州

の法曹廨舎に在り、梅花盛んに開く、

其の下に吟詠す、後洛に居り、梅花

を思うて、再び其の任を請ふ、之に

従ふ、揚州に抵る、花方に盛ん、遜

花に對し彷徨終日、葛常之「韻語陽

次韻王定國倅揚州

王定國が揚州に倅たるに次韻す

此身江海寄天游

此の身江海に天游を寄す、

一落紅塵不易收

一たび紅塵に落ちて收め易からず、

未許相如還蜀道

未だ許さず相如が蜀道に還るを、

空教何遜在揚州

空しく何遜をして揚州に在らしむ、

又驚白酒催黃菊

又驚く白酒の黃菊を催すを、

尙喜朱顏映黑頭

尙ほ喜ぶ朱顏の黑頭に映するを、

火急著書千古事

火急に書を著はす千古の事、

虞卿應未厭窮愁

虞卿も應に未だ窮愁を厭はざるべし、

秋に云ふ、杜詩東閣官梅動詩興、還如何遜在揚州、案遜傳無揚州事、亦無揚州梅花詩、但有早梅五言古詩一首、杜公前詩乃逢早梅而作、故用何遜事、近時有妄人、托東坡名、作老杜事實一編、至謂遜作揚州法曹廨舎、有梅花盛開、遜吟咏其下、豈不誤、學者、查慎曰、考何遜傳、天監中、起家奉朝請、遷建安王水曹行參軍、兼記室、所云建安王者、南平元襄王偉初封也、偉於天監六年、使持節都督右軍將軍揚州刺史、遜爲建安王記室、正在揚州、葛常之、似未深考、至王氏施氏補注、引杜注、以水曹爲法曹、又杜撰、廨舎梅花事、則固不可不削去也、(二) 虞卿、史記「史記」を案するに虞卿は意を得ず、乃ち書を著はし、上は春秋を探り、下は近世を觀、曰く節義稱號攝摩政謀凡そ八篇、以て國家の得失を刺議す、世之を傳へて「虞氏春秋」と曰ふ、太史公曰く、虞卿窮

愁にあらざれば、亦書を著はし、以て自から後世に見はるる能はずと、

【題義】 王定國が揚州に副知と爲つて赴くを送る詩、

【詩意】 此の身が羈縛するものなくば江海に天游を寄する如くである、一たび世の中の人と成りては容易に其の蹤を收むることは出来ない、朝廷は未だ許さない司馬相如が蜀道に還ることを、又何遜をも揚州に留めしむ、時節の移り易きにも驚く已に白酒を將て黃菊を賞する秋となる、併し乍ら喜ぶことには年尙ほ老とならずして、朱顏が黑頭に映することを、火急に書を著はし以て千古の事を記す、虞卿も千古を樂みとして一時の窮愁を厭はない、

【餘論】 紀曉嵐曰く、三四言「因已未去、而累王、憤語却不甚露、今日曰く、未許、未厭、細心を缺く、

贈李道士

李道士に贈る

駕部員外郎李君宗固。景祐中良吏也。守漢州。有道士尹可元。精練善畫。以遺火得罪當死。君緩其獄。會赦獲免。時可元年八十一。自誓且死。必爲李氏子。以報。可元既死二十餘年。而君子世昌之婦。夢可元入其室。生子。曰得柔。小名蜀孫。幼而善畫。既長讀莊老喜之。遂爲道士。賜號



妙應事母以孝謹聞其寫真蓋妙絕一時云。

【訓讀】 駕部員外郎李君宗固は景祐中の良吏なり、漢州に守たるとき、道士尹可元あり、精練善畫、遣火を以て罪を得、死に當る、君其の獄を緩うし、會ま赦され免るるを獲、時に可元年八十一、自ら誓つて且に死せんとす、必ず李氏の子と爲つて、以て報せんと、可元既に死し、二十餘年にして、君子世昌の婦、可元が其の室に入るを夢み子を生む、得柔と曰ふ、小名蜀孫、幼にして善畫、既に長じ莊老を讀んで之を喜び、遂に道士と爲り、號を妙應と賜ふ、母に事へ、孝謹を以て聞こゆ、其の眞を寫す、蓋し一時に妙絶すと云ふ、

世人只數曹將軍。

世人只數曹將軍、

誰知虎頭非癡人。

誰か知らん虎頭は癡人にあらざるを、

腰間大羽何足道。

腰間の大羽何ぞ道ふに足らん、

頰上三毛自有神。

頰上の三毛自から神有り、

平生狎侮諸公子。

平生狎侮す諸公子、

戲著幼輿巖石裏。

戯れに著く幼輿巖石の裏、

故教世世作黃冠。

故に世世黃冠と作ら教む、

【字解】 (一) 曹將軍 曹霸は魏の曹髦の後、官左武衛大將軍に至る、開元中、畫已に名を得、天寶の末、詔して御容及び功臣の像を寫す、筆墨沈著、神彩生動、畫馬を最と爲す、韓幹と名を齊しうす、(二) 虎頭 晉の顧愷之字は長康、小字は虎頭、無錫の人、義熙中、散騎常侍と爲る、衛協を師と爲す、丹青特妙、春蠶の絲を吐くが如し、人物を畫き、數年

布襪青鞋弄雲水。

布襪青鞋雲水を弄す、

千年鼻祖守關門。

千年鼻祖關門を守る、

一念還爲李耳孫。

一念還た李耳の孫と爲る、

香火舊緣何日盡。

香火の舊緣何の日にか盡さん、

丹青餘習至今存。

丹青の餘習今に至りて存す、

五十之年初過二。

五十の年初めて二を過ぎ、

衰顏記我今如此。

衰顏記す我が今此の如きを、

他時要指集賢人。

他時要す指す集賢の人、

知是香山老居士。

知る是れ香山老居士、

【自注】樂天爲翰林學士奉詔寫眞集賢院。

る、【六】幼輿巖石「世説」に云ふ、顧長康、畫謝幼輿在巖石裏、人問其所以、顧曰謝云、一邱一壑、自謂過之、此子宜置邱壑中、【七】黃冠 道士の冠を黃冠と曰ふ、韓退之、送張道士詩に、詣關三上書、臣非黃冠師と、【八】布襪青鞋 杜甫の詩に、青鞋布襪從此始とある、【九】鼻祖 關門の令、尹喜を指す、【一〇】李耳 老子を謂ふ、老子姓は李名は耳、周の守藏室の史と爲る、周衰ふ、遂に去つて關に至る、關の令尹喜、強ひて書を著はさしむ、今の李道士、尹が後にして李氏の子と爲り、而して道士と爲る、【一一】五十 後漢孔融書云、五十之年、融亦過二とある、【一二】集賢人 樂天の詩に、昔作少學士、圖形入集賢、今爲老居士、寫



【題義】李道士が山に歸るを送る詩にて、李本良吏でありしが、道士の尹可元が罪ありて死すべきを扶けて己も亦吏を罷め道士と爲り、書を善くし、兼ねて老莊に通ずることを言ふのが主旨である、

【詩意】世人の口に籍籍と上るは曹將軍である、顧長康を癡絶の人と稱するは僕は許容しない、而して古人は曹顧に對し腰間大羽箭動かが如しと賞讃するが何ぞ道ふに足らんや、今李の畫に於ける人を畫くに頬上に三毛を描く自から神力あるを知る、平生は諸公子を狎侮して、聊かも公子に媚びることにはせぬ、謝幼輿は臺閣に置くべきを巖石の上に置くの畫を作る、是の故に謝氏は世世黃冠を著ける家と成る、道士とならば布靴と青鞋にて千里萬里雲水を弄して行く、千年の鼻祖は關門の令尹喜である、一念發起して官吏が道服を著け李耳の孫となる、香火の舊縁は容易に盡くる日はない、其の上畫手の餘習も今猶ほ存してある、年は五十を過ぐることに僅に二、衰顔の我は此の如く衰へたるを知る、今より他の時集賢の人を寫さば、香山の老居士は眉山の蘇居士が是である、

【餘論】紀曉嵐は蘇詩擇粹に此の詩を採録せざるは所謂粹にあらざるの考を以てであらう、然れども余は想ふ樂天の上に駕して杜甫の壘に逼るものと、三讀四讀する者は余が言の妄にあらざるを知るであらう、

次韻張舜民自御史出倅虢州留別

張舜民が御史より出でて虢州に倅として留別せらるるに次韻す

玉堂給札氣如雲。

玉堂給札氣雲の如し、

初起湘纍復佩銀。

初め湘纍より起つて復た銀を佩ぶ、

樊口淒涼已陳迹。

樊口淒涼已に陳迹、

班心突兀見長身。

班心突兀長身を見る、

江湖前日眞成夢。

江湖前日眞に夢と成る、

鄠杜他年恐卜鄰。

鄠杜他年恐らくは鄰を卜せん、

此去若容陪坐嘯。

此を去り若し坐に陪して嘯くを容さば、

故應客主盡詩人。

故らに應に客主盡詩人なるべし、

【題義】

張舜民が御史の官より出でて虢州の倅と爲り其の留別の詩を作られたるに和するもの、

【詩意】

玉堂より賜ふ所の札紙に詩を書して氣は雲の如く盛んである、初めは身を湘纍の小官より起

古今體詩 次韻張舜民自御史出倅虢州留別

【字解】〔一〕給札「漢司馬相如傳」に、請爲天子游獵之賦、上令尙書、給筆札、賦云云とある、

〔二〕湘纍 次公曰く、舜氏字は芸叟、元豐辛酉、爲環慶帥屬、明年責監郴州酒稅、郴屬湖湘、故以湘纍稱之、李奇曰、諸不以罪死曰纍、屈原赴湘死、故曰湘纍、〔三〕樊口 今の湖北省壽昌縣の西北、果子湖、江に入るの處、自注に、昔張と同じく武昌の樊口に遊び來る、詩中之に及ぶと、〔四〕鄠杜 鄠縣と杜縣、共に長安に屬す、



して今日は銀印を帯ぶる身である、昔日君と同遊せし樊口の事は已に陳迹と爲る、而して今に至りて班心に突兀として其の長身を見ざる、江湖前日の事は眞に一夢と消ゆる、郭杜の間に後年は必ず君と鄰を下することを期す、此を去つて若しや坐に陪して長嘯するを容して呉れるならば、客も主人公も一座盡く詩人で一箇の俗人も著け得ない、

【餘論】紀曉嵐は第四句を評して、班心句不雅と曰ふ、余は不妥と評せんと思ふ、

次韻米黻二王書跋尾二首

米黻が二王書跋尾に次韻す 二首

三館曝書防蠹毀

三館曝書して蠹毀を防ぐ、

【字解】三館、春明退朝錄に、唐兩京、皆有三館、而各爲之所、所以遂三館命、修撰文字、本朝三館合爲一、並在崇文院中、續通鑑長編、梁都汴、貞明中、始以今右長慶門東北、小屋數十間、爲三館、湫隘纒蔽、風雨、太平興國三年、詔有司、度左升龍門東北、舊車輅院地、別建三館、壯麗甲於內廷、賜名崇文院、盡遷舊館之書、以實之、東師爲昭文書、南師爲集賢書、西師爲四庫、分經史子集四部、爲史館書、六庫書籍正副本、凡八萬卷とある、

得見來禽與青李

見ることを得たり來禽と青李とを、

秋地春蚓久相雜

秋地春蚓久しく相雜はり、

野鶯家雞定誰美

野鶯家雞定んで誰か美なる、

玉函金籙天上來

玉函金籙天上より來り、

紫衣勅使親臨啓

紫衣勅使親しく臨啓す、

紛綸過眼未易識

紛綸眼を過ぎ未だ識り易からず、

磊落挂壁空雲委

磊落壁に掛け空しく雲に委ぬ、

歸來妙意獨追求

歸來妙意獨り追求、

坐想蓬山二十秋

坐して想ふ蓬山二十秋、

怪君何處得此本

怪む君が何の處にか此の本を得たる、

上有桓元寒具油

上に桓元が寒具油あり、

巧偷豪奪古來有

巧偷豪奪古來より有り、

一笑何似癡虎頭

一笑何ぞ似ん癡虎頭に、

君不見長安永寧里

君見ずや長安の永寧里、

王家破垣誰復修

王家の破垣誰か復た修せん、

尋召充集賢學士、六飛在、關東用兵徵發招懷、書詔雲委、遜能詞才敏速、筆無點竄、動中事機、僖宗嘉之とある、蓬山蓬萊山を謂ふ、寒具油「續晉陽秋」に、桓元好著法書名畫、客至常出而觀、客食寒具、油汗其畫、後遂不設寒具、集韻云寒具饅餅也、巧偷晉顧愷之の傳に、嘗て一厨畫を以て、糊して其の前に題し、桓元に寄す、桓元其の厨を發き、竊取す、愷之其の封題を見れば初めの如し、但其の畫を失す、直だ云ふ、妙畫靈に通じ、變化して去る、亦猶ほ人の登仙するがごとしと、了に怪色なし、永寧里「唐書王涯傳」に、李訓敗、涯就誅、涯居永寧里、前世名書畫、鑿垣納之、重複秘固、至是爲人破垣剔取、取奩軸金玉、而棄其書畫於道とある、

【題義】米黻は米芾とも書く、字は元章、世世太康に居り、後吳に徙る、書畫を善くす、古鐘鼎法書

賢書、西師有、四庫、分經史子集四部、爲史館書、六庫書籍正副本、凡八萬卷とある、

史王僧虔傳に、厭家雞とある、

【三】玉函「漢武內傳」に、封以白玉之函とある、「黃庭內經」に、玉底金籙常完堅とある、

【四】紛綸「後漢逸民傳」に、北丹通五經善談論、京師語曰、五經紛綸非大春とある、

【五】雲委「宋書謝靈運傳」に、比響聯辭、波屬雲委とある、「舊唐書」杜遜能判度支、黃巢犯京師、奔赴行在、拜禮部郎中史館修撰、



を好む、初め校書郎と爲り、後召されて書畫博士と爲る、今其の藏なる王羲之と王獻之の墨蹟に跋して詩を作られたるを公が次韻したものである、

【詩意】三館に藏せる書籍を秋暑に當り之を曝らし以て霉毀を防ぐ、是に於てか平生見ることとは出來ぬ來禽帖と青李帖の二蹟を見ることが出來た、世に流布するの法帖多くは秋蛇春蚓筆力の弱きものが久しく相雜はる、野鷲と家雞即ち羲と獻との優劣は分らぬ、珍書を秘し收むる玉函と金籥は宮廷より來る、而して紫衣を著けたる勅使が親しく函を啓く、一紛一綸眼を過ぎたのみにては深く識ることが出來ない、磊落として壁に掛け空しく雲に委ぬるのみ、歸り來りて妙意を獨り追求して見れば、直史館を辭し去つてより我は二十秋を経て居る、怪む君は何の處に於てか此墨本を得たるや、上に桓元が寒其油の汗れたる處を察すれば、或は處處を轉轉し來りしものかと思はる、巧に偷み、豪ひて奪ふことは古來より有る、癡虎頭の桓元の爲め偷まれたることを思へば一笑する君は似て居らない、君も見たであらう長安永寧里の事を、王涯の家の垣を破つて畫を偷み去る者ありしを、

【餘論】前半は坡公が帝室圖書に就いての感を敘し、後半は米の此の帖に就いて敘す、紀曉嵐は曰く此非二敗徳、故不レ妨二於直諷、元來巧偷豪奪を惡事と心得居らざるが彼國人の常、日本人より之を見れば、此れ敗徳にあらずして、何をか敗徳と言ふのである、怪君何處得二此本の七字を日本人ならば、我も言ふこと出來ず、彼も亦大に怒る筈のものである、文字游戲とは言へ、露骨の極である、

〔一〕

元章作書日千紙。

元章書を作る日に千紙、

平生自苦誰與美。

平生自ら苦む誰か美を與へん、

畫地爲餅未必似。

地に畫きて餅を爲る未だ必ず似ず、

要令癡兒出饑水。

要は癡兒をして饑水を出さしむ、

錦囊玉軸來無趾。

錦囊玉軸來りて趾無く、

粲然奪眞疑聖智。

粲然として眞を奪ふ聖智を疑ふ、

忍饑看書淚如洗。

饑を忍んで書を見て涙洗ふが如し、

至今魯公餘乞米。

今に至りて魯公餘米を乞ふ、

畫甚多、東坡有詩譏之、錦囊玉軸來無趾、粲然奪眞疑聖智、巧偷豪奪古來有、一笑何似癡虎頭、人之嗜好耽著、乃至於此、元章欲以三九物一換劉季孫子敬帖不レ獲、其意歎然、張芸叟作詩云、請君田二奇帖、與三此九物一并、今日投三泔水、明日到三滄溟、可下以譬、膏三育於書畫者とある、〔四〕乞米、顏眞卿乞米帖云、拙三於生事、舉家食粥已數月とある、

【詩意】元章書を作ること毎日千紙、平生自ら勤苦して誰にか美を與へんと思ふ、地に畫きて餅を爲るも此の餅は啖ふべきものでない、畢竟するに癡兒が饑水を出すに過ぎない、錦囊も玉軸も元來趾の

〔二〕

【字解】〔一〕畫地、三國魏志盧毓傳に、文帝舉中書郎、詔曰、選舉莫レ取有名、名如畫地作餅、不可レ啖也とある、〔二〕無趾、文選に、孔文舉論盛孝章書曰、珠玉無レ經而自至者、以二人好之也とある、歐陽修の詩、盛以錦囊裝玉軸とある、〔三〕粲然、宋葛立方の韻語陽秋に、米元章、書畫奇絶、從人借古本、自臨揚、臨竟、併與臨本眞本、還其家、令自辨其一二、而其家不能辨也、以此得二人古書



無きもの、趾なくして來るものは怪しいに定まつて居る、書の榮然として偽が眞を奪ふは聖智かと疑はる、飢を忍んで書を見て涙洗ふ如きは古人である、顔魯公は天下の書聖であるが米を乞ふ程の清貧である、

【餘論】 葛立方の「韻語陽秋」と周輝の「清波雜誌」の二本を讀む、坡公が此の詩を米に贈るは直諷なることを知る、文人の惡癖は古今東西同一と思ふ、紀は後首を評して曰く、直似山谷、非東坡本色と、坡公は遊戲を好むも、此の直諷は元章に對し、他人は言ひ難ければ、公が一番喝破したるものと思ふ、但し詩の溫柔敦厚の道より論ずれば、此等は詩と言ふべきものでない、

次韻宋肇惠澄心紙二首

宋肇が澄心紙を惠むに次韻す 二首

詩老囊空一不留

詩老囊空しうして一も留めず、

【字解】 〔一〕 詩老 梅聖俞を指す、〔二〕 百金 查慎云、宛陵集、有

百番曾作百金收

百番曾て作す百金の收を、

【自注】永叔以澄心百幅遺聖俞、聖俞有詩、

知君也厭雕肝腎

知る君が也厭ふ肝腎に雕するを、

分我江南數斛愁

我に分つ江南數斛の愁、

百幅遺、據二詩所云、歐陽梅紙、不超過二幅、寄百幅者宋次道也、先生自注、偶合二兩事、爲一耳、古人紙の一幅を以て一番と爲す、我不善書心每恥、君又何此

す、「張華博物志」此の事を記す、自注に、永叔、澄心百幅を以て聖俞に遺る、聖俞詩ありと、〔三〕 數斛愁 庾亮賦に、且將一寸心、能容萬斛愁とある、

【題義】 宋肇が澄心紙を惠まれたるを謝して作る、澄心堂紙は南唐江南の李後主が始めて製する所、紙の質たる今日より知る能はざるも、查慎の説に據れば、初め甚だ貴きものではなく、劉貢父が使用してより後、一般に貴重視すと、其の物貴からずして、人に依つて貴となるもの今日にも尙ほ此の如きことがある、風流天子の發明、詩題として其の所を得たものである、

【詩意】 詩老は囊底常に空しうして一金をも留めず、留めざる筈である百金も一時に散じて百枚の紙を買ふ、知る君も亦詩老と同じく自分の肝腎を其の紙に雕するを厭うて、我輩に江南萬斛の愁を分與せらる、

〔一〕

〔二〕

君家家學陋相如

君が家の家學相如を陋しとす、

宜與諸儒論石渠

宜しく諸儒と石渠を論ずべし、

古紙無多更分我

古紙多き無く更に我に分つ、

自應給札奏新書

自ら應に給札に新書を奏すべし、

【詩意】 君が家の家學は司馬相如の如く柔輒は陋とする、宜しく諸儒と其の強弱を石渠に論ずべき

古今體詩 次韻宋肇惠澄心紙二首

【字解】 〔一〕 陋相如 次公曰く、宋肇は京家子、險澁の語を好む、故に言ふ家學陋相如と、〔二〕 石渠 「漢書儒林傳」に、施讐、甘露中、與五經諸儒、雜論同異於石渠閣とある、



である、古紙は世に多くも無し其の無きものを更に我に分與する、然らば貴公は給札に別に新書を奏する考であらうぞ、

【餘論】坡公の詩として可も無く不可も無きものなるが、前首の結末二句は推敲の跡思ふべきである、

郭熙秋山平遠二首 郭熙が秋山平遠 二首

目盡孤鴻落照邊 目盡す孤鴻落照の邊、

遙知風雨不同川 遙に知る風雨川を同じくせざるを、

此間有句無人識 此の間句あり人の識る無し、

送與襄陽孟浩然 送與す襄陽の孟浩然、

【詩意】目力の盡くる處に孤鴻が落照に向つて飛ぶ、遙に知る風雨が南川北川同じからざること、此の間に於て我に句あるも示すべき人が無いから誰も知らぬ、唯此を襄陽の高士孟浩然に送與せんと思ふ、

(一) (二)

木落騷人已怨秋 木落ちて騷人已に秋を怨む、

不堪平遠發詩愁 平遠に堪へず詩愁を發す、

要看萬壑爭流處 看んと要す萬壑流を爭ふ處、

他日終煩顧虎頭 他日終に煩はす顧虎頭、

【詩意】木葉は紛落して騷人は已に秋を怨む、平遠に堪へず詩愁を發するのである、看んと要するは萬壑が奔流を争ふ處、他日終に煩はさんと思ふ顧虎頭の手を、

【餘論】前首は東陽の「絶句類選」に於て、齋藤拙堂評して、坡翁之詩、雖不甚奇者、能道二人之所未會道一と、但し後首郭熙の手筆は不足であるから、顧虎頭を煩はすと云ふものの如くであるが、余は明の一僧が石田に寄せたる詩の方を上等かと思ふ、筆到斷崖泉落處、石邊添箇看雲僧、紀曉嵐は曰く、題書習徑と、

獲果莊二十韻 果莊を獲たり二十韻

青唐有逋寇白首已窮妖 青唐に逋寇あり、白首已に窮妖、

竊據臨洮郡潛通講渚橋 竊に臨洮郡に據り、潛に講渚橋に通ず、

廟謀周召虎邊帥漢班超 廟謀周の召虎、邊帥漢の班超、



堅壘千兵破。連航一炬燒。  
擒姦從窟穴。奏捷上煙霄。  
詭異人圖像。歡娛路載謠。  
干誅非一事。伐叛自先朝。  
取道經陵寢。前期告廟祧。  
西來聞幾日。面縛見今朝。  
二聖臨雲陛。千官溢海潮。  
載囚車輾轉。失主馬蕭條。  
橫拜如蹲犬。胡裝尙衣貂。  
理卿辭具服。譯長舌初調。  
緩死恩殊厚。求生尾屢搖。  
慈仁逢太母。寬厚戴唐堯。  
赤手真擒虎。和羹未賜臯。  
藁街虛授首。東市偶全腰。

堅壘千兵破り、連航一炬に燒く、  
姦を擒にす窟穴よりし、捷を奏して煙霄に上る、  
詭異人は圖像せられ、歡娛路は謠を載す、  
干誅一事にあらず、伐叛は先朝よりす、  
道を取ることを陵寢を経、期に前だつて廟祧に告ぐ、  
西來聞く幾日ぞ、面縛今朝に見る、  
二聖雲陛に臨み、千官海潮溢る、  
囚を載せて車輾轉、主を失して馬蕭條、  
横拜は蹲犬の如く、胡装は尙ほ貂を衣る、  
理卿辭具服、譯長舌初調、  
死を緩うする恩殊に厚く、生を求めて尾屢ば搖かす、  
慈仁太母に逢ひ、寬厚唐堯を戴く、  
赤手真に虎を擒にし、和羹未だ臯を賜はらず、  
藁街虚しく授首、東市偶ま全腰、

困獸何須殺。遺雛或可招。  
威聲西振夏。武節北通遼。  
帝道有強弱。天時或長消。  
羌情防報復。軍勝忌矜驕。  
慎重關西將。奇功勿再要。

困獸何ぞ殺すを須ひん、遺雛或は招く可し、  
威聲西は夏に振ひ、武節北は遼に通ず、  
帝道強弱あり、天時或は長消す、  
羌情報復を防ぐ、軍勝矜驕を忌む、  
慎重關西の將、奇功再要する勿かれ、

【字解】〔一〕青唐 即ち今の甘肅西寧縣治、宋初吐蕃に屬し、之を青唐城と謂ふ、〔二〕有連寇 眞宗、溫迪奇を以て歸化將軍と爲す、溫迪奇後に亂を謀る、嘉勒斯賽、之を殺す、〔三〕臨洮郡 縣名、秦始めて置く、蒙恬長城を築き、臨洮より起りて遼東に至る、今日の甘肅岷縣臨洮である、地洮水に臨むを以て名づく、〔四〕講渚橋 臨洮の近處ならんも、未詳、〔五〕廟謀 查慎云ふ、畫邊集神誼墓志云、初王師拓土至枹罕、始建三州縣、哨氏餘種、獨董戩尙存、首領果莊、誘殺知河州景思元、董戩、遂復其國、元祐初、果莊與夏國相結、知岷州、神誼、刺得其情、聞於朝、遣游師雄、就商利害、師雄議與誼合、帥臣劉舜卿從之、遣總管姚兪、統熙河軍、趨嘉木卓城、誼出哥龍峽、敗賊於邦令谷、追奔至洮州、果莊拱手就執とある、〔六〕干誅 恐らくは誅干、干は干犯、干犯者を誅するを言ふ、〔七〕伐叛 杜甫の詩に、伐叛已三朝とある、〔八〕告廟祧 畫邊集神誼墓志、果莊就執、捷報至、奏告裕陵、以果莊、檻送京師とある、〔九〕二聖 哲宗と哲宗の母太后を謂ふ、〔一〇〕載囚 「續通鑑長編」に、元祐二年十月、詔果莊易檻車、護送大理寺、劾治以聞、引見、準辟囚例、押入殿、以呂公著奏、果莊始下獄也とある、〔一一〕理卿 「宋史職官志」に、大理寺元豐官制、行卿一人、少卿二人、〔一二〕譯長 「唐書裴矩傳」に、譯長縱釋夷、與民貿易とある、〔一三〕求生 司馬遷報任安書、猛虎在深山、百獸震恐、及其在檻穽之中、搖尾而求食、積威約之漸也とある、〔一四〕太母 神宗の后にて哲宗の母、垂簾して政を聽く、〔一五〕和羹 漢東觀故事、令郡國送臯、五月五日、爲臯羹、賜百官、注以惡鳥故食之、欲絶其類、



也とある、【二六】授首 孔明「後出師表」に、夏侯授首とある、【二七】東市 「三輔錄」に、長安城中有藥街、「前漢書陳湯傳」に、斬鄒至首及名王以下、宜懸頭藥街とある、「史記龜錯傳」に、衣朝衣斬東市とある、【二八】遺雛 查慎云、先生論果莊事宜、割子云、竊聞朝論、謂果莊犯順、罪當誅死、然嘗之鳥獸不足深責、其子孫部族、猶足以陸梁於邊、全其首領、以累其心、以爲重質、庶獲其用、「續通鑑長編」に、元祐二年十一月、以果莊入見崇政殿、詰犯邊之狀、諭以罪當誅死、聽招其子及部屬歸附以自贖、果莊服從、釋縛、三年八月以果莊爲陪戎校尉、【二九】矜驕 「史記」に、宋義諫項梁曰、戰勝而將驕、卒惰者敗とある、

【題義】 果莊なる者朝命を奉せず亂を作すを漸くにして服従して朝命を奉ずるに至りし事項を詩に作られしものである、

【詩意】 青唐に於て溫通奇なる者中國に寇を作す、其の者白首にして已に窮妖である、竊に城居を臨洮郡に構へて、潛に講渚橋に居る者と氣脈を通ずる、之を征伐せんと内閣に於て謀を講ずる人には周の召虎の如き傑人が在る、又征討將軍と爲つて討伐に赴く人には漢の班超の如き將軍が在る、然らば彼の堅壘も千兵を以て破り、彼の連航も一炬火を用て焼き拂ふ、姦兇の徒を擒にするは窟穴よりして、捷を奏する所は煙霄即ち朝廷である、其の詭異の功を以て將軍等は像を圖され、又昇平と爲りし歡娛は民人の歌となつて道路に滿つ、此の干犯者を誅するは唯一事にあらずして、叛徒を征伐するは先朝の世より然りである、彼等を捕へて歸る道は陵寢を経て來る、而して此の捷報を廟祀に奏告する、西來此に至る幾日を費したるを知らざるが、彼が面縛せるを見るは今朝である、二聖は親しく雲陛に臨まれ、千官は海潮の如く溢るる、囚人である果莊以下の檻車の音は輶輶と響き、主を失ふ馬は蕭條

として嘶く、彼等が橫拜する狀は蹲犬の如くである、彼等の裝は尙ほ貂衣の軍服である、彼等の罪を裁判する理卿は辭具服である、譯長は彼等の爲め通譯する舌初調である、死すべき死を緩ゆるは天恩殊に厚く、生を求むる彼等は今は柔順である、慈仁なる所の太母、寛厚なる所の天子、幸に之に逢ひ、幸に之を戴く、官軍は赤手にして眞に虎を擒にせし如くである、食物も普通の膳を賜はり梟の和羹などは賜はらぬ、藁街も東市も斬首場ではあるが、今は斬首もしなければ斬腰もしない、困獸すらも何ぞ殺すことをせん、汝等の眷屬は殺さざるが故に招くべきである、而して中土の威聲は西方の夏に振ひ、中土の武節は北方の遼まで通ずるに至る、帝道には或は強弱もある、天時には或は消長もある、羌人が若し報復なぞ志さば之を防ぐもよろし、軍勝てばとて矜驕することは忌む、慎重に玉へ關西の將よ、奇功を再び求めんと要することはならぬ、

【餘論】 排律として最も力を用ひしもの、紀曉嵐は起處に於て、放筆直走、雖排偶一而似單行、氣格殊高と評し、帝道以下を結處得諷諭之體、若再渾雄其詞、使三人咏嘆而得之、則更佳耳と評せるは大に當る、

送歐陽辯監澶州酒

歐陽辯が澶州酒に監たるを送る

汗血駕鼓車何從致千里

汗血鼓車に駕せば、何によりてか千里を致さん、



紛紛糟麴間欲試賢公子。

紛紛たる糟麴の間、賢公子を試みんと欲す、

君家江南英濯足滄浪水。

君が家は江南の英、足を滄浪の水に濯ふ、

却渡舊黃河漲沙埋馬耳。

却つて舊黃河を渡る、漲沙馬耳を埋む、

由來付造物倚伏何窮已。

由來造物に付す、倚伏何ぞ窮已あらん、

當念楚子文三仕無愠喜。

當に念ふべし楚の子文、三たび仕へて愠喜無し、

【字解】

汗血 大宛より出づる名馬、前に辨せり、  
千里 後漢書循吏傳に、光武建武十三年、異國有獻名馬者、日行千里、詔以馬駕鼓車とある、  
舊黃河 今陞爾奎の説を聞く、曰く、黃河は挾沙重濁、此は淤、彼は決、下游屢ば變遷あり、今黃河の下游、河南の開封より、東北直隸山東を歴、大清河を奪うて海に入る、即ち咸豐四年、銅瓦箱決口の致す所、茲に其の故道を擧ぐ凡そ六あり、一は禹河の故道、即ち河南の滎澤より、東北に行き、濬縣の東北に至り、濁漳水に合して直隸に入り、天津より海に入る、二は周の定王以後黃河故道、即ち河南の濬縣より、東深川を經、東北直隸山東を歴、天津より海に入る、三は東漢以後の黃河故道、即ち滑縣より、東北直隸山東を歴、利津より海に入る、四は宋時の黃河古道、即ち直隸開州より、永濟渠に合し、東北直隸山東を歴、天津より海に入る、五は金時の黃河故道、即ち河南の陽武より東行、山東の梁山濬に入り、南北に分流し、北流は北清河即ち濟水に入る、東北山東を歴、利津より海に入る、南流は南清河即ち泗水に入り、山東江蘇を歴て淮に入る、六は元明以後の黃河故道、河南の武陟より東南に行き、汴泗を奪うて淮に入る、河南山東江蘇を歴、安東より海に入る、  
【四】 倚伏 禍福の相因倚するを謂ふ、老子に、禍兮福所倚、福兮禍所伏とある、  
【五】 楚子文 論語公冶長篇に、令尹子文、三仕爲令尹、無愠色、三已之、無愠色とある、

【題義】

歐陽辯字は季默、文忠公の少子である、澶州即ち今日の直隸清豐縣にて宋の眞宗が遼人と盟

を約したる澶淵は此の地である、此の地に酒を監する役を以て赴くを送る詩である、

【詩意】

汗血の馬も鼓車に駕しては、如何して千里の道を馳驅することが出来ようぞ、紛紛たる糟麴の間に於て、賢公子を擇んで之に試せんとせらる、君が家は江南に於ける英偉である、君は足を滄浪の水に洗うて世間とは隔絶して居たのであるが、却つて今舊黃河の濁流を渡る、舊黃河の沿岸は黃沙漲つて馬耳を埋むる荒涼である、が由來人の運命は造物に付してある、禍も福も何の窮已あるぞや、當に念ふべし楚の子文、三たび仕へて愠れる色も喜べる色も無かりしことを、

【餘論】

紀評に、出手太易とある、他に言ふべき語は無い、

九月十五日邇英講論語終篇。賜執政講讀史官燕於東宮。

又遣中使就賜御書詩各一首。臣軾得紫薇花絕句。其詞云。

絲綸閣下文章靜。鐘鼓樓中刻漏長。獨坐黃昏誰是伴。紫薇

花對紫薇郎。翌日各以表謝。又進詩一篇。臣軾詩云

九月十五日、邇英に論語を講じ篇を終ふ、執政講讀史官に燕を東宮に賜ふ、又中使を遣はし、就いて御書詩各の一首を賜ふ、臣軾紫薇花絶句を得たり、其の詞に云ふ、絲綸閣下文章靜に、鐘鼓樓中刻漏長し、獨坐黃昏誰か是れ伴、紫薇花は對す紫薇



郎と、翌日各表を以て謝す、又詩一篇を進む、臣軾の詩に云ふ

繡裳畫袞雲垂地。

繡裳畫袞雲地に垂る、

不作成王剪桐戲。

作さず成王剪桐の戲を、

日高黃縷下西清。

日高くして黄縷西清に下り、

風動槐龍舞交翠。

風動きて槐龍交翠舞ふ、

【自注】通英閣前有雙槐。樛枝屬地如龍形。

壁中蠹簡今千年。

壁中の蠹簡今千年、

漆書科斗光射天。

漆書科斗光天を射る、

諸儒不復憂吻燥。

諸儒復た吻燥を憂へず、

東宮賜酒如流泉。

東宮酒を賜ふ流泉の如し、

酒酣復拜千金賜。

酒酣にして復た拜す千金の賜を、

一紙驚鸞回鳳字。

一紙驚鸞回鳳の字、

蒼顏白髮便生光。

蒼顏白髮便ち光を生ず、

袖有驪珠三十四。

袖に驪珠三十四あり、

【自注】臣所賜詩并題目及臣姓名凡三十四字。

歸來車馬已喧闐。

歸來車馬已に喧闐、

爭看銀鈎墨色鮮。

争ひ看る銀鈎墨色の鮮かなるを、

人間一日傳萬口。

人間一日萬口に傳ふ、

喜見雲章第一篇。

喜び見る雲章第一篇、

【自注】上前此未嘗以御書賜羣臣。

玉堂畫掩文書靜。

玉堂畫掩うて文書靜に、

鈴索不搖鐘漏永。

鈴索揺かず鐘漏永し、

莫言弄筆數行書。

言ふこと莫かれ筆を弄す數行の書、

須信時平由主聖。

須らく信ずべし時平かなるは主の聖に、

犬羊散盡沙漠空。

犬羊散盡して沙漠空し、

捷烽夜到甘泉宮。

捷烽夜到る甘泉宮、

似聞指揮築上郡。

聞くに似たり指揮上郡を築くを、

已覺談笑無西戎。

已に覺ゆ談笑西戎無きを、

【字解】(一)畫袞 古は天子の禮服を袞と謂ふ、十二章、日月星辰、山龍華蟲を衣に繪き、宗彝の藻、火、粉米、黼黻を裳に繡するのである、

(二)成王 「史記晉世家」に、成王與叔虞戲、剪桐葉爲圭、與叔虞曰、以此封若、史佚請擇日立叔虞、曰、天子無戲言、と、柳柳州文集」に、桐葉封弟辨がある、(三)西清 王注師曰、西清は西廂清閉の處と、(四)槐龍 坡公自注の如く通英閣前に雙槐あり、樛枝地に屬き龍形の如しと、(五)壁中 漢書に魯恭王壞孔子舊宅、於其壁中、得古文經傳とある、(六)吻燥 陸機の文賦に、始鄒躅於燥吻、終流離于濡翰とある、詩詞の容易に成らざるの義、(七)流泉 「歷代寶藏

記」に、酒泉郡、其地有泉味如酒とある、(八)驚鸞回鳳 素靖草書狀、婉若銀鈎、漂若驚鸞とある、又王羲之が草書、勢婆娑而同鳳舞とある、(九)驪珠 「莊子列禦寇」に、千金之珠、必在九重之淵、而驪龍頷下とある、(一〇)三十四 公の自注に、臣賜ふ所の詩并に題目、及び臣が姓名凡そ三十四字とある、

(一一)捷烽 王次公曰く、武帝時、匈奴入二代郡、烽火通於甘泉宮とある、(一二)上郡 秦置く、今の陝西榆林道及び内蒙古鄂爾多斯左翼の地、「史記蒙恬傳」に、北逐夷狄、收河南、築長城、居上郡とある、(一三)無西戎 公の自注に曰く、時に照河新に果莊を獲、是の日涇原復た奏す、夏賊數十萬人皆遁れ去りて見えすと、「續前定錄」及び「道山清話」に云ふ、子瞻詩、有似聞指揮



【自注】時熙河新獲果莊。是日溼原復奏。夏賊數十萬人。皆遁去不見也。

文思天子師文母。

文思は天子師は文母、

終閉玉關辭馬武。

終に玉關を閉して馬武を辭す、

小臣願對紫薇花。

小臣願はくは紫薇花に對し、

試草尺書招贊普。

草を試み尺書贊普を招かん、

【自注】謹案。唐制翰林學士帶知制誥。許綬中書舍人。班。今臣以知制誥待罪禁林。故得以此紫薇爲故事。

築上郡之句。嘗問之。當是用少陵談笑無西河之語。子瞻笑曰。固是少陵。亦自用左太沖長嘯激清風。志若無東吳也。【二四】文思。杜牧の詩に。文思天子復河湟。とある。「尙書」には。欽明文思安安とある。【二五】終閉。「後漢范曄論」。光武閉玉關。以謝西域之質。又范曄云。山西既定。威臨天下。咸宮馬武之徒。撫

鳴劍而指掌。志馳於伊吾之北矣。又「後漢書臧宮傳」に。時匈奴饑疫。宮與揚虛侯馬武。上書願得五千騎。以立功。詔辭不許。ある。【二六】紫薇花。公の自注に。謹んで案するに。唐制翰林學士知制誥を帶び。中書舍人の班に綴るを許す。今臣知制誥を以て罪を禁林に待つ。故に紫薇を以て故事と爲すことを得と。【二七】尺書。金花五色の綾紙を用ふ。【二八】贊普。吐蕃。今日の西藏。此の國の王を贊普と號す。南涼の禿髮の後なりと。吐蕃は長安の西八千里に在る。唐の太宗の文成公主を嫁せしめて講和を謀り。且つ佛教も宣布せらるること唐書に記してある。

【題義】元祐二年の九月十五日邇英閣に於て論語を講じ、講じ終つて燕を東宮に賜はり、更に御書御詩をも并せて賜はる、其の謝恩を表して此の詩を作れるもの、

【詩意】繡裳にして畫衰、而して雲は地に垂るる天子の狀、十二歳にても眞の天子である、成王が剪桐の戲を以て封じたる天子とは異なる、日高うして天子は黄織に蓋衛せられながら西清に下らる、而

して風は槐枝の影を動かして交翠を舞はす如き狀である、邇英閣に收むる所の書典は實に珍とすべき千年以前のものが在る、開いて觀れば漆書せる科斗の文字は光天を射る如く新である、諸儒が紛紜と古を論じて苦んで吻燥するを用ひない、東宮は酒を侍講の臣等に賜ふこと流泉の如くである、酒酣なる頃更に千金の賜を拜するに至る、而して賜ふ所の御書は驚鸞の如く回鳳の如く美麗である、臣等の蒼顔も白髪も良に光彩を生ずるを覺ゆ、臣が袖中には賜ふ所の驪珠の如き貴き名字は三十四ある、閣を退いて歸り來るとき車馬は已に喧闐である、争うて看る御賜の物銀鈎墨色の鮮新なるを、人間に一日の中萬人の口に傳ふ、殊に喜んで見る雲章の第一篇を、玉堂に退下して來れば玉堂は晝掩うて文書靜である、鈴索も動かす鐘漏も悠悠と永きを覺ゆ、他は言ふこともならぬ筆を數行の書に弄すと、數行の書を弄するは、畢竟時平かなるは聖主の故であると信するに由る、犬羊の屬散盡して沙漠は清空である、捷烽は屢は甘泉宮に到達する、英雄が指揮して上郡を築く時の聲を今も猶ほ聞くが如くである、已に覺ゆ一談一笑の中に西戎は無きことを、文思の天子と文思の太后とのみ存在る、終に玉門關を鎖して征伐することを罷む、小臣は願はくは紫薇花に對して、試みに草せんと思ふ尺書にて贊普を招致せんことを、

【餘論】此の篇六たび韻を換へて作る、紀評を譯して載せて見ん、御書を賜ふ詩、天下無事、四夷畢く服す、以て翰墨に従容すべきの意を敘す、篇末云云、蓋し事に因つて諷諫す、三百篇の遺意なり、人之を笑うて曰く甚の道理有りてか、説いて陝西報捷に到るや、豈詩を以て論すべけんや、渠をして



之これを爲つくらしめば、定さだんで祇ただ寫し字じ詩しを作つくらん、此この段だん詩しに於おて極きまめて發はつ明めいあり、而しかうして補ほ注ちゅう未まいだ載さい入にせ  
ず、吟いん謂いふ、或ある者ものの笑わらひ、固もとより未いまだ詩し人じん立り言げんの旨ねを識しらず、所い謂ゆる、作し詩し必かならず此こ詩しとすものなり、  
然しかれども竟つひに自じ己こに就ついて結けつ一いつ筆ひつを作つくり、本ほん題だいを回くわい顧こせず、亦また究きまめて是これ法はふに疎そ、此この處ところ縈えい繞ぎょう御ぎよ書しよ一  
筆ひつ、原もと力ちからを費つひさず、何なんぞ勢いきまひを趁おうて一たい帶わん緡が合ふ結けつを作つくらざるやと、

和王晉卿

王晉卿に和す

元豐二年予得罪貶黃州。而駙馬都尉王誥亦坐累遠謫。不相聞者七  
年。予既召用。而誥亦還朝。相見殿門外。感嘆之餘。作詩相屬。詞雖不甚  
工。然托物悲慨。阨窮而不怨。泰而不驕。憐其貴公子。有志如此。故和其  
韻。欲使誥姓名附見予詩集中。然亦不以示誥也。誥字晉卿。功臣全斌  
之後云。

【訓讀】元豐二年予罪を得て黃州に貶せらる、而して駙馬都尉王誥も亦坐累遠謫せらる、相聞せざる  
もの七年、予既に召用せられ、誥も亦朝に還る、殿門外に相見る、感嘆之餘、詩を作りて相屬す、詞  
は甚だ工ならずと雖も、然れども物に托して悲慨、阨窮して怨みず、泰にして驕らず、憐む其れ貴公  
子、志ある此の如し、故に其の韻に和し、誥が姓名を予が詩集中に附見せしめんと欲す、然れども

亦以て誥に示さざるなり、誥字は晉卿、功臣全斌の後と云ふ、

先生飲東坡。獨舞無所屬。  
當時挹明月。對影三人足。  
醉眠草棘間。蟲虺莫予毒。  
醒來送歸雁。一寄千里目。  
悵然懷公子。旅食久不玉。  
欲書加餐字。遠託西飛鶴。  
謂言相濡沫。未足救溝瀆。  
吾生如寄耳。何者爲禍福。  
不如兩相忘。昨夢那可逐。  
上書得自便。歸老湖山曲。  
躬耕二頃田。自種十年木。  
豈知垂老眼。對此金蓮燭。

先生東坡に飲み、獨舞して所屬無し、  
當時明月に挹み、影に對して三人足る、  
醉眠す草棘の間、蟲虺予を毒する莫し、  
醒め來つて歸雁を送り、千里の目を一寄す、  
悵然として公子を懷ふ、旅食久しく玉ならず、  
加餐の字を書せんと欲し、遠く西飛の鶴に託す、  
謂つて言ふ相濡沫すと、未だ溝瀆を救ふに足らず、  
吾生寄るが如きのみ、何者か禍福と爲さん、  
如かず兩ながら相忘るるに、昨夢那ぞ逐ふ可けんや、  
上書して自便を得、湖山の曲に歸老す、  
躬耕す二頃の田、自ら種う十年の木、  
豈知らんや垂老の眼、此の金蓮燭に對するを、



公子亦生還。仍分刺史竹。  
賢愚有定分。尊俎守尸祝。  
文章何足云。執技等醫卜。  
朝廷方西顧。羌虜驕未伏。  
遙知重陽酒。白羽落黃菊。  
羨君眞將家。浮面氣可掬。

【自注】袁天綱謂寶軌君。語則赤氣浮面。爲將勿多殺人。

何當請長纓。一戰河湟復。

何か當に長纓を請ひ、一戦して河湟復すべき。

【字解】「一」對影。李白の詩に、舉杯邀明月、對景成三人とある、「二」英子壽。左傳晉文公の語、「三」千里目。唐の王之渙の詩、欲窮千里目、更上一層樓とある、鮑明遠の詩に、遠極千里目とある、「四」旅食。杜甫の詩に、旅食京華春とある、「五」不玉。晉の王濟傳に、濟遊服玉食とある、王濟は晉の駙馬、則ち之を王晉卿に用ふる、「六」歸老。黃州より請うて汝州に移る、「七」金蓮燭。「唐摭言」に、令狐趙公、大中初、常便殿召對、夜艾方罷、宣賜金蓮花、送歸院、院使以下、莫不驚異、金蓮花燭柄耳、唯至尊方有之とある、「八」刺史竹。王晉卿は登州刺史より、文州團練使駙馬都尉に復し、公は汝州に移る、「九」尊俎。「莊子逍遙游篇」に、庖人雖不治庖、尸祝不越俎、而代之とある、「一〇」等醫卜。司馬遷の書に、文史星歷近乎卜祝之間とある、「一一」白羽。太白の九日登巴陵、望洞庭水軍一詩に、白羽落酒尊とある、「家語」に、子路曰、赤羽若日、白羽若月、蓋言箭羽也、「一二」浮面。公の自注に、袁天綱、寶軌君に謂ふ、語れば則ち赤氣面に浮ぶ、將と爲つて多く人を殺すこと勿かれと、「唐書袁天綱傳」に、見寶

軌曰、君方語氣、浮入於大宅、若將、必多殺人、願自戒とある、「一三」請長纓。「漢書終軍傳」に、願請長纓、以羈南越王、而致之闕下、「一四」河湟復。杜牧の詩に、文思天子復河湟とある、次公曰く、唐は代宗の永泰より後、隴右悉く吐蕃に陥る、故に杜牧此の語あり、查慎曰く、「元和郡縣志」に、隴右道鄯州有湟水、名湟河、亦謂之樂都、水東南流至蘭州、西南入黃河とある、杜甫の詩に、每惜河湟棄とある、

【題義】公は元豐二年を以て黃州に貶せらる、王晉卿も連坐の罪を以て武當に貶せらる、公は元豐八年即ち元祐元年を以て罪を赦され京に還るに及んで、偶然殿門外に於て王晉卿と出會する、七年間互に消息も無く過ぎて今茲に出會する、感慨の深きものを以て王晉卿が作られたる詩に和して此の詩を作られしものである、

【詩意】先生は今黃州の東坡に在つて酒を飲む、獨飲にして獨舞、何物にも屬する所は無い、當時や天上の明月に對して抱むのみであれば、我と我が影と月との三者のみである、而して酔ふときは草棘の間に眠を取る、蟲虺の類も幸に予に毒を加へることはしない、醉が醒むる時は雲外の歸雁を送りて、千里の遠方まで此の兩目を寄せる、それは何の爲である、悵然として公子を懷ふからである、思ふに君も旅食の間は其の膳に上るものも疎末なるもので美食は出來ないであらう、加餐の文字を書して、遠く彼の西飛の鶴に託して吾が志を謂はんと思ふ、要は我が力は一滴の濡沫の如きものである、一滴の濡沫を以て、誰か溝瀆の如き大なる罪を救ふことが出來ようぞ、又考ふるに吾生は畢竟は寄せるが如き卒忽のみ、何者か禍にて何者か福であるか、禍福の如きものは忘るるがよい、要するに



昨日の夢逐ふも詮は無い、我は上書して聊か自便なるを得た、乃ち常州湖山の曲に歸老して、二頃の田畝を躬耕するのみならず、十年も先きを考へて種樹法などを講究する、豈料らんや此の垂老に及びし眼を以て、天上の此の金蓮燭に對する榮光を得んとは、然るに公子も亦生還せられて、仍ほ共に同じく刺史たるの竹符を分たんとは、人生の賢愚は固より定分ある、其の定分を知れば、尊俎を奉ずる役なら尸祝として其の事を正直に守るがよい、文章の佳悪なぞ何ぞ云ふに足らんや、其の技たるや醫者が方を求め卜者が筮を執ると擇ぶ所はない、朝廷より今西を顧みれば、西方の羌虜は驕つて未だ朝廷に服従せざるのである、遙に知る重陽の酒も、征士等は白羽を黃菊に落して飲んで居るものであらうぞ、羨む所君は將家の出で文家の出ではない、然らば如何にも武人の氣が面に浮んで擲すべきものがある、知らず何の日か君が長纓を請うて、一戦して直ちに河湟を回復することを、

【餘論】 紀曉嵐曰く、觀三亭與詩、東坡於三晉卿、不甚傾倒、以三其相攀附、而與之交耳と、眞に此の評の如く思はる、殊に末句數字に至りては皮肉極まる語である、傾倒せる人に對して、此の如き語を吐くことは出来ぬ、

謝王澤州寄長松兼簡張天覺二首

王澤州が長松を寄せられたるを謝し、兼ねて張天覺に簡す 二首

莫道長松浪得名。道ふこと莫かれ長松浪に名を得と、

能教覆額兩眉清。能く覆額兩眉を清からしむ、  
便將徑寸同千尺。便ち徑寸を將て千尺に同じうす、  
知有奇功似茯苓。知る奇功の茯苓に似たる有るを、

茅、〔二〕茯苓 前に辨ぜり、

【題義】 王澤州が長松を寄贈せられたるを謝して、兼ねて此の詩を以て張天覺に簡示せられたのである、

【詩意】 道ふこと莫かれ長松は浪に得たる名であると、之を服して眉毛の落ちたるが又青く生えたる例がある、僅に徑寸の小なるも千尺の大なると同じ、其の奇功は茯苓を服すると又似たるものがある、

〔二〕

〔二〕

憑君說與埋輪使。

君に憑つて埋輪使に說與す、

速寄長松作解嘲。

速かに長松に寄せて解嘲を作れ、

【自注】送張天覺詩。有埋輪及河東懷之語。

無復青黏和漆葉。

復た青黏の漆葉に和する無く、

古今體詩 謝王澤州寄長松兼簡張天覺二首

三五三

近世有患大風疾者、自分必死、入五臺山、遇一異僧、以長松草令服、而兩眉再生云、蓋觀世音所化也と、查慎曰く「本卿」長松産古松下、服之長年、功同松脂及仙

【字解】 〔一〕解嘲 漢の揚雄、太玄を草す、人嘲けるに玄尙ほ白を以てす、雄之を解して解嘲を作る、  
〔二〕青黏 一名は地戸、一名は黃芝、一名は女萎、「三國志華陀傳」に、



枉將鍾乳敵僊茅。枉まげて鍾乳しゅうにゅうを將もて僊茅せんぼうに敵てきせん、

鍾乳 方解石が石灰洞内にて氷柱の如く垂下するもの、鍾乳石とも石鍾乳とも云ふ、【四】僊茅 其の根獨生、一名婆羅門參、「能改齋漫錄」に云ふ、明皇服鍾乳不效、開元婆羅門僧、進僊茅、服之有效と、

【詩意】君に憑んで埋輪使に説與することがある、速かに長松に寄托して解嘲の賦を作り玉へと、青黏も功はあるが漆葉に和するの勞力がある、鍾乳が僊茅に敵すると云ふものは枉げて云ふことである、

次韻劉貢父所和韓康公憶持國二一首

劉貢父が韓康公の持國を憶ふに和せらるるに次韻す 二首

夢覺眞同鹿覆蕉。夢覺眞むかくしんに鹿覆蕉ろくふせうに同じ、  
相君脫履自參寥。相君履しゅうくんしを脱だつし自おのづから參寥さんれう、  
顏紅底事髮先白。顏紅がんくねなにして底事なにごとぞ髮先はつまつづ白しろきや、  
室邇何妨人自遙。室しつの邇ちかき何なんぞ妨さまたげ人ひと自おのづから遙はるかなるを、  
狂似次公應未怪。狂きやうじは次公じこうに似にて應まさに未いまだ怪あやしまざるべし、

【字解】一 夢覺 「列子周穆王篇」を譯示する、鄭人野に薪とるものあり、駭鹿に遇ふ、御へて之を撃ちて之を斃す、人之之を見んことを恐るるや、遂て諸を陸中に藏し、之を覆ふに蕉を以てす、其の喜に勝へず、俄かにして其の藏せる所の處

醉推東閣不須招。醉みひは東閣とうかくを推おして招まねくを須もちひず、

醉は東閣を推して招くを須ひず、

援毫欲作衣冠表。毫ごうを援たすつて衣冠いぐわんの表へうを作つくらんと欲ほつす、

毫を援つて衣冠の表を作らんと欲す、

盛事終當繼八蕭。盛事終せいじつひに當まさに八蕭はつせうに繼つぐべし、

盛事終に當に八蕭に繼ぐべし、

【自注】唐蕭氏自瑀及遼八宰相。

を遣る、遂に以て夢と爲し、塗に順うて其の事を味す、傍に人の聞くものあり、其の言を用ひて之を取り、既に歸りて其の室人に告げて曰く、向きに薪とるもの、夢に鹿を得て、其の處を知らず、吾今之を得たり、

彼は直に眞に夢みる者なり、室人曰く、若將た是れ夢に薪とる者の鹿を得るを見たるか、誰ぞ薪とるものあらんや、今眞に鹿を得たり、是れ若の夢眞なるか、夫曰く吾據りて鹿を得、何を用つて彼の夢、我の夢なるを知らんや、薪とる者の歸るや、鹿を失へるに厭かず、其の夜眞に之を藏せる處を夢む、又之を得るの主をも夢む、爽且夢みし所を案じて尋れて之を得、遂に訟へて之を争ひ、之を士師に歸す、士師曰く若初め眞に鹿を得て、妄りに之を夢と謂ひ、眞に夢みて鹿を得、妄りに之を實と謂ふ、彼眞に鹿を得て若と鹿を争ひ、室人又夢に人の鹿を認めたるにて、人の鹿を得たること無しと謂ふ、今此の鹿あるに據つて、請ふ之を二分せんと、鄭君に以聞す、鄭君曰く嘻士師將に復た夢に人の鹿を分たんとするかと、之を國相に問ふ、國相曰く、夢と夢ならざるとは臣が辨する能はざる所なり、覺夢を辨せんと欲せば、唯黃帝と孔丘のみ、今黃帝孔丘無し、誰か之を辨せんや、且らく士師の言に徇うて可なり、【二】相君 「史記范雎傳」に、天下之事、皆決於相君とある、宰相を謂ふ、【三】脫履 「史記封禪書」に、於是天子曰、嗟乎吾誠得如黃帝、吾視去妻子、如脱躍耳とある、【四】參寥 「莊子太宗師篇」に、玄冥聞之參寥、注曰參高也、高邈寥曠、不可名也とある、馮應榴は莊子を引くは誤りと謂ふ、誤りと謂ふ者の誤りである、【五】室邇 「詩」に、其室則邇、其人甚遠とある、【六】次公 「前漢書蓋寬饒傳」に、字次公、爲司隸校尉、平恩侯許伯、入第、丞相御史將軍中二千石皆賀、寬饒東鄉特坐、許伯自酌曰、蓋君後至、寬饒曰、無多酌我、我乃酒狂、丞相魏侯笑曰、次公醒而狂、何必酒也とある、【七】東閣 「漢公孫宏傳」に、至宰相封侯、於是開東閣、以延賢人とある、【八】八蕭 公の自注に、唐の蕭氏瑀より遼に及ぶ、八たび宰相と、「唐書蕭禹傳贊」に、蕭氏興江左、有功在民、餘社及其後裔、自瑀逮遼凡八葉宰相とある、



【題義】韓康公は持國を憶うて詩を作り、劉貢父が之に和し、坡公が又之に次韻して作れるもの、韓絳字は子華、康公に封せらる、韓維字は持國、即ち絳の弟、門下侍郎を經、太子少傅に上りて致仕せる人、

【詩意】夢も覺も眞に鹿覆蕉の事と同じ、相君が脱履することは自から空漠な次第である、顔面は紅潮を呈するが如きも髪は老人を證明して居る、室は邇けれども人の品格の遙に違ふは妨ぐるに及ばぬ、狂の次公に似たるは眞の狂ではない、毫も恠む理由はない、酔うて東閣を推開する彼より招かずとも至る、毫を援つて韓家の爲に衣冠の表を作らんと思ふ、韓家の盛事は終に當に唐の八蕭にも繼ぐべき貴きものである、

〔一〕

〔二〕

閉戸端居念獨深。 閉戸端居して念獨り深し、

小軒朱檻憶同臨。 小軒朱檻同臨を憶ふ、

燎鬚誰識英公意。 燎鬚誰か識らん英公の意、

黃髮聊知子建心。 黃髮聊か知る子建が心、

【自注】英公爲其姊作粥療鬚。曰吾與姊皆老矣能幾進之。

【自注】子建與楚王彪別詩云。王其愛玉體共享黃髮期。

【字解】〔一〕念獨深「前漢書陸賈傳」に、呂太后時、王諸呂、陳平患之、力不能爭、恐禍及己、平常燕居深念、賈往不請直入、座、陳平方念不見賈、賈曰何念深也、平曰、生揣我何念、賈曰足下位爲上相、食三萬戶侯、可謂極富貴、無欲矣、然有憂念、不謂患諸

已托西風傳絕唱。 已に西風に托して絶唱を傳へ、

且邀明月伴孤斟。 且つ明月を邀へて孤斟に伴ふ、

他時內集應呼我。 他時內集應に我を呼ぶべし、

下客先判醉墮簪。 下客先づ判す酔うて簪を墮すを、

且老、雖欲數進粥、尙幾何、勸封英國公、〔三〕黃髮、公の自注に曰く、子建楚王彪と別るる詩に云ふ、王其れ玉體を愛せよ、共に享けん黃髮の期と、〔四〕絶唱、梁元帝の詩に、南風且絶唱とある、〔五〕内集、「世説」に、晉謝安嘗内集俄而雪驟下とある、

【詩意】閉戸して端居せる公は憂念の深きものがある、其の小軒の朱檻に劉君が同臨せらるるを憶ふ、鬚を燎いて姉の爲にす、英國公にも康公の志は似て居る、黃髮に至るまで國に盡す子建が心にも似て居る、已に西風に寄托して絶唱の詩を傳へ、且つ明月を邀へて孤斟に伴ふこともある、他時に内集する時は必ず我を呼び召さるるであらう、堂を下るの客は先づ判する酔うて簪を墮すことを、

【餘論】紀曉嵐評して曰く、詞意淺迫、未必出自東坡一と、

上韓持國

韓持國に上る

韓氏三虎秉樞極

韓氏の三虎樞極を秉る、

【字解】

〔一〕三虎、宋史韓維傳



中有一虎似偉節。  
 端居隱几學無心。  
 夙駕入朝常正色。  
 犯時獨行太嶮巖。  
 回天不忌眞藥石。  
 輦致歸來荷二聖。  
 推排使至有衆力。  
 吾儕小人但飽飯。  
 不有君子何能國。  
 西湖醉臥春水船。  
 如何爲人作豐年。

中に一虎有り偉節に似たり、  
 端居して几に隱り無心を學ぶ、  
 夙に駕して朝に入り常に色を正しうす、  
 時を犯して獨行太だ嶮巖、  
 回天忌まず眞の藥石、  
 輦致歸來二聖を荷ふ、  
 推排衆力を有つに至らしむ、  
 吾儕小人但飽飯、  
 君子有らざるは何ぞ國を能くせん、  
 西湖醉臥す春水の船、  
 如何ぞ人の爲に豐年を作す、

に、維は兄の緯と弟の績と先後同じく樞府に在り、維屢ば諫諍あり、孔文仲、對策切直を以て罷めて歸る、維言す、臣恐らくは賢俊解體、忠良結舌すと、安石之を惡む、又後漢賈彪傳に、字は偉節、潁川定陵の人、彪兄弟三人、竝に高名あり、而して彪最も優る、故に天下稱して賈氏の三虎、偉節最怒と稱す、〔三〕無心「莊子天地篇」に、凡有首有趾、無心無耳者衆とある、〔三〕夙駕詩に、星言夙駕とある、〔四〕正色「公羊傳桓公三年」に、孔父正色而立於朝、則人莫敢過而致難於其君一者、孔父可謂義形於色一矣とある、〔五〕獨行 韓退之の伯夷頌に特立而獨行とある、〔六〕嶮巖 字

書に山曲の貌と注す、「史記相如賦」に、歲稔遺痍、隱隣鬱嶮とある、〔七〕回天「唐書貞觀四年」に、詔發卒治洛陽宮且東幸張元素上書諫、即詔罷役、魏徵嘆曰、張公論事、有回天之力とある、〔八〕藥石「左傳襄公二十三年」、美疾不如此惡石とある、「南史王僧孺傳」に、侍郎金元起、欲注素問、訪以砭石、僧孺答曰、古人嘗以石爲鍼、必不用鐵、山公注に曰く、「說文」有如此砭字、

許慎云、以石刺病也、東山經高氏之山多鐵石とある、〔九〕推排「晉書董京傳」に、或見推排罵辱、曾無怒色とある、「南史王僧虔傳」に、嘗有書教子曰、吾在世雖乏德、素復復推排人間二十許年、故是一舊物とある、推排は排斥と同じ、おしりぞける、又其の反對のおしりぞけらるるにも用ひらる、〔一〇〕吾儕 吾等と同じ、「左傳」に、吾儕小人、朝不及夕とある、〔一一〕能國「左傳文公十二年」に、不有君子、其能國乎とある、〔一二〕西湖 汝州の西湖、杭州の西湖ではない、〔一三〕春水船 杜子美の詩に、春水船如天上坐とある、〔一四〕豐年「世說」に、稱庾文康爲豐年、玉柳恭爲荒年とある、

【題義】韓億に八人の子がある、其の中の三人が樞相と爲る、持國が樞相の時此の詩を上るものである、

【詩意】韓氏の家の三人は三虎と敬稱せられ皆樞相と爲る、其の三虎の中の一虎は特に漢の偉節に人と爲りが似て居る、端居して几に隱るときは玄理を案じて無心を學ぶ、夙駕して朝に入るときは常に色を正して嚴格である、時流を犯して其の道を守ること獨行にして太だ嶮巖である、諤諤の論は他に忌まるるも眞の藥石を施するのである、輦を安穩にして歸來せしめて二聖即ち太后と哲宗とを呵護する、推排せられたるも遂には其の衆力を吾に致すに至る、退いて考ふる吾等小人は但飽飯するのみである、君子が有らざるは何ぞ國家を能くすることが出來ようぞ、西湖の上に醉臥して春水の船に悠游する、如何でか人の爲に豐年と作ることが出來ようぞ、

【餘論】此の篇二韻を以て成る、前八句は韓を稱する事を敘し、結末四句、自家の事を敘す、西湖の二句は蛇足に似たるの感あるも、是が無きときは作者としては不足の感があることと思はる、



次韻劉貢父叔姪扈駕

劉貢父叔姪が扈駕に次韻す

玉堂孤坐不勝清。

玉堂に孤坐して清きに勝へず、

長羨鄒枚接長卿。

長く羨む鄒枚の長卿に接せるを、

只許隔牆聞置酒。

只許す牆を隔てて置酒を聞くを、

時因議事得聯名。

時に議事に因つて聯名を得たり、

機雲似我多遺俗。

機雲は我に似て遺俗多く、

廣受如君不治生。

廣受は君の如く生を治せず、

共託屬車塵土後。

共に屬車を託す塵土の後、

鈞天一餉夢中榮。

鈞天一餉夢中の榮、

北院、新構小亭、種竹開窗、東通騎省、與李常侍、隔窗小飲作詩、乃知唐時西掖小窗作詩、以て東省に通するを、而して今日本省往來するを得ず嘆すべきなりと、【一】機雲、陸機と陸雲の兄弟、自身と子由を喻ふ、【二】遺俗、蔡邕が釋詁に、躡宇宙而遺俗兮とある、【三】廣受、前漢の疏廣と疏受の叔姪、廣は太傅と爲る、兄の子受は少傅と爲る、職を辭して家に歸る日、酒食を設けて、族人故舊と會合する、賓客問ふ、家に餘す金幾何あるかと、勸めて子孫の爲め田宅を買はしむ、廣が曰く賢にして財多きは則ち其の智を損じ、愚にして財多きは則ち其の過を益すと、【四】屬車、司馬相如傳に、犯屬車之清塵、應劭曰く、大駕屬車八十一乘と、【五】一餉、食事をするの短時間を云ふ、韓退之が醉贈張秘書詩に、長安兼富兒、盤饌羅羶葷、雖得一餉樂、有如一聚飛蚊とある、

とある、

【題義】劉貢父が叔姪二人共に駕に扈從しての詩を示さる、乃ち其の詩に次韻したのである、

【詩意】余は玉堂に孤坐して清氣に勝へざるものである、長く羨む君等叔姪は駕に扈して鄒枚が長卿に接したる昔の事を想像する、只許す牆を隔てて置酒談笑する聲を聞くことを、時ありては天下の議事に因つて同一聯名を得ることを、余等兄弟は機雲兄弟と同様に多く俗を遺却する、君等叔姪は廣受叔姪と同様に亦生計に頓著しない、身を今日屬車塵土の後に託するも、鈞天一餉するも、夢中の榮と達観する、

【餘論】律としての常法、坡公の集に在つては上乘とは言ひ難きものである、殊に不字犯するに於てをや、

次韻韓康公置酒見留

韓康公が置酒留めらるるに次韻す

庭下黃花一醉同。

庭下の黃花一醉同じ、

重來雪嘯已穹窿。

重來するに雪嘯已に穹窿、

不應屢費譏安石。

應に屢ば安石を譏るを費すべからず、

但使無多酌次公。

但多く次公に酌む無からしむ、

古今體詩 次韻劉貢父叔姪扈駕 次韻韓康公置酒見留

【字解】【一】鄒枚、前漢書、

梁孝王來朝、從鄒陽、枚乘、嚴忌之徒、相如見而說之、因病免、客梁從之游とある、【二】隔牆、公自から言ふ、元祐元年、余中書舍人と爲る、執政本省事多く漏泄するを患ふ、舍人廳後に於て露籬を作り、同省往來を禁せんと欲す、余執政に白す、應に須らく簡要清通なるべし、何ぞ必ず籬を樹て、棘を挿まん、諸公笑つて止む、明年竟に之を作る、偶々樂天集を讀む、云ふあり、西省

【字解】【一】雪嘯、嘯は絶嘯、層

嘯と成語して、けはしき山を謂ふ、【二】穹窿、高く弓形に曲る、【三】安石、晉謝安傳に、於土山營作樓館、林竹甚盛、每攜中外子姪、往來游集、肴饌亦費三百金、世頗以此



鍾乳金釵人似玉。 鍾乳金釵人玉に似、

鷓絃鐵撥坐生風。 鷓絃鐵撥坐に風を生ず、

少卿尙有車茵在。 少卿尙ほ車茵の在るあり、

頗覺寬容勝弱翁。 頗る覺ゆ寬容の弱翁に勝るを、

【詩意】 鷓は雞の一種、哀鳴を爲す、借りて以て琴弦の哀聲を形容する、【七】 鐵撥 鐵にて製せる撥を謂ふ、【八】 少卿 前漢の丙吉字は少卿、馭吏醉うて丞相の車上に嘔す、吉曰く第之を忍べ、丞相の車茵を汚すに過ぎざるのみと、【九】 弱翁 「漢書」魏相字弱翁、爲人嚴毅、不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>吉寬<sub>一</sub>とある、

【題義】 韓絳が坡公の爲め置酒して懽待せられ、坡公は韓が生活状態の浮華なるを敍べて作りしものである、

【詩意】 秋日は庭下の黄花に對し公と我と一醉を同じうす、今重ねて來れば時冬に逼り雪嶺が穹窿の形を現する、謝安石の如き豪傑は贅澤と譏らるるも一向に意としない、但酒に狂する者は次公をして多く酌ましめることはいかぬ、鍾乳や金釵は人玉の如く圓滿である、鷓絃を弄するに鐵撥を以てす坐に風を生ずるの概がある、少卿の大度量を懷く人は今日に在る、頗る覺ゆ其の寬容の海の如くなる弱翁に勝ることを知る、

【餘論】 律として人名を兩聯の外にも又用ふるは拙なるに似たるも、坡公の詩は二處に之を用ふる癖

がある、前首の扈駕の詩、及び此篇も然りである、坡公を口實として學ぶ人もあらんが、余は此の種の作法を嫌ふ、

韓康公坐上侍兒求書扇上二首

韓康公が坐上侍兒扇上に書せんことを求む 二首

窗搖細浪魚吹日。 窗には細浪を搖かして魚日を吹き、

手弄黃花蝶透衣。 手は黃花を弄して蝶衣に透る、

不覺春風吹酒醒。 覺えず春風酒を吹いて醒まし、

空教明月照人歸。 空しく明月をして人の歸るを照さしむ、

【字解】 〔一〕 透衣 一本に透衣に作る、透でなければならぬのである、韓康公事を謝する後、穎より京に入り、上元を見る、十六日に私第に會す、從官九人、皆門生故吏なり、方に坐するや、家妓十餘人を出して宴せしむ、康公が新に籠する者を魯生と曰ふ、舞に當りて遊蜂の盤す所と爲る、康公甚だ憚ばす、久しうして呼び出し、白扇を持して東坡に詩を乞はしむ、坡乃ち窗搖細浪魚吹日、手弄黃花蝶透衣と書す、上句は姓を記し、下句は蜂の事を書す、康公大に喜ぶ、坡云ふ、惟恐らくは他姫斯頼せん、故に云ふのみ、以上の説「侯鯖錄」に出づ、

【詩意】 窗に細浪を搖かすは是れ魚の日を吹く爲である、手に黃花を弄すれば蝶は衣に透る、覺えず春風に酒を吹き醒まされて、早や黃昏に臨み明月が空しく人の歸るを照らし送る、



一一窗扉面水開。 一一の窗扉水に面して開く、  
 更於何處覓蓬萊。 更に何の處に於てか蓬萊を覓めん、  
 天香滿袖人知否。 天香滿袖人知るや否や、  
 曾到旃檀小殿來。 曾て旃檀小殿に到りて來る、

【字解】 一一 旃檀。「首楞嚴經」に、佛告阿難、汝嗅此旃檀、一鉢四十里内、同時開氣とある、

【詩意】 四面の窗扉が一一水に面して開く、同様の景色なれば蓬萊を覓むるに何處よりすると云ふことを知らない、天香は滿袖であるが他人は知るを得まい、箇は是れ旃檀小殿上より得來るのである、

【餘論】 此の二首は或本には有り、或本には無し、是の故に坡詩の眞であるや否やを疑ふものもあらんが、余は坡公が眞と認めるのである、魯生の魯の字を分割して魚吹日などと用ふること坡公が慣用の妙手、蜂が螫すなどは言はずして蝶透衣と言ふ詩を解する者をして喜ばしむるの神力は、實に不可思議と思ふ程である、費袞が梁谿漫志卷四に於て曰ふ、東坡詞源、如長江大河、洶涌奔放、瞬息千里、可駭可駭、而於用事對偶、精妙切當、人不可及と評するは、是も亦切當の語である、但し前首、吹日、吹酒、吹字を犯せるは後世刊本の誤と思ふ、

雜詩

雜詩

昔日雙鴉照淺眉。 昔日雙鴉淺眉を照らす、  
 如今婀娜綠雲垂。 如今婀娜として綠雲垂る、  
 蓬萊老守明朝去。 蓬萊の老守明朝去る、  
 腸斷簾間蟋蟀悲。 腸は斷ゆ簾間蟋蟀の悲むに、

【餘論】 此の篇も眞僞判じ難いのである、蟋蟀悲の三字を一本には總繚時に作る、馮應榴は粹繚時の訛ならんと論ず、要するに深く論ずるものではない、紀曉嵐は、宋氣太重と評したるが、評する程度のものではない、

次韻王都尉偶得耳疾

王都尉が偶ま耳疾を得るに次韻す

君知六鑿皆爲贅。 君は知る六鑿の皆贅たるを、  
 我有一言能決疣。 我に一言有り能く疣を決す、  
 病客巧聞牀下蟻。 病客は巧聞す牀下の蟻、  
 癡人強觀棘端猴。 癡人は強觀す棘端の猴、

【字解】 一 六鑿。喜怒哀樂愛惡の六情を謂ふ、「莊子」に、心無天游、則六鑿相攘とある、二 決疣。「莊子大宗師篇」に、彼以生爲附贅懸疣、以死爲決疣潰癰とある、疣は即ち癰疽の類、「莊子」に、



聰明不在根塵裏。  
聰明は根塵の裏に在らず、  
藥餌空爲婢僕憂。  
藥餌は空しく婢僕の憂と爲る、  
但試周郎看聾否。  
但周郎の看聾を試むるや否や、  
曲音小誤已回頭。  
曲音小しく誤れば已に回頭、

決疣と有りて、今決疣と爲すは馮應榴は別有本と疑を存して居るが、郵學の狀態笑ふ可し、疣は俗の「イホ」小瘡である、「三」牀下蟻前の見戲耳聾詩に於て辨ぜり、「四」瘡人 舊注に「世説」を引く、世説と

關係は無し、唯是れ一般の癡人である、「五」強觀 觀は何視也と注してコツツリ視るのである、「六」棘端猴 「韓非子」に、燕王好微巧、衛人曰、能於棘刺之端爲母猴とある、「七」根塵 六根と六塵、形相が有りて小兒でも見るを得るもの、「八」周郎 「三國志」に、吳周瑜字公瑾、精意於音樂、雖三爵之後、其有闕誤、必知之、知之必顧、故時諺曰、曲有誤周郎顧とある、

【題義】 王都尉が偶ま耳疾を得て詩を作り示されたるを次韻したるものである、

【詩意】 君は已に知る六鑿の皆贅であることを、我は一言ありて能く疣を決するであらう、耳を病んだ客は巧みに牀下に蟻が行く聲を聞く、又理に暗き癡人は強ひて棘端を奔る猴を覷んと欲する、元來聰明の人は根塵の裏に相を認めない、藥餌は空しく婢や僕の勞憂する所と爲る、昔周郎は耳聰にして酒を少しく飲んだ後でも、人の曲を奏するに誤りあれば回頭して訝る、

【餘論】 慰安の爲の詩であるか、或は詩の優劣を争はん爲であるか、要するに此點は明かではない、爲贅、爲婢、爲字を犯す、而して蟻と裏と否と悉く上聲 四紙の韻に屬す、正法であるか、不正であるか、唐賢には無き所である、余は後人が坡公を以て例と爲すを恐るのみ、

送喬全寄賀君六首

喬全を送り、賀君に寄す 六首

舊聞靖長官。賀水部。皆唐末五代人。得道不死。章聖皇帝東封。有謁於道左者。其謁云。晉水部員外郎賀亢。再拜而去。上不知也。已而閱謁見之大驚。物色求之不可得。天聖初。又使其弟子喻澄者。詣闕進佛道像。直數千萬。張公安道與澄游。具得其事。又有喬全者。少得大風疾。幾死。賀使學道。今年八十益壯盛。人無復見賀者。而全數見之。元祐二年十月。全來京師。十許日。余留之。不可曰。賀以上元期我於蒙山。又曰。吾師嘗游密州。識君於常山道上。意若喜君者。作是詩以送之。且作五絕句。以寄賀。

【訓讀】 舊聞く靖長官、賀水部、皆唐末五代の人、道を得て死せず、章聖皇帝東封するや、道左に謁する者あり、其謁に云ふ、晉の水部員外郎賀亢と、再拜して去る、上知らざるなり、已にして謁を閲して之を見て大に驚き、物色して之を求むるも得べからず、天聖の初、又其の弟子喻澄といふ者をして、闕に詣で佛道の像を進めしむ、直數千萬、張公安道、澄と遊び、具さに其の事を得、又喬全といふ者あり、少にして大風疾を得、幾んど死せんとす、賀道を學ばしむ、今年八十益壯盛、人復た賀を見



るもの無し、而して全は數ば之を見る、元祐二年十二月、全京師に來る、十許日、余之を留む、可かずして曰く賀上元を以て、我を蒙山に期すと、又曰く吾師嘗て密州に遊び、君を常山道上に識る、意君を喜ぶもの若しと、是の詩を作り以て之を送る、且五絶句を作り、以て賀に寄す、

君年二十美且都。

君年二十美にして且つ都、

初得惡疾墮眉鬚。

初め惡疾を得て眉鬚墮つ、

紅顏白髮驚妻孥。

紅顏白髮妻孥を驚かす、

覽鏡自嫌欲棄軀。

鏡を覽て自ら嫌ひ軀を棄てんと欲す、

結茅窮山啖松腴。

茅を窮山に結んで松腴を啖ふ、

路逢逃秦博士盧。

路に秦を逃るる博士盧に逢ふ、

方瞳照野清而癯。

方瞳野を照らし清にして癯、

再拜未起煩一呼。

再拜して未だ起たず一呼を煩はす、

覺知此身了非吾。

覺知す此の身了に吾にあらず、

炯然蓮花出泥塗。

炯然として蓮花泥塗を出づ、

隨師東游渡濰州。

師に隨つて東游濰州を渡る、

【字解】 一 美且都 詩に洵美

且都とある、二 啖松腴 「抱朴

子」に曰く、上黨に趙瞿と云ふ者あり、癯を病み年衆を歴、死に垂んとす、或人云ふ、活きながら之を流棄するに如かず、然らざれば子孫轉た相注易すと、其の家乃ち糧を齎らし送りて山穴の中に置く、瞿穴中に在つて、自から不幸を怨み、悲嘆涕泣月を經、仙人あり穴を過ぎ見て之を哀み、具さに之を問訊す、瞿其の異人なるを知り、乃ち叩頭自から陳し哀乞ふ、是に於て仙人靈藥を以て之に賜ひ、其の服法を教ふ、瞿之を服して百許日、瘡愈え顔色豊悅、肌膚玉澤なり、仙人又過ぎて之を視、瞿思

【自注】濰州水名

山頭見我兩輪朱。

山頭に我が兩輪の朱を見、

豈知仙人混屠沽。

豈知らんや仙人屠沽に混ざるを、

爾來八十胸垂胡。

爾來八十胸まで垂胡、

上山如飛嗔人扶。

山に上る飛ぶが如く人の扶くるを嗔る、

東歸有約不敢渝。

東歸約あり敢て渝らず、

新年當參老僊儒。

新年當に參すべし老僊儒、

秋風西來下雙鳧。

秋風西來して雙鳧下る、

得棗如瓜分我無。

棗を得て瓜の如く我に分つや無や、

【四】方瞳 「列仙傳」に、僊人の瞳子は三角である、【五】濰州 濰水と都水、【六】混屠沽 「後漢禰衡傳」に、欲使我從屠沽兒輩也とある、【七】垂胡 胡は領下の懸肉、乃ちシタケビ、ノドクビである、【八】雙鳧 前に辨せり、【九】得棗 「史記封禪書」に、李少君曰、臣嘗游海上、見安期生、食棗大如瓜とある、

【題義】 靖長官と賀水部は皆唐末五代の人であるが、道を得たるが故に死なない、章聖皇帝が東封せらるる時、道左に謁する者がある、其の人云ふ晉の水部員外郎賀充なりと再拜して直ちに去る、皇帝は氣が著かざりしも、其の事ありしを聞き、侍臣をして物色して之を求めしも、遂に行跡は不明



である、天聖の初に諭澄と云ふ者、賀の命であると稱して闕に詣でて佛像や道像の價數千萬なるを獻納する、安道と云ふ者諭澄と交遊ありて、具さに其の事を知つて居る、又喬全と云ふ者あり、少き時一身の自由を闕く病を得て死に逼る、是に於て夏充に道を學びて今は年八十である、が復た賀充を見る者はないが、喬全は數ば之を見る、元祐二年の十二月に喬全は京師に來り十餘日滯留せるが、余は猶ほ長く滯留させんと思へども、上元には蒙山に事あるが故に是非とも歸ると云ふ、乃ち詩六首を作る、一首は喬を送るが主旨、五首は賀に寄贈する爲に作るのである、

【詩意】君は年二十の頃美にして且つ都かである、偶然にも惡疾に罹りて眉も鬚も墮ちた、顔色は紅であるが頭髮は白くなりて妻孥は皆驚きしものである、鏡を覽て自分も其の容姿を嫌うて自死せんと思ふたが、茅屋を結んで窮山に松腴を啖うて方の外の道を學ぶ、其の時路にて秦を逃れて仙道を修する博士の盧に逢うた、是の人は方瞳にして野を照らす信に清癯なる相貌の人である、再拜して未だ起たざる間に仙人に一呼せられ、忽ち覺知する此の身は昨日の喬全とは全く別人であると、譬へて見れば炯然として蓮花が泥塗を超出せるが如くである、此れより其の師に隨從して東游瀛水と邺水を渡る、山頭より東坡が官に在つて此に住するを見、而かも東坡の方よりは仙人が屠沽に混居せらるるとは知らなかつた、爾來年八十に垂んとして容貌は全く仙である、山を上ること自由にして人の扶助するを嗔る位である、而かも東歸の約日は渝ることは出來ない、新年には蒙山にて老仙儒即ち其の師に參する禮がある、然らば明年秋風の吹く時節には再び其の足で下界を踏み、棗の瓜の如く大なる者を我輩に恵み玉ふや無や、

を我輩に恵み玉ふや無や、

(一)

(二)

生長兵間早脱身。

兵間に生長して早く身を脱し、

晚爲元祐太平人。

晩に元祐太平の人と爲る、

不驚渤海桑田變。

驚かず渤海桑田の變するに、

來看龜蒙漏澤春。

來り看る龜蒙漏澤の春、

之人一矣とある、(一) 龜蒙、龜山と蒙山、龜山は兗州泗水縣に在り、蒙山は沂州費縣に在り、皆魯地相連なる、東封の歷る所、(四) 漏澤、龜山の西南十餘里の處、

【字解】(一) 生長、「後漢光武紀」に、生長兵間、久厭武事」とある、(二) 太平人、柳子厚與蕭儔一書に、朝夕歌謠、使成文章、庶木鐸者、采取獻之法宮、增聖唐大雅之什、雖不得位、亦不虛爲太平

【詩意】武人の間に於て生長するも早く身を脱し、晩年は元祐太平時の人となる、渤海が桑田に變するは我と關係がないから驚くこともない、我は唯龜山と蒙山と漏澤との春を看賞するものである、

(三)

(二)

曾謁東封玉輅塵。

曾て謁す東封玉輅の塵、

幅巾短褐亦逡巡。

幅巾短褐亦逡巡す、

行宮夜奏空名姓。

行宮に夜奏するも空しく名姓、

【字解】(一) 玉輅、「周禮」に、王之五輅、一曰五輅」とある、(二) 行宮、アンガウ、天子出幸の時の假宮を謂ふ、ギヤウキヤと讀ますに宋



悵望雲霞縹緲人

垂楊幾處繞行宮とある、

音のアンケウと讀むの習慣である、唐の虚象の詩に、細紳終朝隨歩輦、

【詩意】賀君は曾て東封せられし玉輅の塵に謁せらる、其の時の服装は幅巾短褐にて天子に謁する禮服でないから逡巡せらる、行宮に向つて夜奏せるも空しく姓名のみを白す、是の故に天子は雲霞縹緲の人となりし君を悵望するのみである、

〔四〕

垂老區區豈爲身

微言一發重千鈞

始知不見高皇帝

正似商山四老人

今は微妙の言を謂ふ、〔二〕商山四老 漢の高祖の世、商山に隠れし四人の老人、東園公・夏黃公・甝里先生・綺里季・四人皆髮白し、故に四皓と稱す、查慎曰く眞宗東封の時、尙ほ未だ嗣あらず、劉修儀は、寵六宮を擅にす、年を踰えて李氏子を生む、修儀攘みて己より出づると爲し、後立てて太子と爲し之を賀す、伏誦道左は、先幾の兆あるを疑ふ、故に仁宗即位、復た弟子をして闕に詣てしむ、公が詩微言一發重千鈞、又商山四老が事を用ふ、必ず爲めにする所あり、泛引にあらざるなり、

【字解】〔一〕微言 微妙の言、

〔二〕微言 微妙の言、漢書藝文志に、仲尼没而微言絶、七十子喪而大義乖とある、列子說符篇に、人可與微言乎とある、

列子の意は微妙を言ふにはあらず、隱事あるも、露骨に言はざるの意、

【詩意】垂老の身を以て區區の言を吐くは一身の爲ではない、微言一たび發して實に千鈞の重味がある、今日は漢の高皇帝を見ざるも、商山の四皓に似て居る人は君である、

〔五〕

舊聞父老晉郎官

已作飛騰變化看

聞道東蒙有居處

願供薪水看燒丹

【詩意】舊くから聞いて居る父老は晉の郎官であると、然るに常人以外に飛騰變化せる状を見る、人の道ふを聞く東蒙山が其の居處であると、願はくは炊事の勞を執つて以て君が燒丹の術を見んと、

〔五〕

舊聞父老は晉の郎官と、

已に飛騰變化の看を作す、

聞くならく東蒙に居處有りと、

願はくは薪水を供して燒丹を看ん、

と、〔三〕燒丹 「抱朴子内篇」に、金丹燒之愈久、變化愈妙、食之令人不老不死とある、

【字解】〔一〕父老 賀を敬稱して謂ふ、

〔二〕供薪水 「南史陶潛傳」に、潛爲彭澤令、不以家累自隨、送一力給其子書曰、汝旦夕之費、自給爲難、今遣此力、助汝薪水之勞、此亦人子也、可善遇之

〔六〕

千古風流賀季眞

最憐嗜酒謫仙人

狂吟醉舞知無益

古今體詩 送喬全寄賀君六首

【字解】〔一〕賀季眞 賀知章字

は季眞、會稽の人、少うして四門博士と爲り、又太常博士と爲り、祕書監と爲り、艸隸に善く、詞章を巧に



粟飯藜羹問養神

し、名を開元天寶の間に馳す、晩年自から四明狂客と稱し、後千秋觀の

道士と爲り、年八十六を以て郷里に卒す、李白が對酒憶賀監詩に、四明有狂客、風流賀季真、長安一相見、呼我謫仙人、昔好杯中物、翻爲松下塵、金龜換酒處、却憶淚霑巾とある、【三】養神 劉禹錫の詩に、玉城山裏多靈藥、擺落功名且養神とある、

【詩意】千古の下に其の風流を思はせる賀季真、其の季真は酒を嗜むの謫仙人を最も憐む、而かも終身狂吟醉舞は遂に益なきを知る、粟飯や藜羹の疎食を以て養神の道を問ふの善きに及かずと知る、

【餘論】偶然だとは思へども、六首中四首は皆同韻にて作り、二首は各の別の韻を用ふ、寄する人賀姓なるが故に賀知章を出す、此等の事は古人用意の深きことなるを後人は知るの必要がある、

送家安國教授歸成都

家安國教授の成都に歸るを送る

別君二十載。坐失兩鬢青。

君に別れて二十載、坐して兩鬢の青きを失ふ、

吾道雖艱難。斯文終典刑。

吾道艱難と雖も、斯文終に典刑、

屢作退飛鷄。羞看乾死螢。

屢は退飛の鷄と作る、乾死の螢を看るを羞づ、

一落戎馬間。五見霜葉零。

一たび戎馬の間に落ちて、五たび霜葉の零つるを見る、

夜談空說劍。春夢猶橫經。

夜談空しく劍を説き、春夢猶ほ經を横ふ、

新科復舊貫。童子方乞靈。

新科舊貫に復し、童子方に靈を乞ふ、

須煩凌雲手。去作入蜀星。

須らく凌雲の手を煩はすべし、去つて入蜀の星と作る、

蒼苔高朕室。古柏文翁庭。

蒼苔は高朕の室、古柏は文翁の庭、

初聞編簡香。稍覺鋒鏑腥。

初めて編簡の香を聞き、稍覺る鋒鏑の腥、

岷峨有雛鳳。梧竹養修翎。

岷峨雛鳳あり、梧竹修翎を養ふ、

嗚呼應嶰律。飛舞集虞廷。

嗚呼嶰律に應じ、飛舞虞廷に集まる、

吾儕便歸老。亦足慰餘齡。

吾儕便ち歸老、亦餘齡を慰するに足る、

【字解】

【一】艱難 杜甫の詩に、世人共鹵莽、吾道屬艱難とある、【二】退飛鷄 「左傳僖公十六年」に、隕石於宋、隕星也、是月也、六鷁退飛過宋都とある、鷁は和名無し、水鳥にて高く飛んで、風に逢うて退く鳥、【三】乾死螢 杜甫の詩に、案頭乾死讀書螢とある、【四】說劍 「莊子說劍篇」に、有天子劍、有諸侯劍、有庶人劍とある、【五】橫經 劉孝綽の詩に、橫經參上庠とある、【六】新科 元祐の初に王安石が經義字說を禁ぜしを新科と云ふ、既にして經義と詩賦とを試む、之を復舊貫と謂ふ、【七】乞靈 「左傳哀公二十四年」、寡君欲徵福於周公、願乞靈於臧氏とある、【八】入蜀星 「後漢書李邵傳」に、和帝分遣使者、微服單行、觀採風謠、使者二人、當到益部、投邵侯舍、時夏夕露坐、邵指星示云、有二使星、向益州分野とある、【九】高朕室 「王註」に、嶰曰として曰く、今府學石室是也と、【一〇】文翁庭 今有古柏、處是也とある、【一一】鋒鏑 兵刃を鋒と爲し、箭鏃を鏑と爲す、

「史記始皇紀」に、收天下之兵、銷鋒鏑、鑄爲金人十二とある、【一二】岷峨 張平子が周天大象賦に、關岷峨之沃壤とある、李義山の詩に、雛鳳清於老鳳聲とある、【一三】嶰律 「呂氏春秋」に、黃帝令伶倫、取竹於嶰谿之谷、制十二箏、聽鳳凰之鳴、以